

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第226集

本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書

盛南開発事業関連遺跡発掘調査

盛 岡 市

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第226集

本宮熊堂 B 遺跡第 1 次発掘調査報告書

盛南開発事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であり、特に近年進行しつつある県都盛岡市の急速な都市化に対応する再開発事業はもっとも急がれるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整の下に開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛南開発事業による区画整理に先立ち、平成5年度に盛岡市からの委託を受け発掘調査した本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査の結果をまとめたものです。本宮熊堂B遺跡は雫石川が形成した沖積平野上に立地し、調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが発見されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力、ご援助を賜りました地権者の方々をはじめ、盛岡市、岩手県土地開発公社、地域振興整備公団、盛岡市教育委員会などの関係各位に衷心より謝意を表します。

平成6年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 高橋 令則

例 言

1. 本報告書は岩手県盛岡市本宮字稲荷3-20・4-2他に所在する本宮熊堂B遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、盛南開発事業による区画整理に伴って遺跡の一部が消滅するために、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会、盛岡市の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号および遺跡調査略号は次の通りである。
遺跡番号・略号 LE 16-2118・OKO-01
4. 調査面積は14,400㎡である。野外調査は平成5年4月7日から8月12日にわたって実施した。調査資料の整理作業は平成5年11月1日から平成6年3月31日まで実施した。
5. 発掘調査は伊東格・金子昭彦が担当した。室内整理作業および報告書の作成は伊東格が担当した。
6. 各種鑑定にあたっては下記の方をお願いした。
須恵器の胎土分析・火山灰の蛍光X線分析……三辻利一（奈良教育大学）
7. 野外調査にあたっては、盛岡市教育委員会および地元の方々の御協力をいただいた。
8. 本遺跡から出土した遺物および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序

例言

本 文

I. 調査にいたる経過	2	2. 掘立柱建物跡	46
II. 立地と環境	3	3. 柱穴列	49
1. 遺跡の立地と地形	3	4. 土坑	51
2. 遺跡の位置と環境	3	5. 溝跡	73
3. 基本層序	7	6. 遺構外の出土遺物	84
4. 周辺の遺跡	8	V. まとめと考察	89
III. 調査と室内整理の方法	11	付編. 分析・鑑定の結果	102
1. 調査方法	11	1. 本宮熊堂B遺跡出土火山灰の 蛍光X線分析	102
2. 室内整理方法	13	2. 本宮熊堂B遺跡出土須恵器の 蛍光X線分析	104
IV. 調査の結果	17		
1. 竪穴住居跡	17		

図 版 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 地形分類図	4
第3図 遺跡周辺の地形図	5・6
第4図 基本層序	7
第5図 周辺の遺跡	9・10
第6図 遺跡範囲・グリッド配置図	12
第7図 遺構配置図	15・16
第8図 RA 01 竪穴住居跡	18
第9図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—1 (1~9)	19
第10図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—2 (10~24)	20
第11図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—3 (25~32)	21
第12図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—4 (33~35)	22
第13図 RA 02 竪穴住居跡	24
第14図 RA 02 竪穴住居跡・出土遺物—1 (36~41)	25

第15図	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物— 2 (42~56)	26
第16図	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物— 3 (57~68)	27
第17図	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物— 4 (69~78)	28
第18図	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物— 5 (79~87)	29
第19図	RA 03 竪穴住居跡	31
第20図	RA 03 竪穴住居跡・出土遺物 (88~92)	32
第21図	RA 04 竪穴住居跡	33
第22図	RA 04 竪穴住居跡・出土遺物 (93, 94)	34
第23図	RA 05 竪穴住居跡	35
第24図	RA 05 竪穴住居跡・出土遺物— 1 (95~102)	36
第25図	RA 05 竪穴住居跡・出土遺物— 2 (103~107)	37
第26図	RA 05 竪穴住居跡・出土遺物— 3 (108~110)	38
第27図	RA 06 竪穴住居跡	39
第28図	RA 06 竪穴住居跡・出土遺物— 1 (111~122)	40
第29図	RA 06 竪穴住居跡・出土遺物— 2 (123~128)	41
第30図	RA 07 竪穴住居跡	42
第31図	RA 07 竪穴住居跡・出土遺物— 3 (129~136)	43
第32図	RA 08 竪穴住居跡	44
第33図	RA 09 竪穴住居跡平面・埋土断面	45
第34図	RB 01 掘立柱建物跡平面・埋土断面	47
第35図	RB 02 掘立柱建物跡平面・埋土断面	48
第36図	RC 01 柱穴列平面・埋土断面	49
第37図	RC 02・RC 03 柱穴列平面・埋土断面	50
第38図	RD 01 土坑平面・埋土断面	52
第39図	RD 02 土坑・平面・埋土断面・出土遺物 (137~138)	53
第40図	RD 03・04 土坑・出土遺物 (139~141)	55
第41図	RD 05・06 土坑・平面・埋土断面・出土遺物 (142~144)	57
第42図	RD 07 土坑平面・埋土断面・出土遺物 (145~149)	59
第43図	RD 08・09・10・11 土坑・平面・埋土断面	60
第44図	RD 12・13・14・15・16・17 土坑	63
第45図	RD 18・19・20・21・22・23 土坑・平面・埋土断面	66
第46図	RD 24・25・26・27 土坑・平面・埋土断面	68

第47図	RD 28・29・30 土坑・平面・埋土断面	70
第48図	RD 31・32・33 土坑・平面・埋土断面	72
第49図	RG 01・02・03 溝跡平面・埋土断面	74
第50図	RG 04 溝跡平面・埋土断面	75
第51図	RG 05・06 溝跡平面・埋土断面	77
第52図	RG 07・08・09・10 溝跡平面・埋土断面	80
第53図	RG 11・12 溝跡平面・埋土断面	81
第54図	RG 05・08 溝跡・出土遺物 (151~161)	82
第55図	RG 09・12 溝跡・出土遺物 (162~168)	83
第56図	遺構外出土遺物—1 (169~180)	85
第57図	遺構外出土遺物—2 (181~191)	86
第58図	遺構外出土遺物—3 (192~205)	87
第59図	遺構外出土遺物—4 (206~213)	88
第60図	竪穴住居跡の分類	93

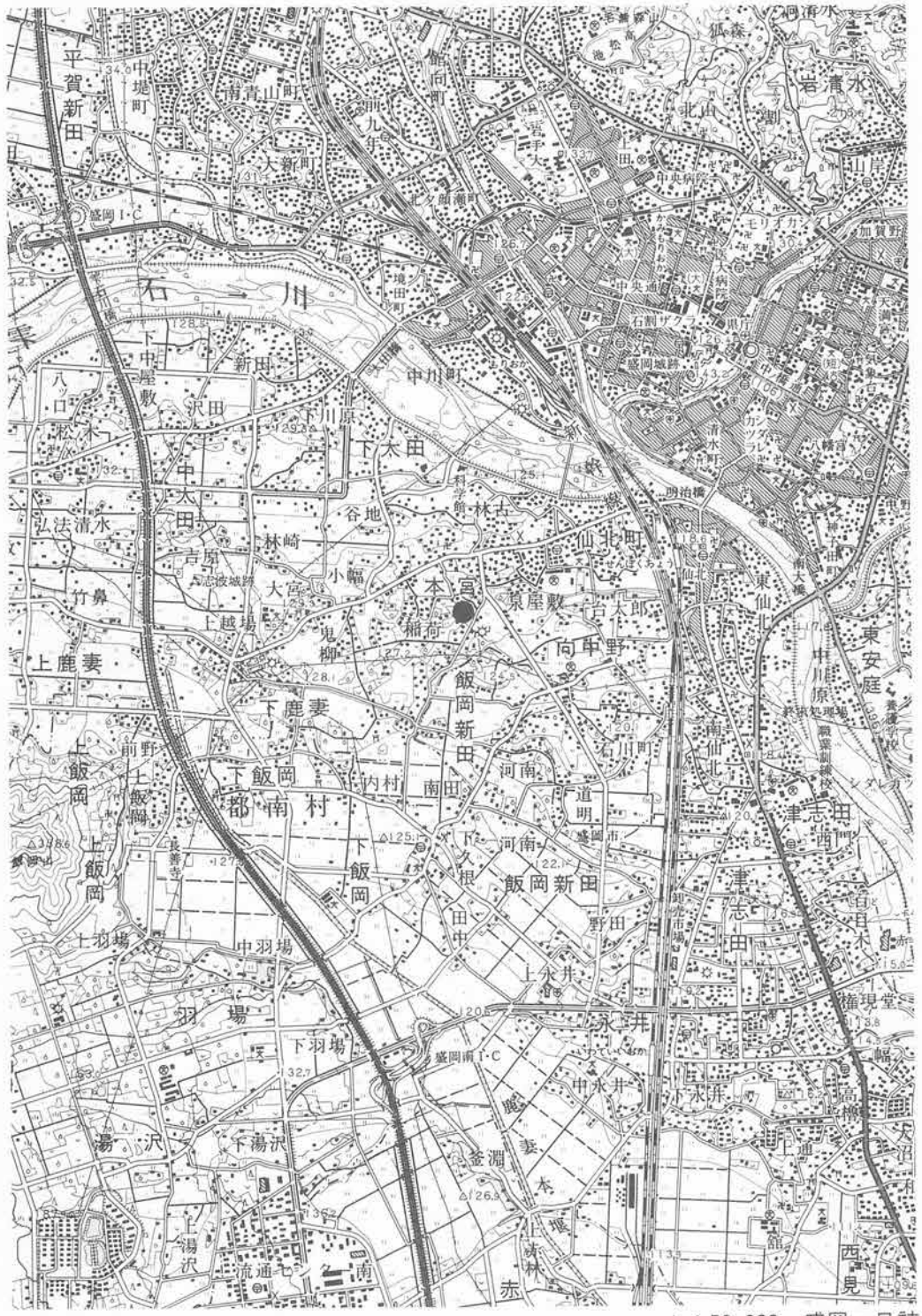
写真図版目次

写真図版1	遺跡全景 (空中写真)	107
写真図版2	基本層序 1, 2, 3	108
写真図版3	RA 01 竪穴住居跡	109
写真図版4	RA 02 竪穴住居跡	110
写真図版5	RA 03 竪穴住居跡	111
写真図版6	RA 04 竪穴住居跡	112
写真図版7	RA 05 竪穴住居跡	113
写真図版8	RA 06 竪穴住居跡	114
写真図版9	RA 07 竪穴住居跡	115
写真図版10	RA 08・09 竪穴住居跡	116
写真図版11	RB 01 掘立柱建物跡	117
写真図版12	RB 02 掘立柱建物跡	118
写真図版13	RC 01・02 柱穴列	119
写真図版14	RC 03 柱穴列, RD 01・02 土坑	120
写真図版15	RD 03・04・05・06 土坑	121
写真図版16	RD 07・08・09・10 土坑	122

写真図版17	RD 11・12・13・14 土坑	123
写真図版18	RD 15・16・17・18 土坑	124
写真図版19	RD 19・20・21・22 土坑	125
写真図版20	RD 23・24・25・26 土坑	126
写真図版21	RD 27・28・29・30 土坑	127
写真図版22	RD 31・32・33 土坑	128
写真図版23	RG 01・02・03・04 溝跡	129
写真図版24	RG 05・06・07・08 溝跡	130
写真図版25	RG 07・08・09・10 溝跡	131
写真図版26	RG 08・09・11・12 溝跡	132
写真図版27	遺構内出土遺物—1 (1~20)	133
写真図版28	遺構内出土遺物—2 (21~35)	134
写真図版29	遺構内出土遺物—3 (36~56)	135
写真図版30	遺構内出土遺物—4 (57~75)	136
写真図版31	遺構内出土遺物—5 (76~87)	137
写真図版32	遺構内出土遺物—6 (88~105)	138
写真図版33	遺構内出土遺物—7 (106~110)	139
写真図版34	遺構内出土遺物—8 (111~128)	140
写真図版35	遺構内出土遺物—9 (129~141)	141
写真図版36	遺構内出土遺物—10 (142~153)	142
写真図版37	遺構内出土遺物—11 (154~168)	143
写真図版38	遺構外出土遺物—1 (169~188)	144
写真図版39	遺構外出土遺物—2 (189~205)	145
写真図版40	遺構外出土遺物—3 (206~213)	146

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	8
第2表	本宮熊堂B遺跡出土環形土器観察表	96・97・98・99
第3表	本宮熊堂B遺跡出土甕形土器観察表	99・100・101
第4表	本宮熊堂B遺跡出土土製品観察表	101
第5表	本宮熊堂B遺跡出土鉄製品観察表	101
第6表	本宮熊堂B遺跡出土古銭観察表	101



1 : 50,000 盛岡・日誌

第1図 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発整備事業は、盛岡市がきたるべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、盛岡市の既成市街地の他に盛岡市南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の3者で地域振興整備公団に対し平成2年9月に事業要請され、事業要請を受けた地域振興整備公団は事業実施基本計画を作成し、平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から認可され、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間として、面積約320haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

事業の対象地域に係る埋蔵文化財の取扱については協議が重ねられ、その結果、本調査に先立って盛岡市教育委員会が試掘調査を行って、本調査を必要とする範囲を確定することとし、本調査は財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成5年度の事業として確定した。それを受けて、平成5年4月1日付けの契約によって当文化振興事業団の受託事業として本調査を実施することとした。

II. 立 地 と 環 境

1. 遺跡の立地と地形

本遺跡の所在する盛岡市は岩手県を南北に貫いて流れる北上川の中流域の北端に位置し、北は滝沢村・玉山村、東は岩泉町、川井村、南は矢巾町、紫波町、大迫町、西は雫石町と境を接している。北上川は全長249km、流域面積10,150km²の東北一の大河で、岩手県岩手郡御堂にその源を発するが、盛岡で雫石川と中津川を合わせて大河となる。北上川は中流域の右岸においては新第3紀層の砂岩、凝灰岩を基盤とする台地、扇状地の末端に浸食崖を形成する。同川は盛岡市仙北町で奥羽山脈の横岳に源を発する雫石川と合流し、北上盆地を形成する。北上盆地は北上川と雫石川をはじめとするその支流が開析したものであり、雫石川も、南川、諸葛川などを支流とする全長33.2kmの一級河川である。

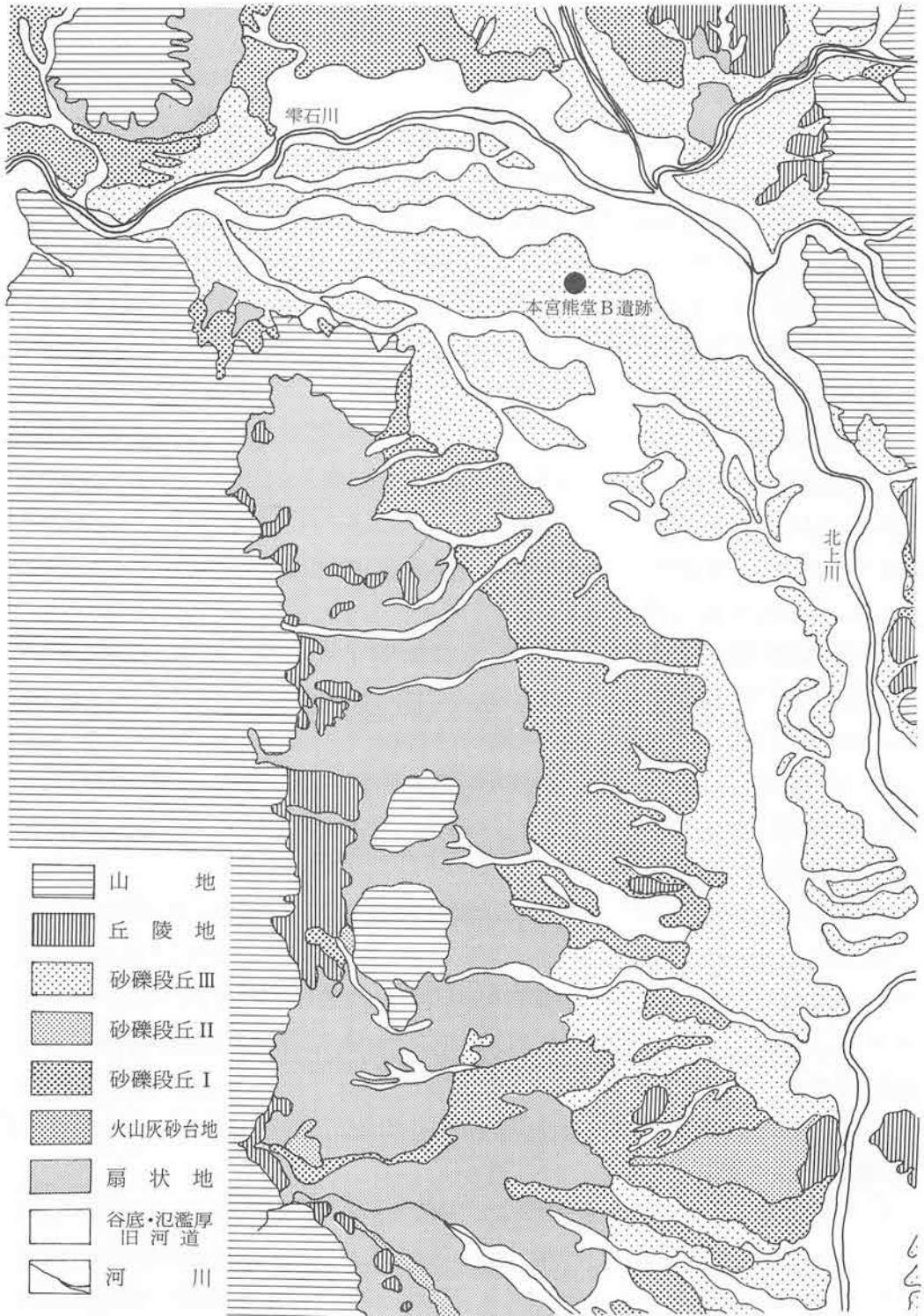
北上川に注ぐ支流のうち、大きな河川はほとんどが奥羽山脈に源を持つことから、奥羽山脈支流から運び込まれる砂礫量は、北上山脈支流から運ばれるそれに比べて著しく多く、北上川の西では大小の段丘や扇状地、河岸平野および起状量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となって、古来から人々に生活の場を提供してきた。

この北上盆地の持つ特徴は盛岡市周辺でもそのまま現れ、北上山地支流である中津川や梁川は開析平野をその流域にほとんど作り出していないが、奥羽山脈支流である雫石川は太田地区から飯岡地区にかけて扇状地状の広い平坦地を作り出している。これらの平坦地の大部分は扇状地や旧河床が段丘化したものであり、中川久夫氏らは高位の石鳥谷段丘、中位の二枚橋段丘、低位の花巻段丘・都南段丘に区別している。本遺跡の立地する本宮地区も雫石川の右岸に形成された沖積段丘上にある。

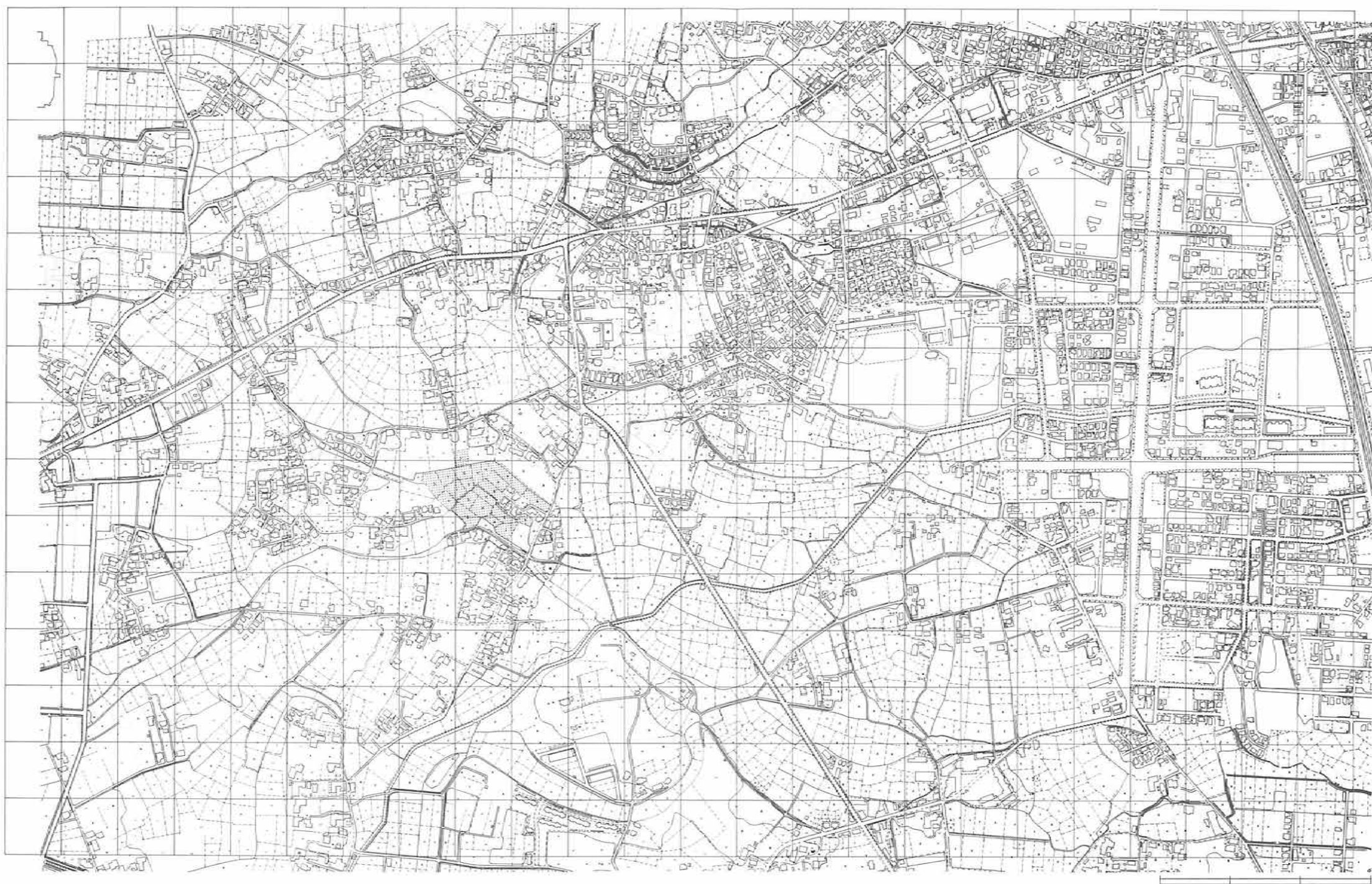
この沖積段丘は雫石川が周辺から供給した砂礫やシルト質土で被覆され、雫石川により下刻や堆積が繰り返し行われてきており、常に河川の影響を受けた不安定な地形である。不安定な流路の変遷は、現在でも自然堤防への集落の立地や、水田・畦畔の配置状況から読み取ることができる。本遺跡はこのような旧河道の沿辺に形成された自然堤防とみられる河岸段丘上に立地している。

2. 遺跡の位置と環境

本遺跡は東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の西約1.7kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。一帯の地目は水田・畑地・宅地・果樹園などである。第1次調査の範囲は周囲を水路・道路に囲まれた水田・畑地を中心とし、調査面積は14,400m²、調査区の標高は約124mである。同地点は北緯39度16分、東緯141度4分付近である。



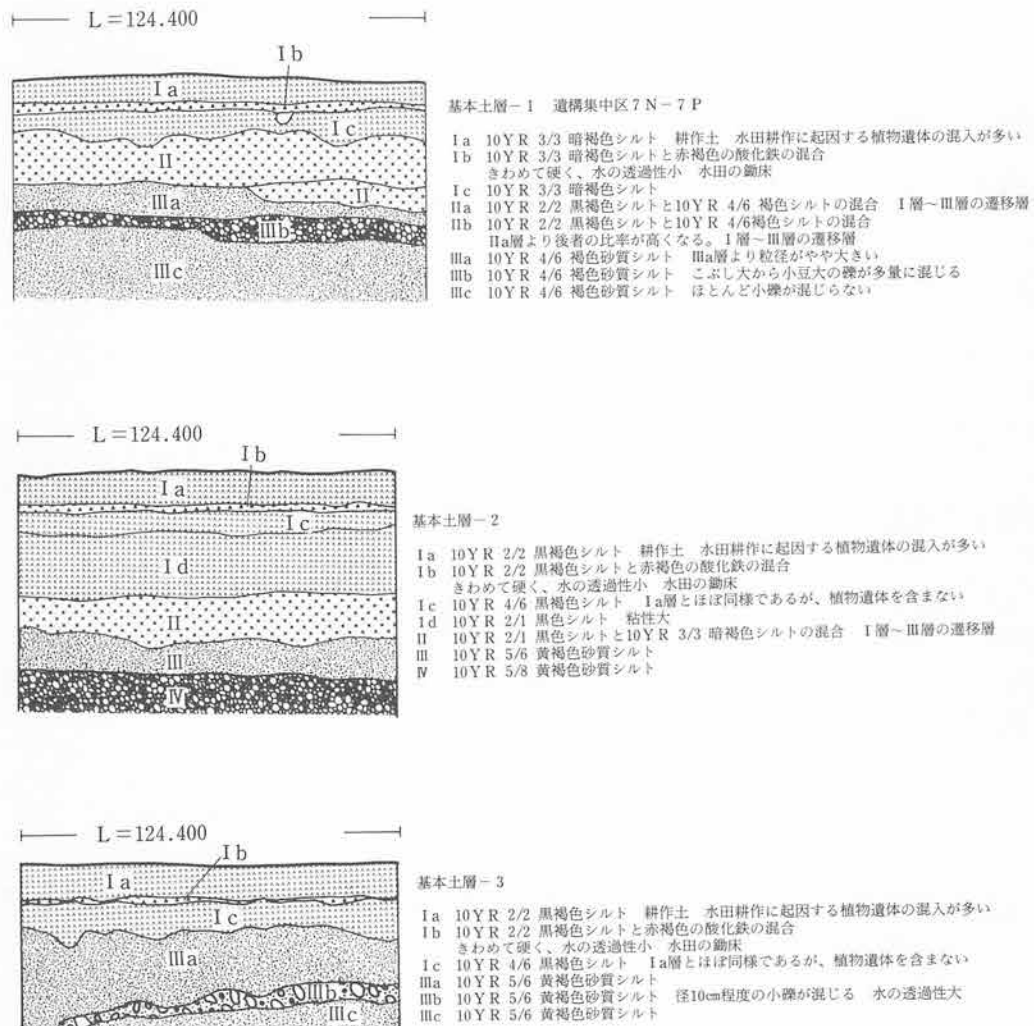
第2図 地形分類図(盛岡市教育委員会「志波城跡Ⅰ」1981を参考に作成)



第3図 遺跡周辺の地形図

3. 基本層序

遺跡の層序は前述のように現況が水田であることから比較的均一な状況を示す。I層は黒褐色シルト層であるが、中位に水田の鋤床である赤褐色の酸化鉄層（I b）を含む。これより上位（I a層）は水田耕作に起因する植物遺体の混入が多く、下位（I c層）は耕作による攪乱の影響をほとんど受けない。部分的に遷移層として黒色シルトと暗褐色シルトとの混合であるII層が存在する。遺構の検出面はIII層で、褐色から黄褐色の砂質シルトあるいは粘質シルト層であるが、部分的にこぶし大から人頭大の礫の混じる層が存在する。この層は平面的には帯状に分布しており、旧河道の変遷に起因するものと思われる。地域によってIII層の細分は様相を異にする。



第4図 基本層序

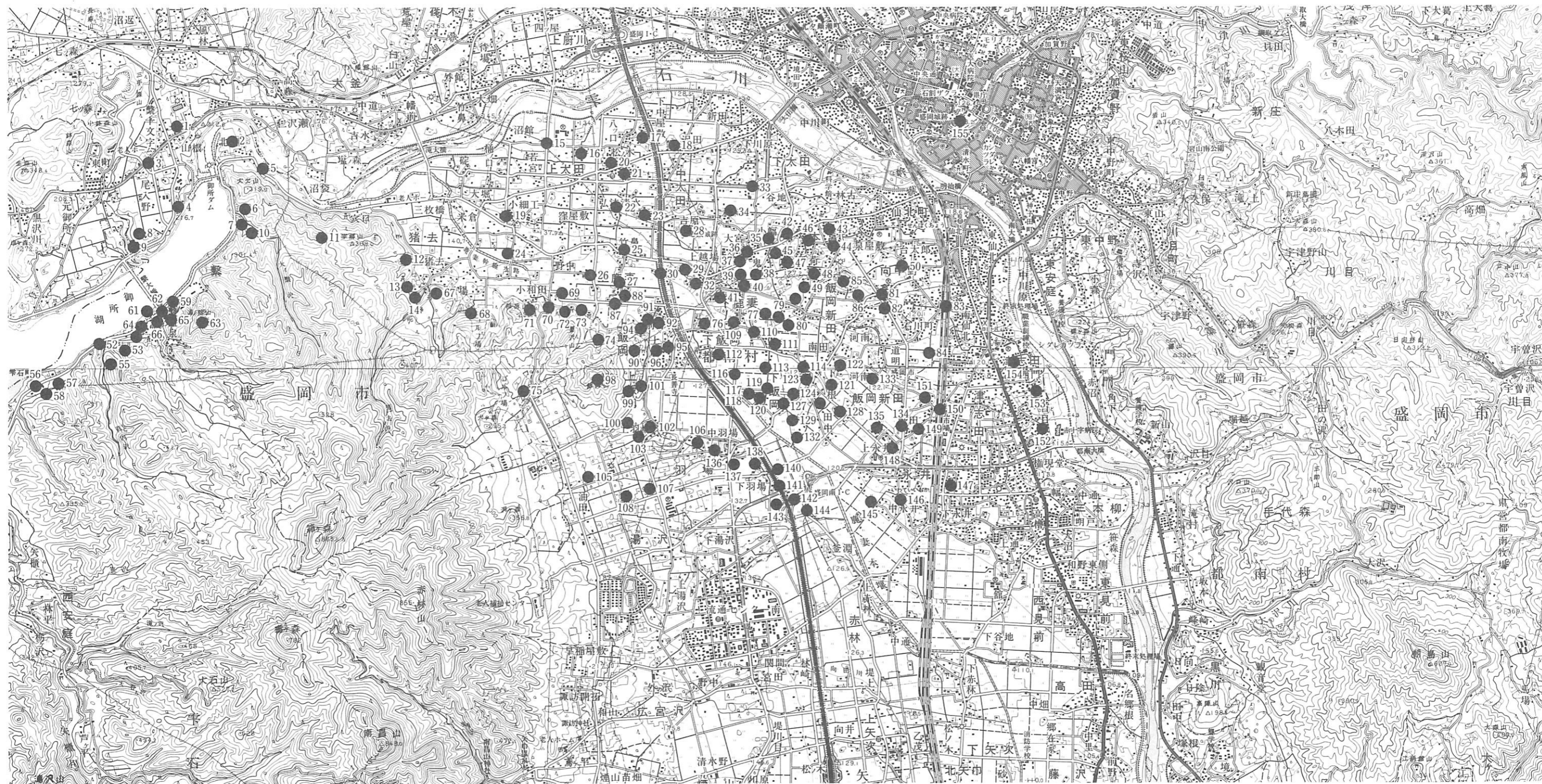
4. 周辺の遺跡

盛岡市とその周辺の遺跡は、岩手県の遺跡台帳に登載されているだけでも283(昭和61年度現在)ある。本遺跡からは奈良・平安時代の住居跡が確認されたので、奈良・平安時代を中心に歴史時代の遺跡について、また、地形のまとまりとの関連上、雫石川以南を中心とする範囲について以下に表を示し、その位置を図に示す。

No.	遺跡名	種別	時代	所在地
1	板橋Ⅱ	散布地	縄文・古代	髻字山根
2	北ノ浦	散布地	縄文・古代	髻字北ノ浦
3	板橋Ⅰ	散布地	縄文・古代	髻字尾入野
4	尾入野	散布地	縄文	髻字尾入野
5	下狼田	集落跡	縄文・古代	髻字北ノ浦
6	下狼田Ⅱ	散布地	縄文	髻字下狼田
7	下狼田Ⅰ	散布地	縄文	髻字下狼田
8	堂ヶ沢	集落跡	縄文	髻字堂ヶ沢
9	新城館	散布地・城館跡	縄文・中世	髻字堂ヶ沢
10	下狼田Ⅲ	散布地	縄文	髻字下狼田
11	湯坂峠	開所跡	中世～近世	猪去字湯坂峠
12	田面野木	散布地	縄文・古代	猪去字田面野木
13	猪去八幡館	城館跡	中世	猪去字田面野木
14	上猪去	集落跡	縄文・古代	猪去字上猪去
15	細田	散布地	平安時代	上太田字細田
16	松ノ木	集落跡	平安時代	上太田字松ノ木
17	八ッ口	散布地	古代	上太田字八ッ口
18	八卦	集落跡	奈良時代	中太田字八卦
19	太田郷夷森古墳群	古墳	奈良時代	上太田字森合
20	館	集落跡・城館跡	平安時代	上太田字館
21	上野屋敷	散布地	古代	上太田字上野屋敷
22	畑中	集落跡	古代	上太田字畑中
23	小沼	集落跡	平安時代	中太田字小沼
24	一本木	集落跡	平安時代	上太田字一本木
25	五兵衛新田	集落跡	古代	上鹿妻字五兵衛新田
26	天沼	集落跡	古代	上鹿妻字天沼
27	竹鼻	集落跡	古代	上鹿妻字竹鼻・朴
28	志波城	城跡	平安時代	下太田字方八丁
29	田貝	集落跡	古代	上鹿妻字田貝
30	竹石前	集落跡	平安時代	上鹿妻字田貝
31	新塚端	城跡	縄文・平安	下太田字新塚端
32	石仏	集落跡	古代	本宮字石仏
33	田中	散布地	平安時代	下太田字田中
34	林崎	集落跡	平安時代	下太田字林崎
35	小福	集落跡	古代	本宮字小福
36	大宮	集落跡	古代・中世	本宮字大宮
37	大宮北	集落跡	古代	本宮字大宮
38	鬼柳B	集落跡	古代	本宮字鬼柳
39	小林	集落跡	古代	本宮字小林
40	水門	集落跡	古代	本宮字水門
41	上越場A	集落跡	本宮字上越場	
42	宮沢	集落跡	古代	本宮字宮沢
43	本宮熊堂A	集落跡	古代	本宮字熊堂
44	本宮熊堂B	集落跡	古代	本宮字熊堂
45	鬼柳A	集落跡	古代	本宮字鬼柳
46	稲荷	集落跡	古代	本宮字稲荷
47	鬼柳C	集落跡	古代	本宮字鬼柳
48	野古A	集落跡	平安	本宮字北・野古
49	野古B	散布地	古代	本宮字北・野古
50	台太郎	集落跡	古代	向中野字台太郎
51	矢盛	集落跡	古代	飯岡新田
52	●内	集落跡	縄文	髻字●内川原
53	館市館	城館跡	中世	髻字館市
54	上野館	城館跡	中世	髻字●内沢
55	●内館	散布地・城館跡	縄文・中世	髻字●内沢
56	除Ⅱ	散布地	縄文	髻字除
57	上野	散布地	縄文・中世	髻字上野
58	除Ⅰ	散布地	縄文	髻字除
59	髻Ⅰ	散布地	縄文	髻字湯ノ館
60	髻Ⅲ	集落跡	縄文・中世	髻字湯ノ館
61	髻Ⅳ	集落跡	縄文～中世	髻字館市
62	髻Ⅱ	集落跡	縄文	髻字湯ノ館
63	湯ノ館	城館跡	中世	髻字湯ノ館
64	髻Ⅴ	集落跡	縄文・中世	髻字館市
65	一本松経塚	経塚跡	中世	髻字湯ノ館
66	髻Ⅵ	集落跡	縄文・弥生	髻字●内沢
67	上平	集落跡	縄文・古代	猪去字上平
68	猪去館	集落跡・城館跡	縄文・古代・中世	猪去字釈迦堂
69	蟹沢下	散布地	古代	上鹿妻字蟹沢
70	ニツ沢	散布地	縄文・古代	上鹿妻字ニツ沢
71	小和田館	城館跡	中世	上鹿妻字小和田
72	蟹沢	散布地	縄文・古代	上鹿妻字蟹沢
73	へび堂	散布地	縄文・古代	上鹿妻字蟹沢
74	オミ坂	散布地	縄文・古代	上鹿妻字蟹沢
75	大ヶ森	散布地	縄文・古代	猪去字大ヶ森
76	辻屋敷	集落跡	古代	下鹿妻字辻屋敷
77	西田A	集落跡	古代	下鹿妻字西田
78	上越場B	集落跡・散布地	古代	本宮字上越場

No.	遺跡名	種別	時代	所在地
79	西田B	集落跡	古代	下鹿妻字西田
80	前田	集落跡	古代	下鹿妻字前田
81	向中野館	城館跡	中世	向中野字才川
82	細谷地	集落跡	古代	向中野字細谷地・野原
83	南仙北	散布地・集落跡	縄文・古代	南仙北二丁目
84	向中野館	集落跡	古代	向中野字館
85	飯岡沢田	集落跡	古代	飯岡新田1沢田
86	飯岡才川	集落跡	古代	飯岡新田2才川
87	中村	散布地	平安	上飯岡字中村
88	月見山	散布地	縄文・古代	上飯岡字山中
89	山中	散布地	縄文・古代	上飯岡字赤坂
90	飯岡館	城館跡	中世	上飯岡字赤坂
91	堤	散布地	縄文・古代	上飯岡字堤
92	高館古墳群	古墳	奈良～平安	上飯岡字堤
93	藤島Ⅱ	散布地	平安?	上飯岡字藤島
94	高館	散布地	縄文	上飯岡字堤
95	大柳Ⅰ	集落跡	古代	上飯岡字大柳
96	大柳Ⅱ	散布地	古代?	上飯岡字大柳
97	館野前	散布地	縄文	上飯岡字館野前
98	飯岡山館	城館跡	中世	上飯岡
99	飯岡赤坂	散布地	古代	上飯岡字赤坂
100	いたこ塚	祭祀跡	近世	上飯岡字鳥島
101	赤坂Ⅱ	散布地	平安?	上飯岡字赤坂
102	羽場館	散布地	中世	羽場字百目木
103	羽場百目木	散布地	縄文	羽場字百目木
104	砂子塚	散布地	古代	羽場字百目木
105	アイノ野	散布地	縄文	上飯岡字土山
106	因幡	散布地	縄文・古代	羽場字因幡
107	木節	集落跡	平安	羽場字木節
108	福千代	集落跡	奈良	羽場字福千代
109	二又	散布地	平安	下飯岡字二又
110	内村	集落跡	平安	下飯岡字内村
111	中屋敷	散布地	古代	下飯岡字中屋敷
112	藤島Ⅰ	集落跡	縄文・古代	上飯岡字林崎
113	深淵Ⅰ	集落跡	平安	下飯岡字深淵
114	高屋敷Ⅰ	散布地	古代	上飯岡字高屋敷
115	法領権現塚	祭祀跡	□□□	飯岡新田字畑中
116	飯岡林崎Ⅱ	集落跡	古代	上飯岡字新田
117	飯岡林崎Ⅰ	集落跡	平安	上飯岡字新田
118	上新田Ⅰ	集落跡	平安	下飯岡□□新田
119	深淵Ⅱ	集落跡	平安	下飯岡字深淵
120	上新田Ⅱ	集落跡	平安	下飯岡字上新田
121	下久根Ⅰ	散布地	縄文・古代	下飯岡字下久根
122	石持	散布地	古代	下飯岡字石持
123	高屋敷Ⅱ	集落跡	平安	下飯岡字高屋敷
124	西	集落跡	平安	下飯岡字西
125	西田	平安	平安	下飯岡字西田
126	下久根Ⅱ	散布地	縄文・古代	下飯岡字下久根
127	熊堂Ⅰ	集落跡	縄文・平安	下飯岡字熊堂
128	松島	集落跡	古代	飯岡新田字松島
129	熊堂Ⅲ	集落跡	古代	下飯岡字熊堂
130	熊堂Ⅱ	集落跡	平安	下飯岡字熊堂
131	田中	集落跡	平安	下飯岡字田中
132	南谷地	集落跡	平安	下飯岡字南谷地
133	夕梵	散布地	古代	飯岡新田字夕梵
134	横屋	集落跡	古代	飯岡新田字横屋
135	葛本	散布地	古代	下飯岡字葛本
136	新井田Ⅰ	散布地	古代	羽場字新井田
137	新井田Ⅱ	散布地	古代	羽場字新井田
138	新田	集落跡	平安	羽場字新井田
139	間渡Ⅰ	散布地	古代	湯沢字間渡
140	下羽場	集落跡	平安	羽場字新井田
141	下湯沢	散布地	古代	湯沢字間渡
142	大島	散布地	古代	羽場字大島
143	間渡Ⅱ	散布地	古代	大字湯沢字間渡
144	大島	散布地	古代	大字羽場字大島
145	岡木	散布地	古代	大字永井字岡木
146	永井前田	城館跡・散布地	古代	大字永井字前田
147	上井経塚	祭祀跡	記載なし	大字永井字経塚
148	境田	散布地	古代	大字永井字境田
149	長沼	散布地	古代	大字津志田字長沼
150	津志田	散布地	古代	大字津志田字生群
151	生群	集落跡	古代	大字津志田字生群
152	百目木	集落跡	縄文・古代	大字三本柳字百目木
153	西鹿渡	集落跡	古代	大字三本柳字西鹿渡
154	碓塚	集落跡	古代(奈良)	大字津志田字碓塚
155	盛岡城	城館跡	中世・近世	内丸

【岩手県遺跡分布図】1994岩手県教育委員会



第5図 周辺の遺跡

III. 調査と室内整理の方法

1. 調査方法

(1) 調査区の地区割と遺構の命名

盛南開発事業区域約450万㎡のうち地域公団施行区域約320万㎡には埋蔵文化財包蔵地が約60万㎡あり、長期間にわたる調査が計画されている。本遺跡を含め、これらの包蔵地の性格を統一的に把握するため、グリッドの設定は以下のおこなった。公共座標軸第X系上の1点(X=-35,000.000, Y=25,000.000)を原点とし、南北、東西に平行する直線で50m毎に区切り、大グリッドとする。この大グリッドをさらに2m毎に区切り、小グリッドとする。グリッドの名称は大グリッドを西から東にA, B, C……、北から南に1, 2, 3……とし、グリッド名を1A, 2B……とする。小グリッドは大グリッドごとに西から東にa, b……y、北から南に1, 2, 3……25とした。従って、小グリッドの呼称は1A2b区、3C4d区……のようになる。本遺跡はこの大グリッド上の6M~6P、7M~7Q、8N~8Q、9O、9Pに位置する。

遺構名は検出順に番号を付し、RA01堅穴住居跡、PD01土坑、RG01溝跡のように命名することとした。遺構記号は以下のとおりである。

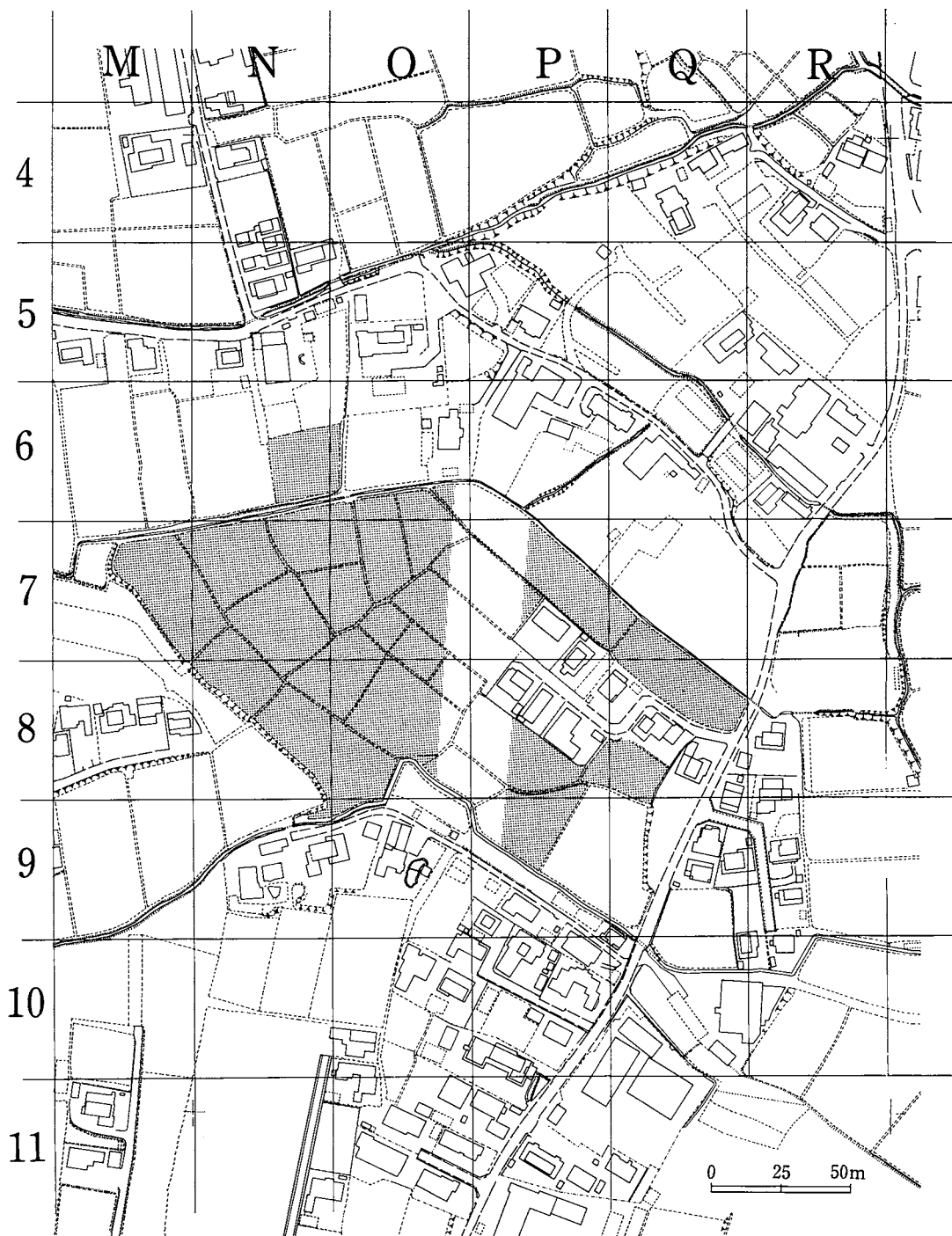
堅穴住居跡…RA 建物跡……RB 柱列跡……RC 土坑……RD 堅穴……RE
炉跡……RF 溝跡……RG 配石……RH 井戸跡……RI その他……RZ

(2) 粗掘り

調査開始当初、水田の畦に沿う形で2m幅の試掘トレンチを入れ、その試掘トレンチを広げる形で遺構検出を進めた。今回の調査の後、水田を復旧する必要があるため、粗掘りした排土は層ごとに分けた。

(3) 精査と実測

検出した遺構には遺構名を付し、順次、精査を行った。遺構の精査は堅穴住居跡は4分法、土坑は2分法を原則としたが、若干の例外もある。遺構の実測は簡易遣り方測量を原則としたが、溝跡は平板測量で行った。平面図は調査区区画線を基準とした1m間隔の水糸を張って、それを測量基線とした。土層断面図は水平水糸を張って、それを測量基線とした。遺構のレベルは50cm間隔を原則とし、必要に応じて計測所を設けている。出土遺物は遺構名、層位を記入して取り上げた。



第6図 遺跡範囲・グリッド配置図

(4) 写真撮影

野外調査での写真撮影は6×7cm判1台(モノクロ)と35mm判2台(モノクロ、カラー・リバーサル)のカメラ3台を1組として使用し、検出状況・埋土断面・完掘全景・遺物出土状況などを撮影した。

2. 室内整理方法

室内整理は、遺物の注記からはじめ、次いで接合・復元・石膏入れの作業を行った。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。また、保存処理の必要な鉄製品については外注した。

その後、遺物実測、土器拓本、遺物・遺構トレースの順の作業を進め、最後に図版や写真図版を作成した。以下の作業と並行して、計測・原稿作成を行い、報告書に掲載した。

(1) 遺物の処理と遺物図版の作成

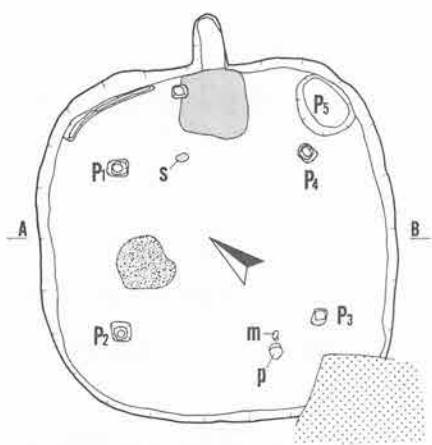
遺物は水洗、注記、接合・復元の順に行い、必要なものについては石膏入れの作業を行った。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、実測、拓本作成、トレースの順に作業を進め、最後に図版を作成した。遺物の縮尺は3分の1を原則としているが、器種の大小によって縮尺を変えたものについては注記してある。なお土師器の器面調整については、次頁のような表現方法を用いた。

(2) 遺構図面の処理と遺構図版の作成

図面は原図の点検後、修正・合成を行い、そのちトレース、遺構図版の作成の順に整理した。遺構の縮尺は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴列は50分の1、土坑は40分の1、溝跡は200分の1、竪穴住居跡のカマド断面図は25分の1であるが、その他は適宜縮尺を変えて掲載した。図中の攪乱箇所・焼土・炭化材の分布範囲には次頁のようなスクリーン・トーンを使用した。また、柱穴の番号については P_1 ・ P_2 ・ P_3 …、土器についてはPを付した。

(3) 写真図版

遺構写真・遺物写真とも縮尺は不定である。遺物写真の番号は遺物図版の番号と一致している。



A-B 1/2断面 (土坑は1/10)

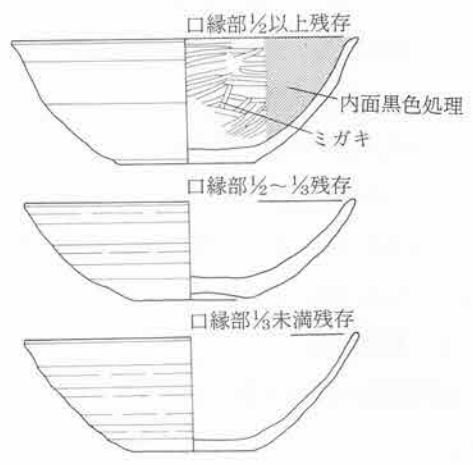
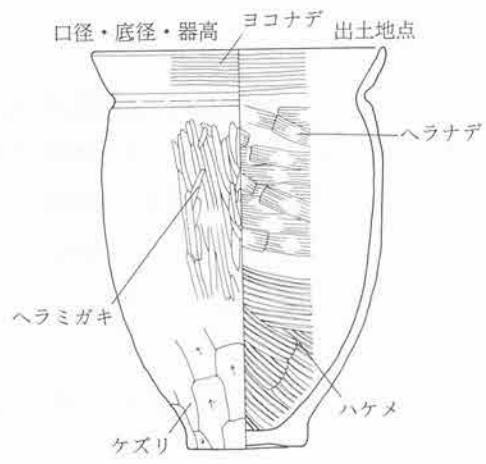
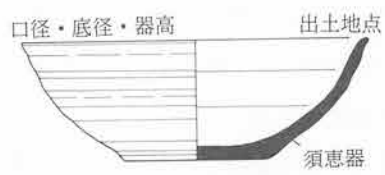
a-b 1/2断面



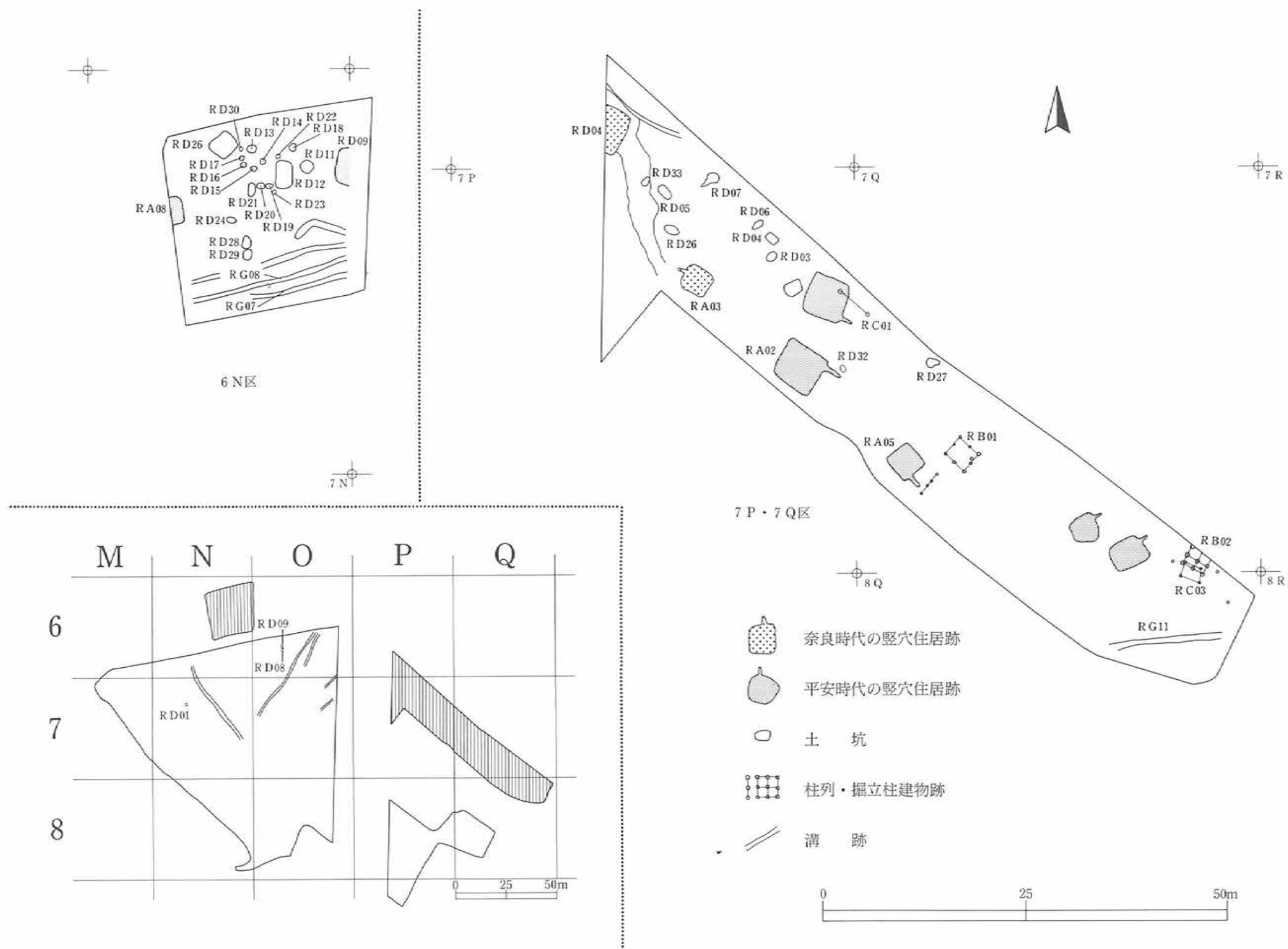
方位

P1... 土坑・柱穴

	焼土
	炭化物
	別遺構・攪乱
	土器
	石・礫
	金属器



遺構・土器実測図凡例



第7図 遺構配置図

IV. 調査の結果

1. 竪穴住居跡

RA 01 竪穴住居跡

遺構（第7, 8図、写真図版3）

〈位置と残存状況〉 7P8xほか。RA02竪穴住居跡の北に隣接する。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ隅丸長方形である。規模は南北4.7m、東西4.9mである。

〈埋土〉 12層に細分され黒褐色土主体である。壁際には崩落した層が、床面には灰白色火山灰がブロック状に堆積する。深さは中央部で約30cmである。

〈壁〉 床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は東壁で27cm、北壁で30cm、西壁で31cm、南壁で33cmである。

〈床〉 II層を掘り込んでいる。比較的深い掘り方を伴い、貼り床である。

〈柱穴・土坑〉 遺構に伴う支柱穴はP₁～P₄の4個である。平面形は不整な円形であり、深さは24～38cmである。P₄はカマドの北袖と重複し、これを掘り込んでいる。柱痕跡は確認されなかった。

〈カマド〉 東壁の南隅寄りに構築されている。北側袖部にあたる黄褐色シルトのたかまりと南側袖部の芯材となる円礫を検出したが、燃焼部の焼土の形成は不良である。煙道部は掘り込み式で、本体から煙出し部に向かって緩やかに下っており、煙出し部には円礫が充填されている。規模は長さ約260cm、深さは最大で50cmである。

〈遺物の出土〉 床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

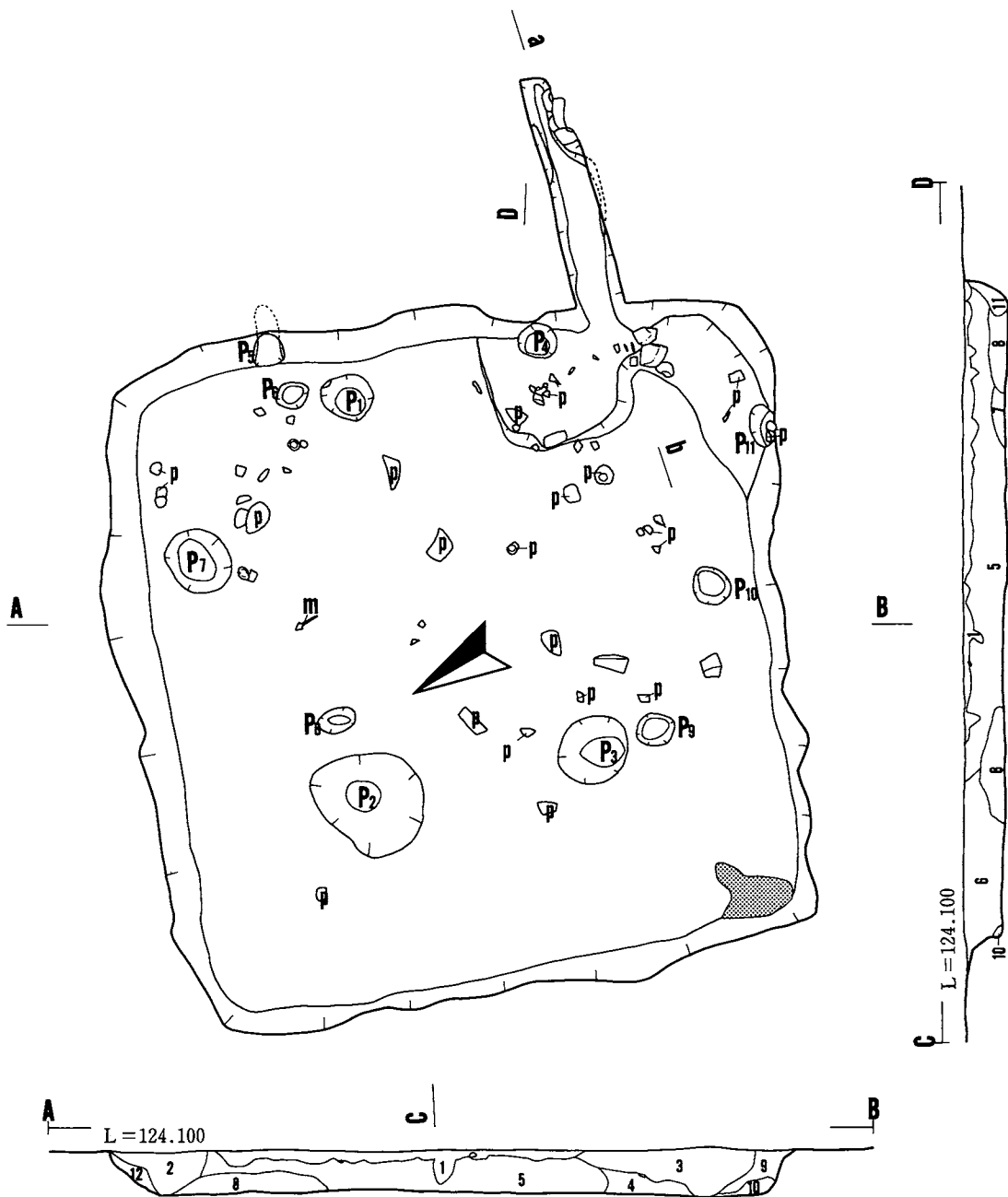
〈時期〉 埋土の状況および出土した遺物から平安時代に属する。

遺物（第8～11図、写真図版27, 28）

床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

〈土器〉 1～25は土師器坏形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。2、4、13、15、25は内面ヘラミガキのち黒色処理を施している。26は比較的大型の土師器坏形土器の底部破片。底部は高さ1.1cmのやや高台状を呈し、内面はヘラミガキ調整後、黒色処理を施している。これらの土師器坏形土器のうち、2、7、8には墨書がみられる。2の字種は不明である。7、8の墨書の字種は判読できないが、同一の字種である。27～30は土師器甕形土器である。27、30はロクロ不使用、28、29はロクロ使用である。31は須恵器甕形土器の体部破片、32は須恵器壺形土器の体部破片、33は須恵器甕形土器の口縁部破片である。

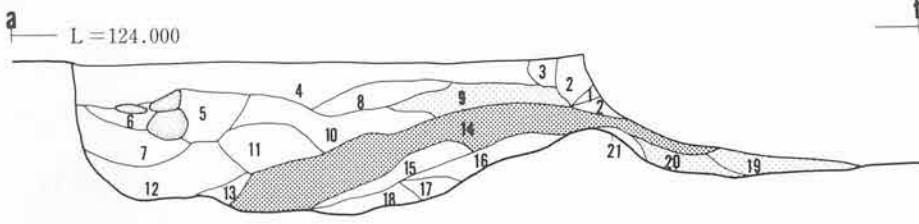
〈鉄製品〉 34、35はともに床面からの出土である。34は刀子、35は紡錘車である。



RA01 竪穴住居跡 A-B、C-D

- | | | |
|---------------------|----------------------|-----------------------------|
| 1 7.5YR 2/1 黒色シルト | 8 10YR 3/2 黒褐色砂質シルト | ローム粒をブロック状、灰白色火山灰を微量霜降り状に含む |
| 2 10YR 2/1 黒色シルト | 8' 10YR 3/2 黒褐色砂質シルト | ローム粒をブロック状に含む |
| 3 7.5YR 2/2 黒褐色シルト | 9 10YR 3/3 黒褐色砂質シルト | ローム粒を多量に含む |
| 4 10YR 2/2 黒褐色シルト | 10 10YR 2/1 黒色シルト | 灰白色火山灰含む |
| 5 7.5YR 3/1 黒褐色シルト | 11 10YR 2/1 黒色シルト | |
| 6 10YR 3/1 黒褐色砂質シルト | 12 10YR 4/4 褐色砂質シルト | |
| 7 10YR 2/3 黒褐色砂質シルト | | |

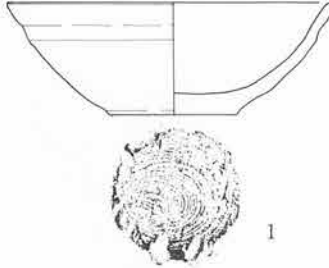
第8図 RA01 竪穴住居跡



a - b

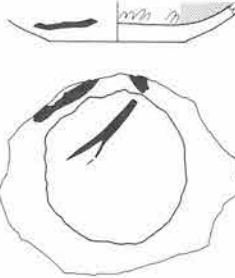
- | | | |
|------------------------------|---|---|
| 1 10YR 2/2 黒褐色シルト | 8 5YR 2/2 黒褐色シルト | 16 5YR 2/2 黒褐色シルト 小礫少量含む |
| 2 10YR 2/2 黒褐色シルト
焼土粒少量含む | 9 5YR 2/3 極暗赤褐色土 焼成はごくよわい | 17 7.5YR 3/3 暗褐色シルト 小礫少量含む |
| 3 10YR 2/4 暗褐色シルト | 10 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト
灰白色火山灰をブロック状に含む | 18 7.5YR 3/4 暗褐色シルト |
| 4 7.5YR 2/1 黒色シルト
炭化物微量含む | 11 10YR 2/3 黒褐色シルト 黒褐色シルト | 19 7.5YR 2/2 黒褐色シルト
焼成はごくよわい 炭化物・小礫を含む |
| 5 10YR 2/2 黒褐色シルト | 12 10YR 2/2 黒褐色シルト | 20 7.5YR 2/3 極暗褐色焼土
焼成はごくよわい 炭化物・小礫を含む |
| 6 7.5YR 2/2 黒褐色シルト | 13 10YR 4/4 褐色砂質シルト | 21 7.5YR 3/4 暗褐色シルト |
| 7 7.5YR 3/3 暗褐色シルト | 14 5YR 2/3 極暗赤褐色焼土 焼成はよわい | |
| | 15 10YR 2/3 黒褐色シルト | |

13.1・5.1・4.9 床面



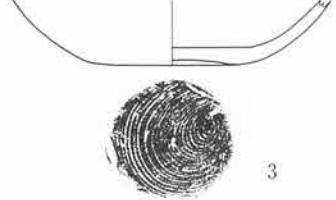
1

—・5.5・— 床面



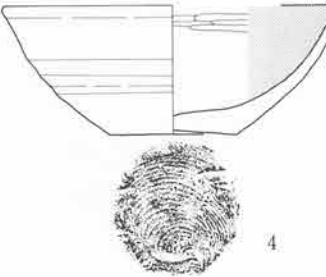
2

—・5.7・— 床面



3

13.7・5.1・5.3 床面



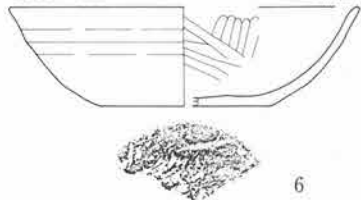
4

14.8・—・— 床面



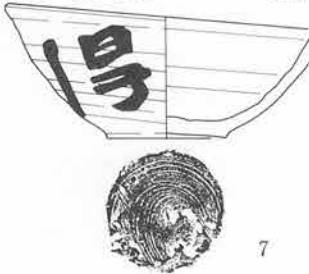
5

14.1・6.8・4.0 床面



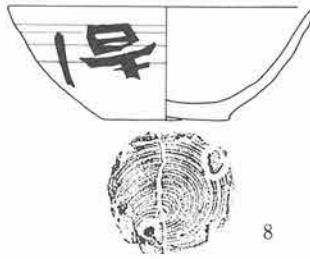
6

12.7・4.8・5.3 床面



7

12.4・5.1・4.5 床面



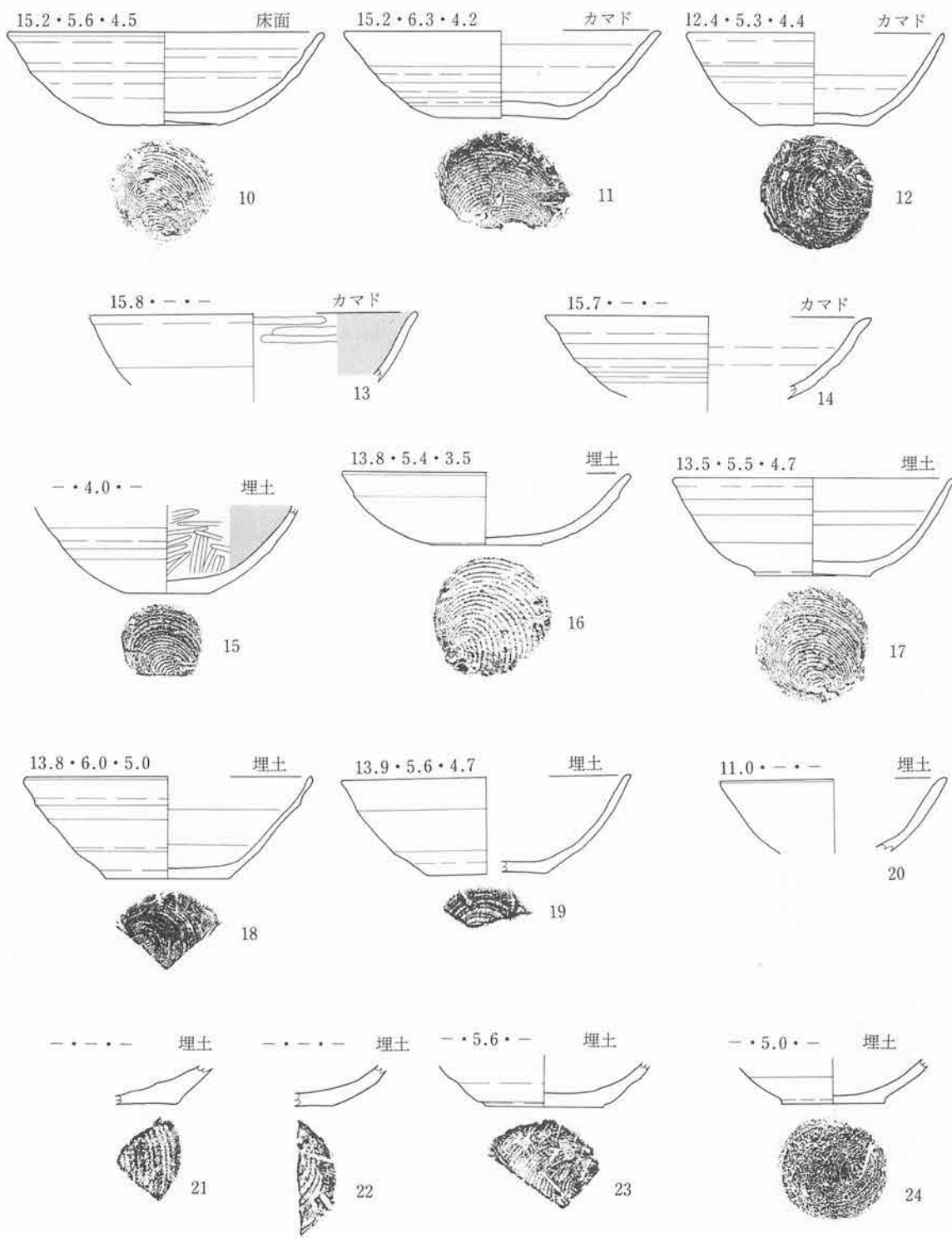
8

14.7・—・— 床面

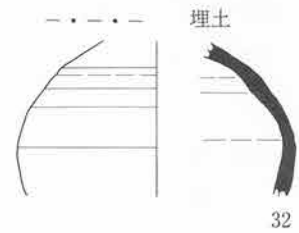
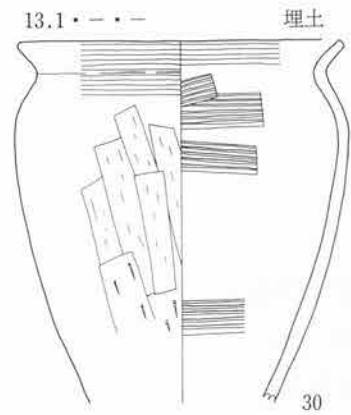
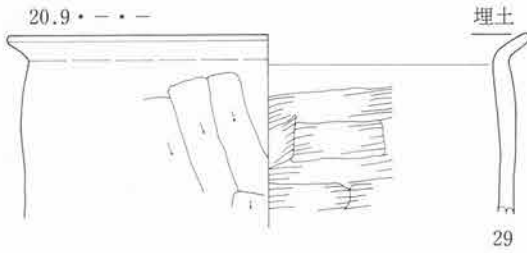
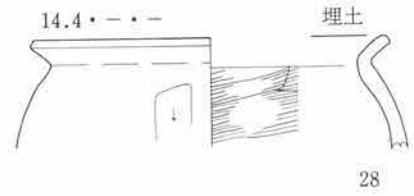
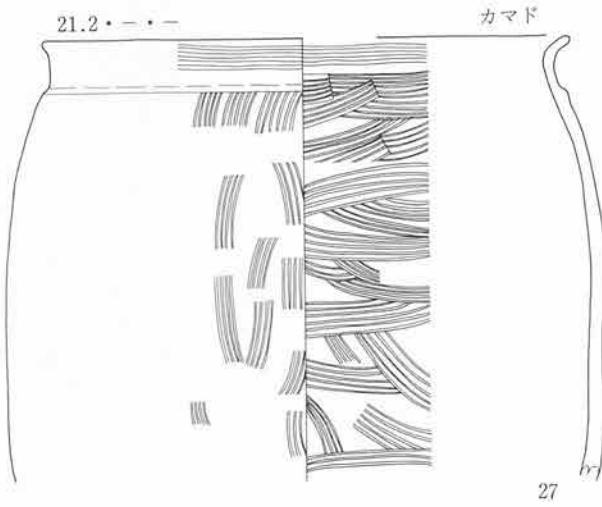
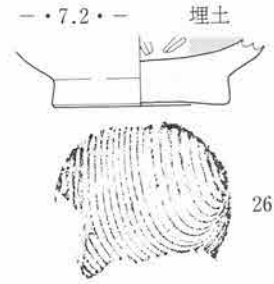
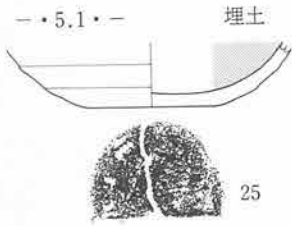


9

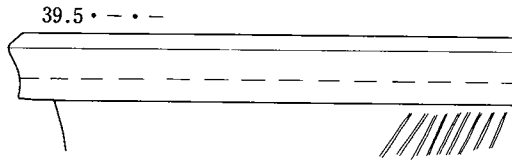
第9図 R A 01 竪穴住居跡・出土遺物 - I



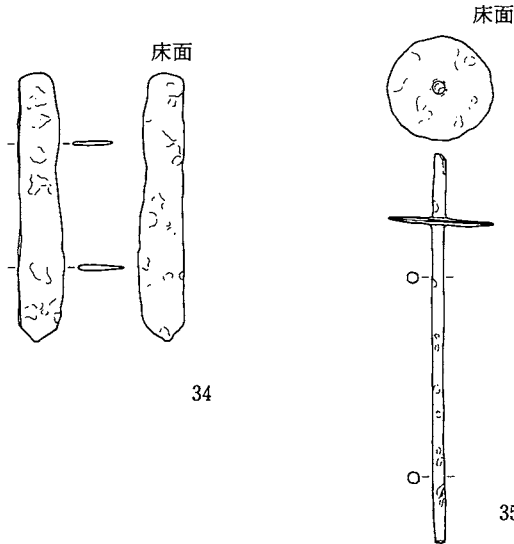
第10図 R A 01 竪穴住居跡・出土遺物 - 2



第II図 R A01 竪穴住居跡・出土遺物-3



33



第12図 R A 01 竪穴住居跡・出土遺物 - 4

R A 02 竪穴住居跡

遺構 (第12, 13図、写真図版4)

〈位置と残存状況〉 7 P 11 x ほか。R A 01 竪穴住居跡に隣接する。

〈形状と規模〉 平面形は南東壁を長辺とする隅丸台形である。規模は南東-北西が5.5m、北東-南西の短辺が4.8m、長辺が5.5mである。

〈埋土〉 9層に細分され、黒褐色土主体である。床面には灰白色火山灰がブロック状に堆積する。

〈壁〉 床面から外傾して立ち上がる。北東壁で41cm、南西壁で30cm、南東壁で33cm、北西壁で32cmである。

〈床〉 II層を掘り込んでいる。比較的深い掘り方を伴い、貼り床である。

〈柱穴・土坑〉遺構に伴う支柱穴はP₁～P₄の4個である。平面形はほぼ円形で、深さは32～39 cmである。P₁はカマドの南東側の袖部と重複し、これを掘り込んでいる。柱痕跡は確認されなかった。P₅は貯蔵穴と思われる。

〈カマド〉南東壁の東隅寄りに構築されている。煙道は掘り込み式で、規模は本体が128×112 cm、煙道部の長さ165cm、深さは最大で64cmである。燃焼部から煙道部中央にかけて焼土が形成されており、特に燃焼部は固く焼土が形成されており層厚 5 cmを測る。煙道部は燃焼部から煙出しまで緩やかに掘り込まれている。両壁面と煙出し部に垂円礫が埋められており、特に煙出し部は底面まで石垣状に垂円礫が積み重ねられている。

〈遺物の出土〉床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

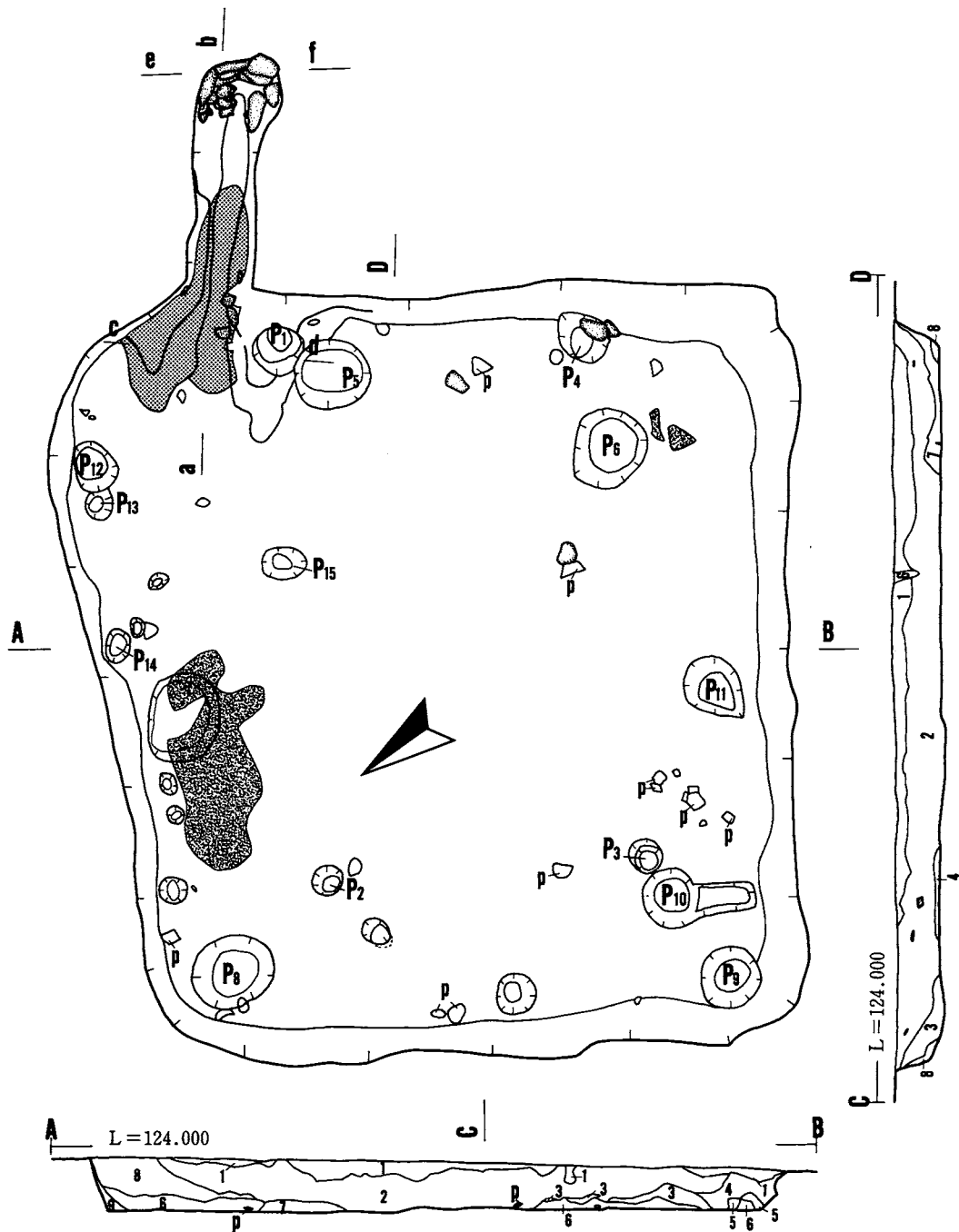
〈時期〉埋土中の火山灰や出土した遺物から平安時代に属する。

遺物（第13～17図、写真図版29～31）

〈土器〉36～66、68は床面からの出土である。36～40、43～59は土師器坏形土器である。すべてロクロ成形、底部の切り離しは回転糸切りである。41、42、60～63は土師器高台付坏形土器である。64は須恵器甕形土器の底部破片、65、66、68は土師器甕形土器の破片である。

67はカマド煙出し部から出土した土師器小型甕形土器である。口縁部をナデ調整し、体部をヘラナデ調整している。底部には木葉痕が見られる。69～71、73、74はカマドからの出土である。69は須恵器小型甕形土器の底部破片である。底面には回転糸切り痕、体部には自然釉がみられる。70は土師器坏形土器、内面ミガキのち黒色処理を施している。71、73は土師器甕形土器の口縁部破片、74は土師器甕形土器の底部破片である。72、75～87は埋土からの出土である。75～78は土師器坏形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。77は内面ミガキのち黒色処理を施している。その他は無調整である。79は須恵器坏形土器であるが、底径と口径に比べ器高の小さい皿形を呈する。底面には回転糸切り痕が残る。内側底面が磨かれた痕跡があり、転用されて硯として使用された可能性も考えられる。80、81は土師器甕形土器の口縁部破片、82、83は土師器甕形土器の底部破片である。84、は須恵器大型甕土器の口縁部破片、85は須恵器甕形土器の体部破片である。

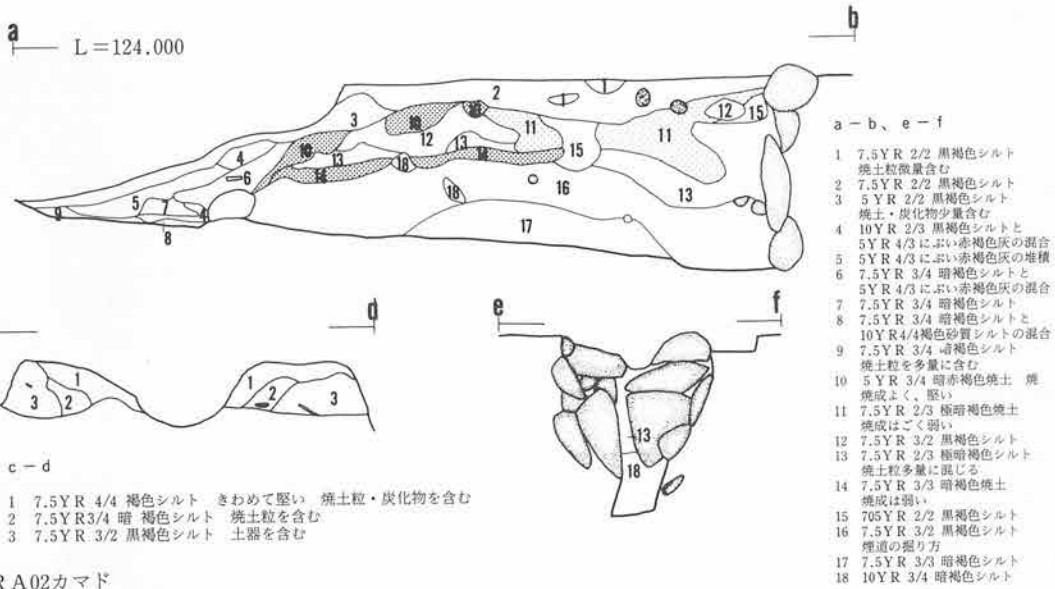
〈鉄製品〉86、87はともに床面から出土した釘である。



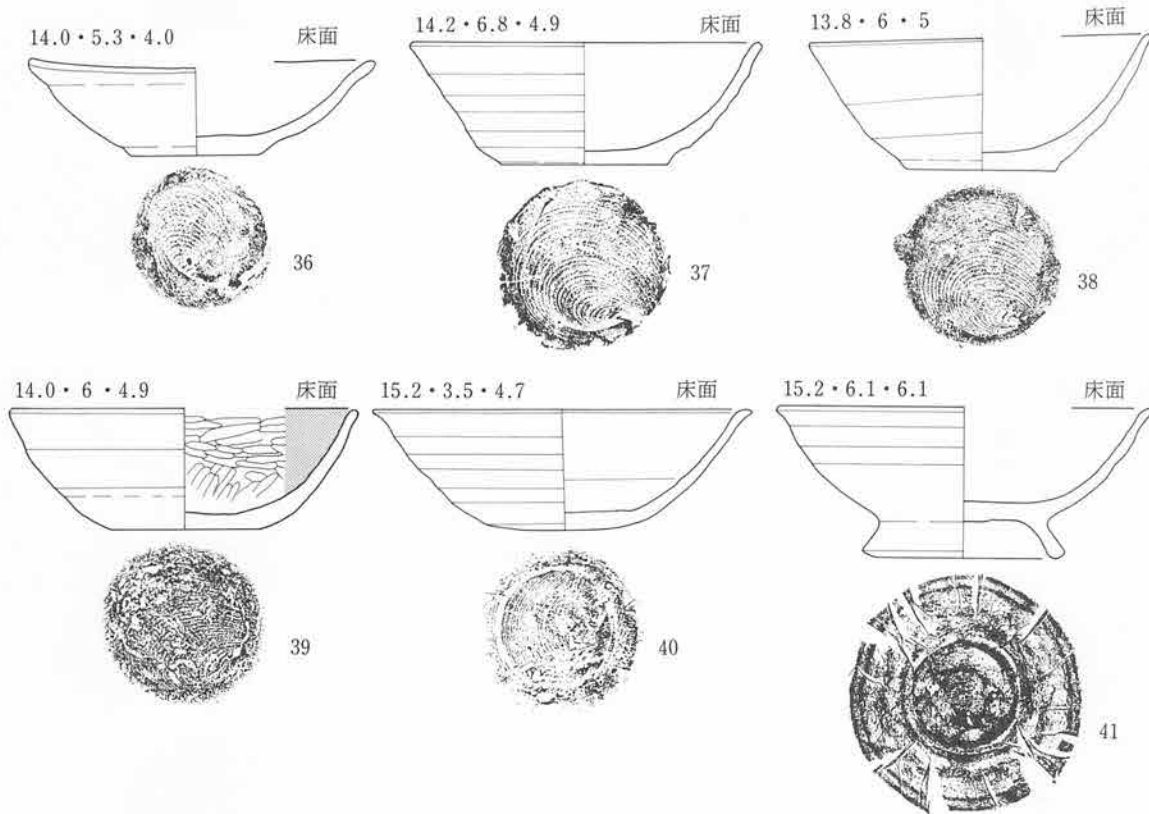
RA 02 竪穴住居跡 A-B、C-D

- | | | | | | |
|---|-----------------|----|---|------------------|-------------|
| 1 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 表土 | 5 | 7.5YR 2/2 黒褐色シルト | |
| 2 | 10YR 2/3 黒褐色シルト | | 6 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 灰白色火山灰を微量含む |
| 3 | 10YR 3/2 黒褐色シルト | | 7 | 5YR 2/2 黒褐色シルト | |
| 4 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | | 8 | 10YR 3/2 黒褐色シルト | |
| | | | 9 | 10YR 4/4 褐色砂質シルト | 壁の崩落 |

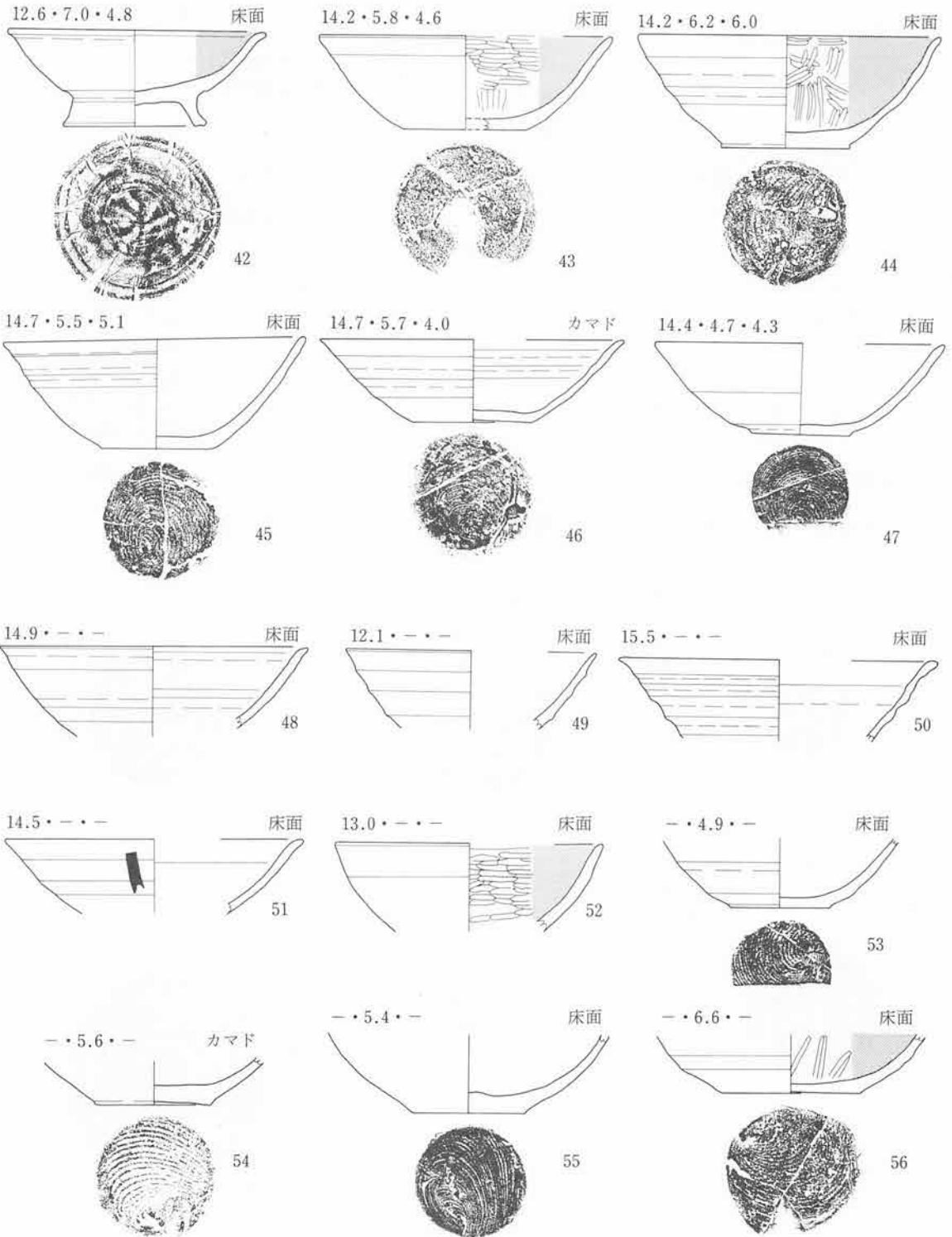
第13図 RA 02 竪穴住居跡



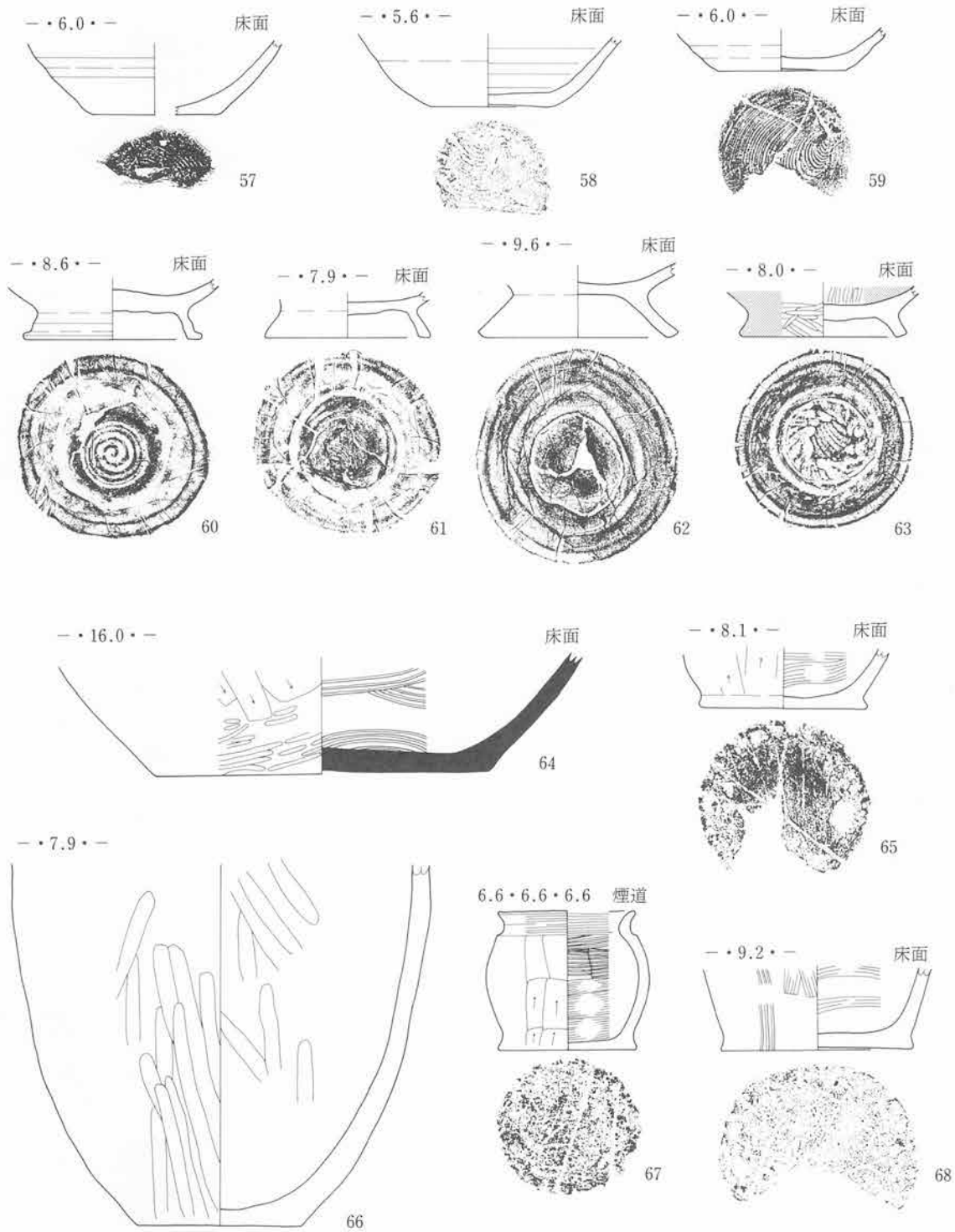
RA02カマド



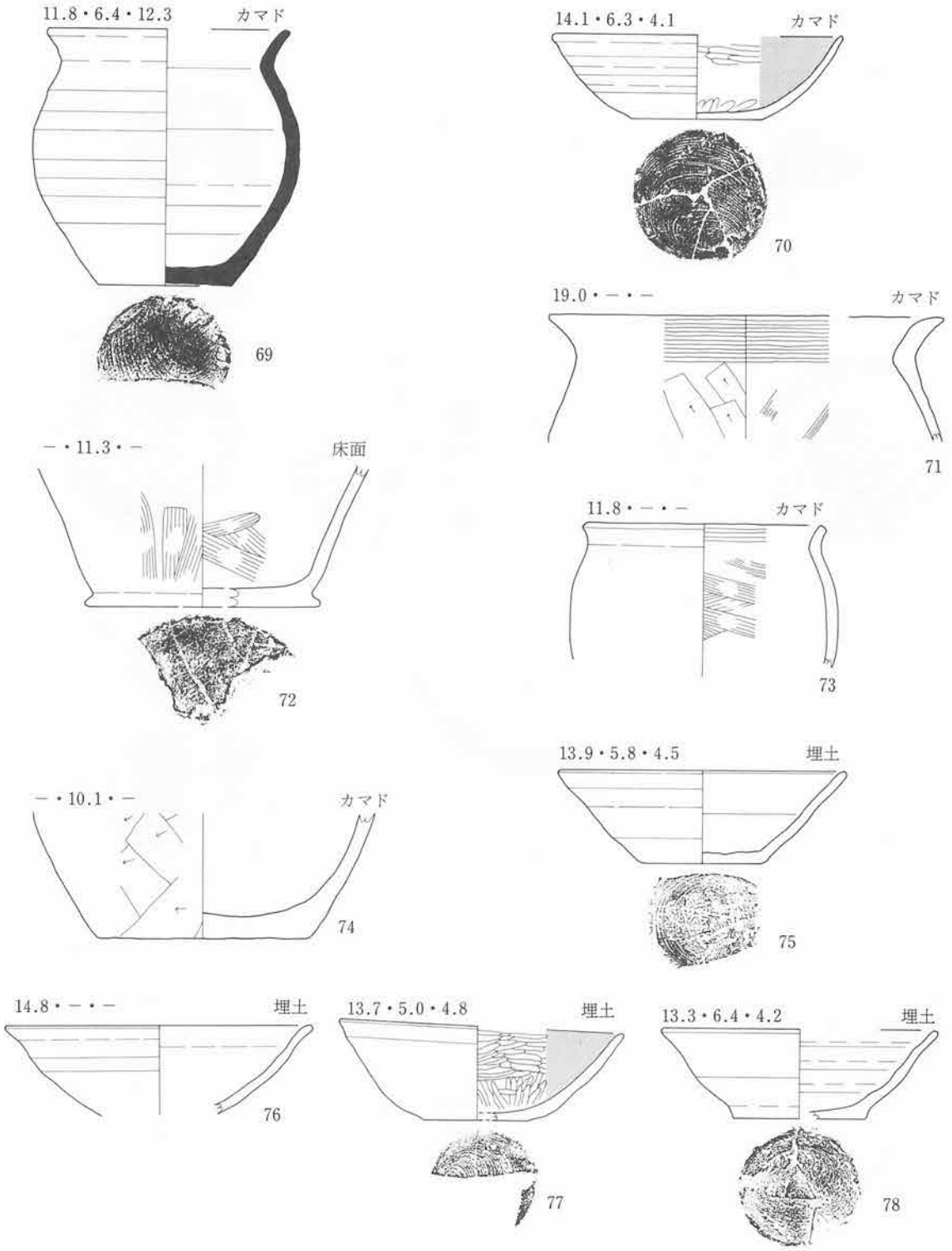
第14図 RA02竪穴住居跡・出土遺物-I



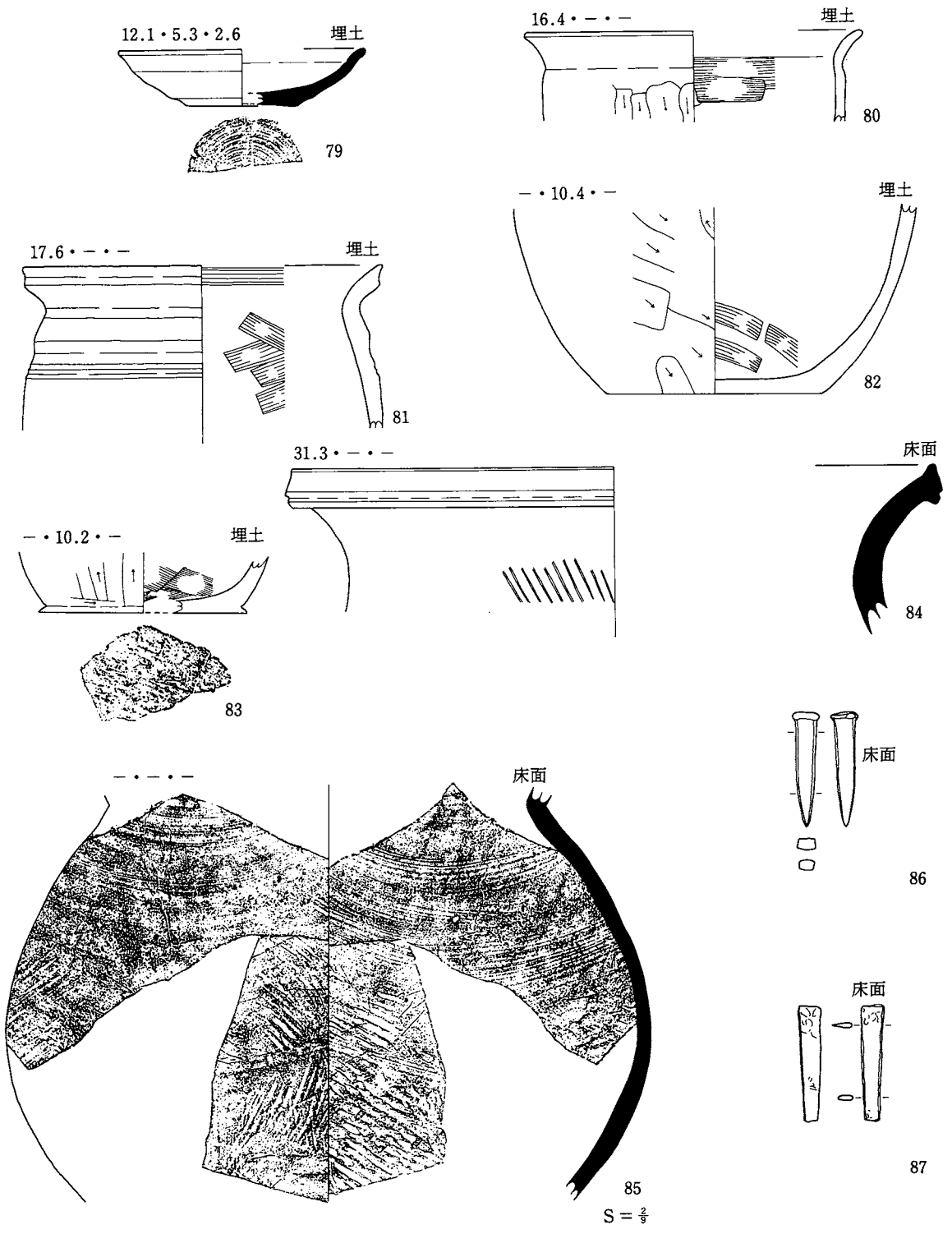
第15図 R A 02 竪穴住居跡・出土遺物 - 2



第16圖 R A 02豎穴住居跡・出土遺物－3



第17図 R A 02 竪穴住居跡・出土遺物 - 4



第18图 RA02竖穴住居跡・出土遺物-5

R A 03 竪穴住居跡

遺構（第18図、写真図版5）

〈位置と残存状況〉 7 P 7 p ほか。

〈形状と規模〉平面形は隅丸方形である。規模は北西－南東方向が3.7m、北東－南西方向が3.2mである。

〈埋土〉 4層に大別され、黒褐色土主体であるが、細分すると18層になる。

〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。北西壁で26cm、南西壁で38cm、南東壁で36cm、北東壁で37cmである。

〈床〉貼り床である。掘り方は凹凸が著しい。

〈柱穴・土坑〉柱穴状土坑多数を検出したが、遺構に伴う主柱穴は不明である。

柱穴状土坑の平面形は円形を基調とするが一様ではなく、深さ26cm～34cmである。

〈カマド〉北西壁のほぼ中央に構築されている。煙道は掘り込み式で、規模は本体が74cm×92cm、煙道部の長さ170cm、深さは最大で19cmである。燃焼部から煙道の上がり口まで焼土が形成されているが、焼成はよくない。

〈遺物の出土〉埋土を中心に床面からも出土している。土器で構成される。

〈時期〉出土遺物から奈良時代である。

遺物（第18, 19図、写真図版32）

〈土器〉88は土師器甕形土器の口縁部破片・体部から口縁部にかけて段を持つ。89、90は床面から出土した土師器甕形土器の底部破片。91は土師器甕形土器である。口縁部をナデ調整しており、体部から底部にかけて丹念なミガキを施している。92はカマド袖部から出土した土師器甕形土器の体部上位の破片で、88と同様に体部から口縁部へ移る部分に段を持つ。

R A 04 竪穴住居跡

遺構（第20図、写真図版6）

〈位置と残存状況〉 6 P 23 k ほか。遺構の北西側半分は調査範囲外にある。

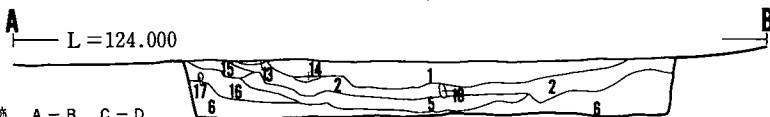
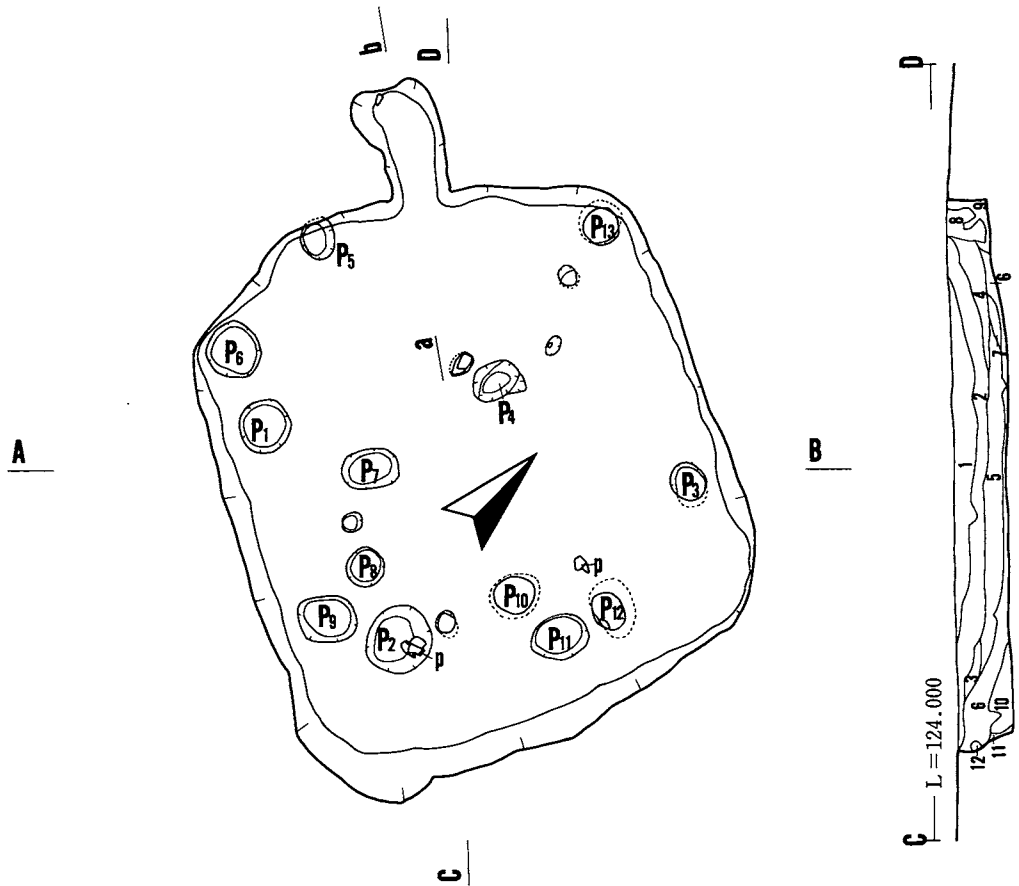
〈形状と規模〉遺構の半分が調査範囲外にあるため、全容は不明であるが、それぞれの辺が張り出す方形を呈しているものと推定される。

〈埋土〉 8層に細分されるが、3層に大別される。黒褐色土主体である。

〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。壁高は南東壁で22cm、南西壁と北東壁の残存部分で18cmである。

〈床〉貼り床である。比較的浅い掘り方を伴う。

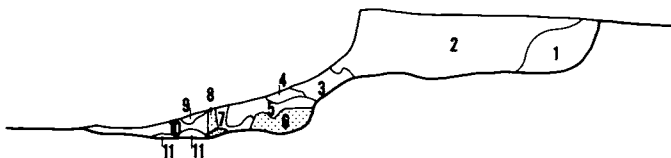
〈柱穴・土坑〉遺構に伴う主柱穴はP₁とP₂である。P₃は貯蔵穴と推定される。



RA 03竪穴住居跡 A-B、C-D

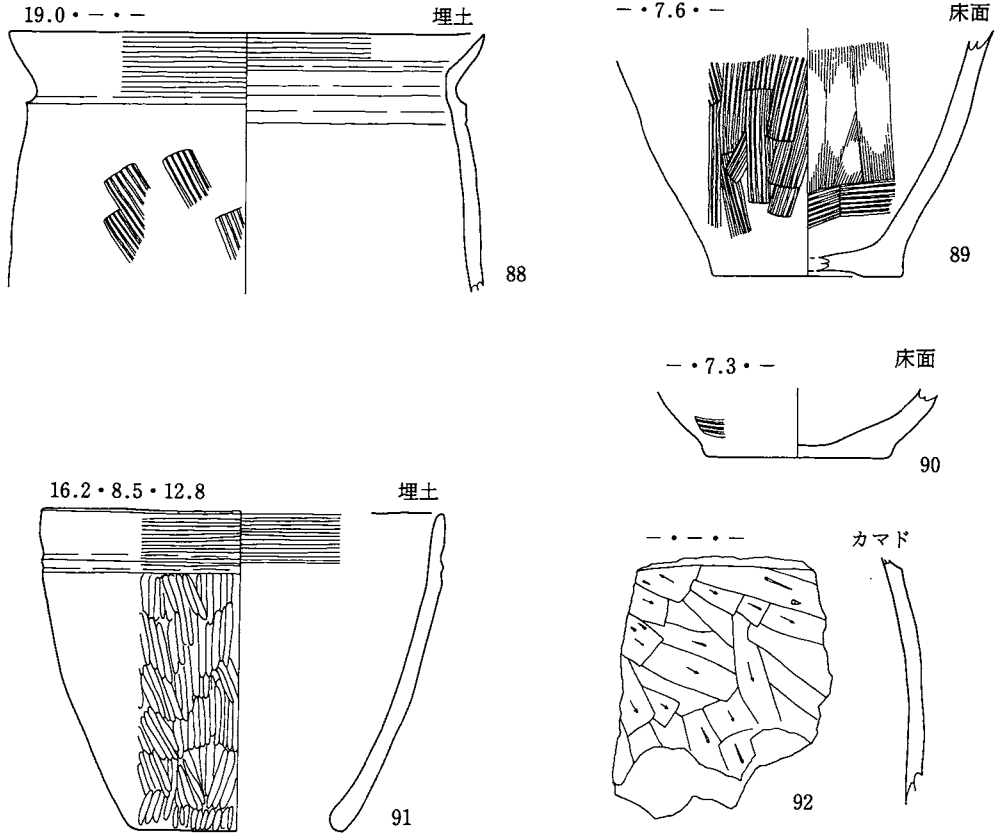
- | | |
|-------------------------------------|--|
| 1 7.5YR 3/2 黒褐色シルト 部分的に灰白色火山灰を微量に含む | 10 10YR 3/3 暗褐色シルトに10YR 4/4 褐色砂質シルト少量混じる |
| 2 7.5YR 3/2 黒褐色シルト | 11 10YR 4/4 褐色砂質シルト 壁の崩落 |
| 3 7.5YR 2/2 黒褐色シルト | 12 7.5YR 3/3 暗褐色砂質シルト 壁の崩落 |
| 4 7.5YR 2/1 黒色シルト | 13 7.5YR 2/2 黒褐色シルト |
| 5 7.5YR 1.7/1 黒色シルト | 14 10YR 3/2 黒褐色砂質シルト |
| 6 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト 焼土粒微量混じる | 15 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 3層と同じか |
| 7 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 焼土粒微量混じる | 16 10YR 3/3 暗褐色シルト |
| 8 10YR 3/2 黒褐色シルト 木根による攪乱 | 17 10YR 4/4 褐色砂質シルト 11層と同じ |
| 9 10YR 3/4 暗褐色砂質シルト 壁の崩落 | 18 10YR 2/3 黒褐色シルト 木根による攪乱 |

a L=124.000



- a-b
- | |
|------------------------------|
| 1 10YR 3/3 暗褐色シルト |
| 2 10YR 2/3 黒褐色シルト |
| 3 10YR 4/4 褐色砂質シルトがブロック状に混じる |
| 4 10YR 3/4 暗褐色シルト |
| 5 10YR 2/3 黒褐色シルト |
| 6 7.5YR 3/3 暗褐色シルト 炭化物少量含む |
| 7 7.5YR 2/3 極暗褐色焼土 焼成はごくよわい |
| 8 10YR 3/4 暗褐色砂質シルト |
| 9 7.5YR 3/4 暗褐色シルト 焼成はごくよわい |
| 10 7.5YR 2/2 黒褐色シルト |
| 11 5YR 3/6 暗赤褐色焼土 焼成よく堅い |

第19図 RA 03竪穴住居跡



第20図 R A 03 竪穴住居跡・出土遺物

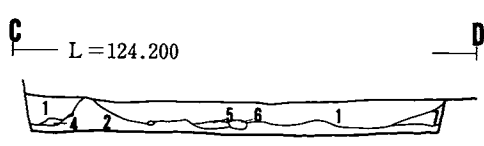
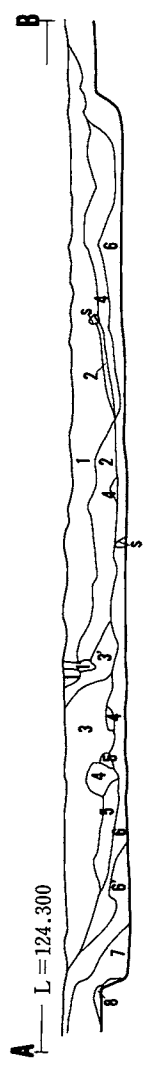
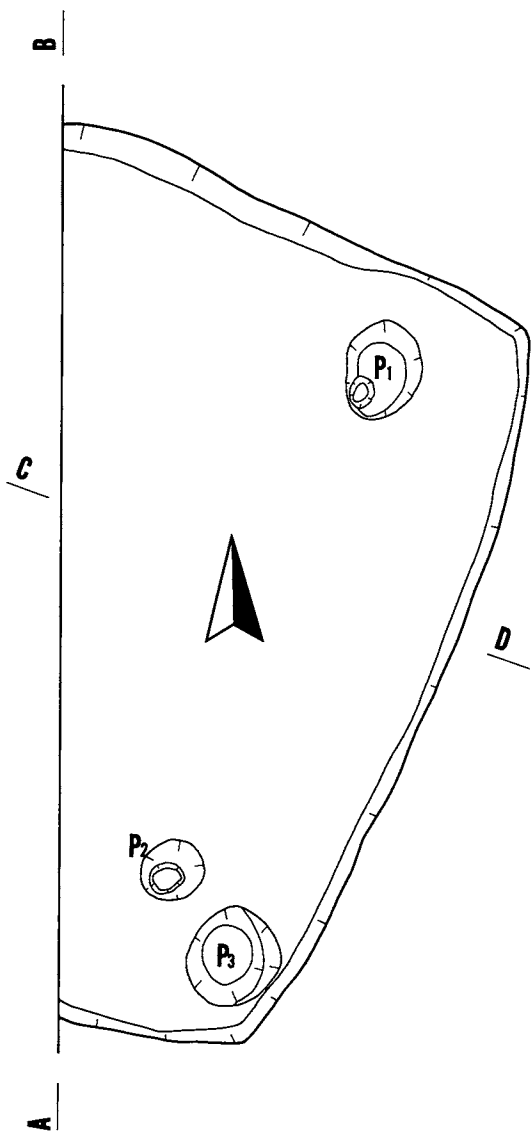
〈カマド〉 調査した範囲内には検出されなかった。遺構の北西側半分のうち、北西壁に構築しているものと推定される。

〈遺物の出土〉 埋土から出土している。土器のみの出土である。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代である。

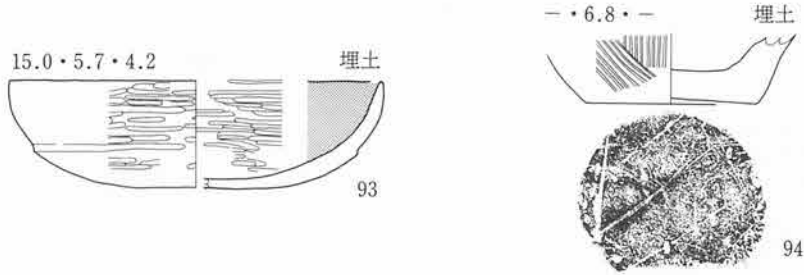
遺物（第20図、写真図版32）

〈土器〉 93は土師器坏形土器である。体部下半に段を持ち、丸底である。内面ミガキのち黒色処理を施している。94は土師器甕形土器の底部破片。底部には木葉痕を伴う。



- R A 04 竪穴住居跡
- 1 7.5YR 3/2 黒褐色シルト
 - 1' 7.5YR 3/2 黒褐色シルト 木根による攪乱
 - 2 7.5YR 2/2 黒褐色シルト
 - 3 7.5YR 2/2 黒褐色シルト
 - 4 7.5YR 2/1 黒色シルト
 - 5 10YR 2/3 黒褐色シルト
 - 6 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト ローム粒を少量含む
 - 6' 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト 焼土粒微量混じる
 - 7 7.5YR 3/2 黒褐色シルト
 - 8 10YR 4/4 褐色砂質シルト

第21図 R A 04 竪穴住居跡



第22図 R A 04 竪穴住居跡・出土遺物

R A 05 竪穴住居跡

遺構（第22図、写真図版7）

〈位置と残存状況〉 7 Q 18 d ほか。R C 01 柱穴列と隣接する。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ長方形である。規模は4.0cm×3.5cmである。

〈埋土〉 11層に細分される。霜降り状に灰白色火山灰を含む黒褐色土を主体とする。

〈壁〉 床面からほぼ直立して立ち上がる。壁高は南東壁で42cm、北東壁で45cm、北西壁で43cm、南西壁で42cmである。

〈床〉 ほぼ平坦である。貼り床である。掘り方は比較的浅い。

〈柱穴・土坑〉 遺構に伴う主柱穴はP₁～P₄の4個である。平面形はほぼ円形で、深さは34～43cmである。

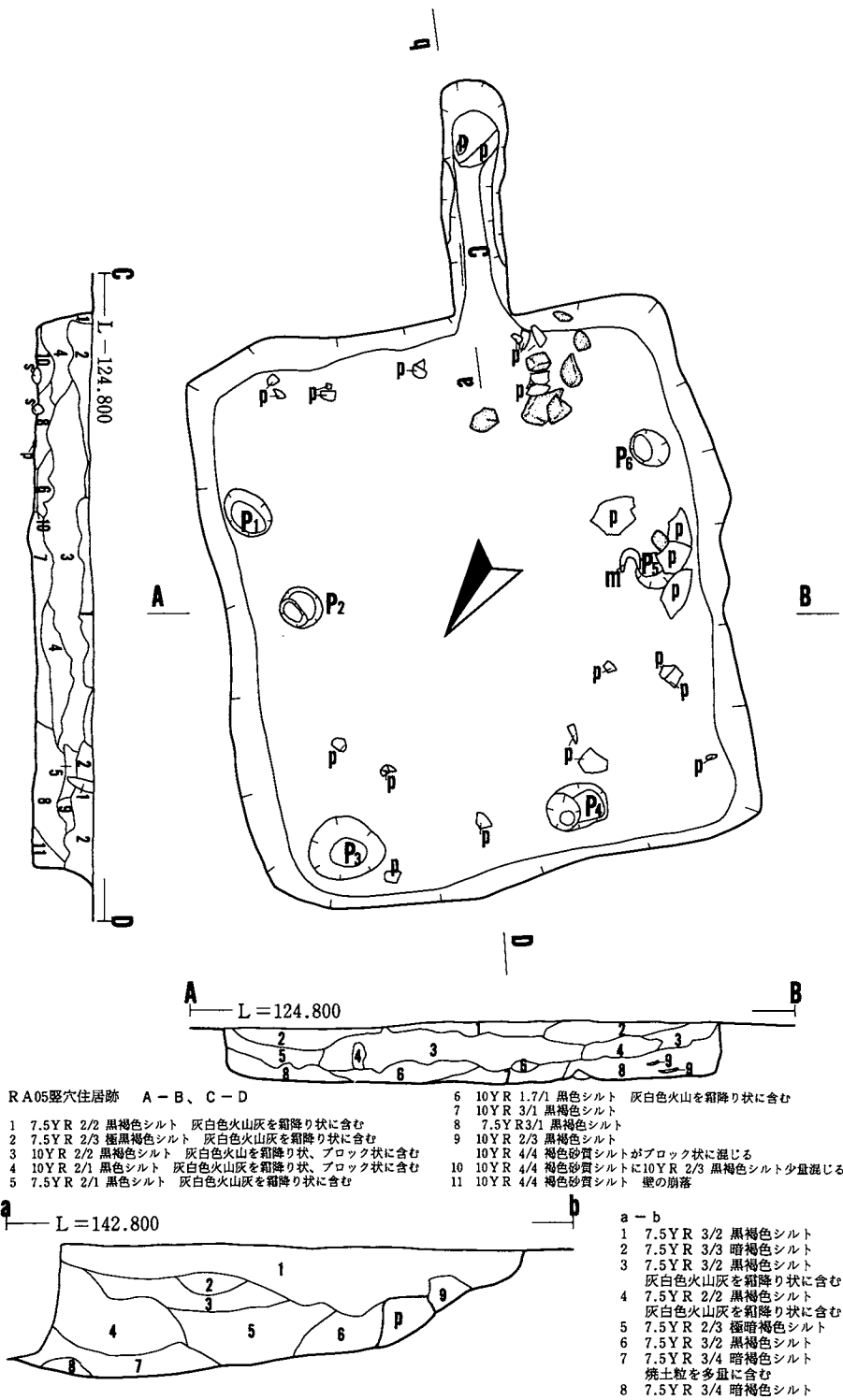
〈カマド〉 南東壁の南隅寄りに構築されている。煙道は掘り込み式で、規模は本体が78cm×72cm、煙道部の長さ175cm、深さは最大で47cmである。袖部は礫および土師器甕形土器の破片で構築されている。燃烧部の焼土の焼成はよくない。煙道部から須恵器大型甕形土器の破片が出土している。

〈遺物の出土〉 床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

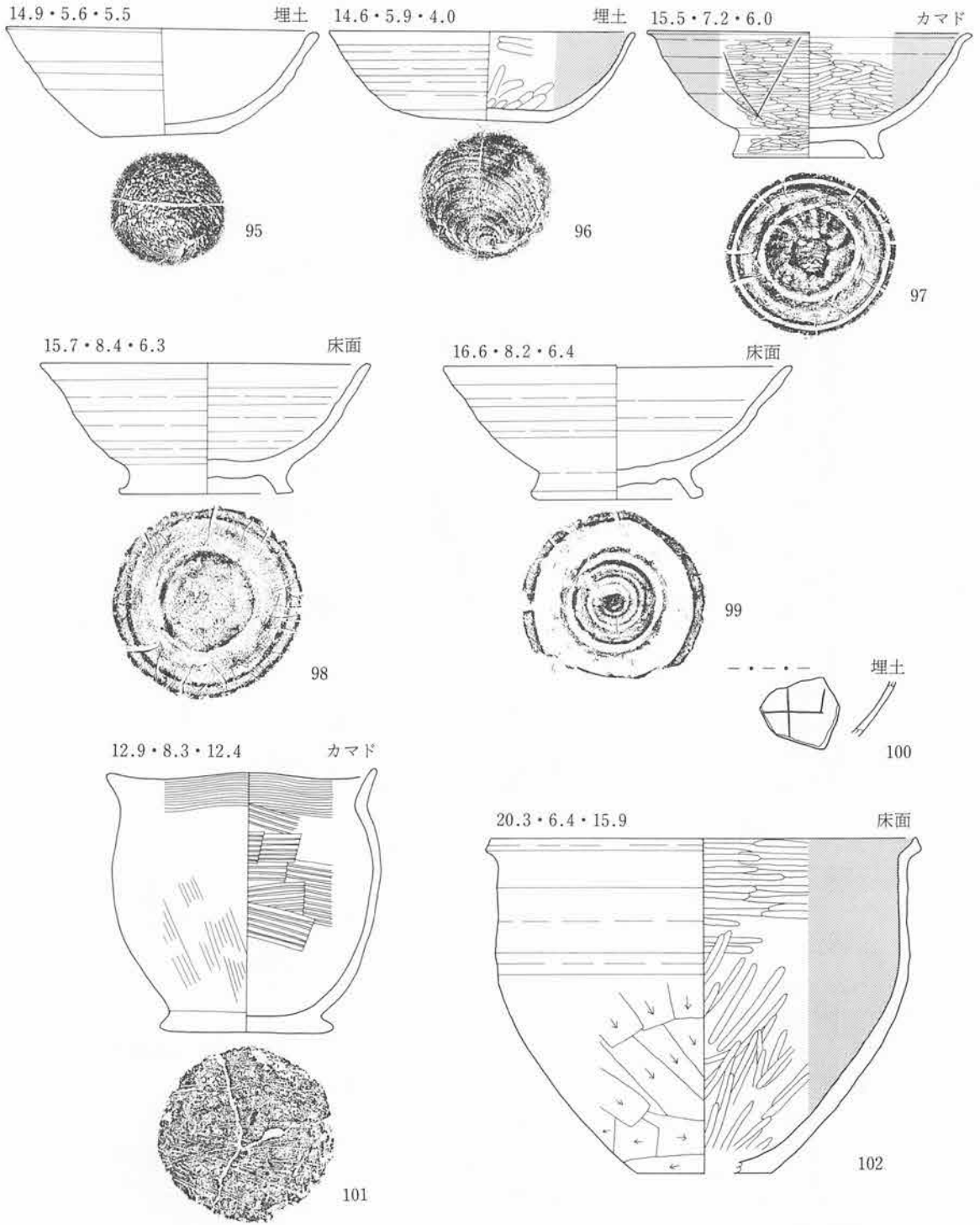
〈時期〉 埋土中の火山灰や出土した遺物から平安時代に属する。

遺物（第23～25図、写真図版32、33）

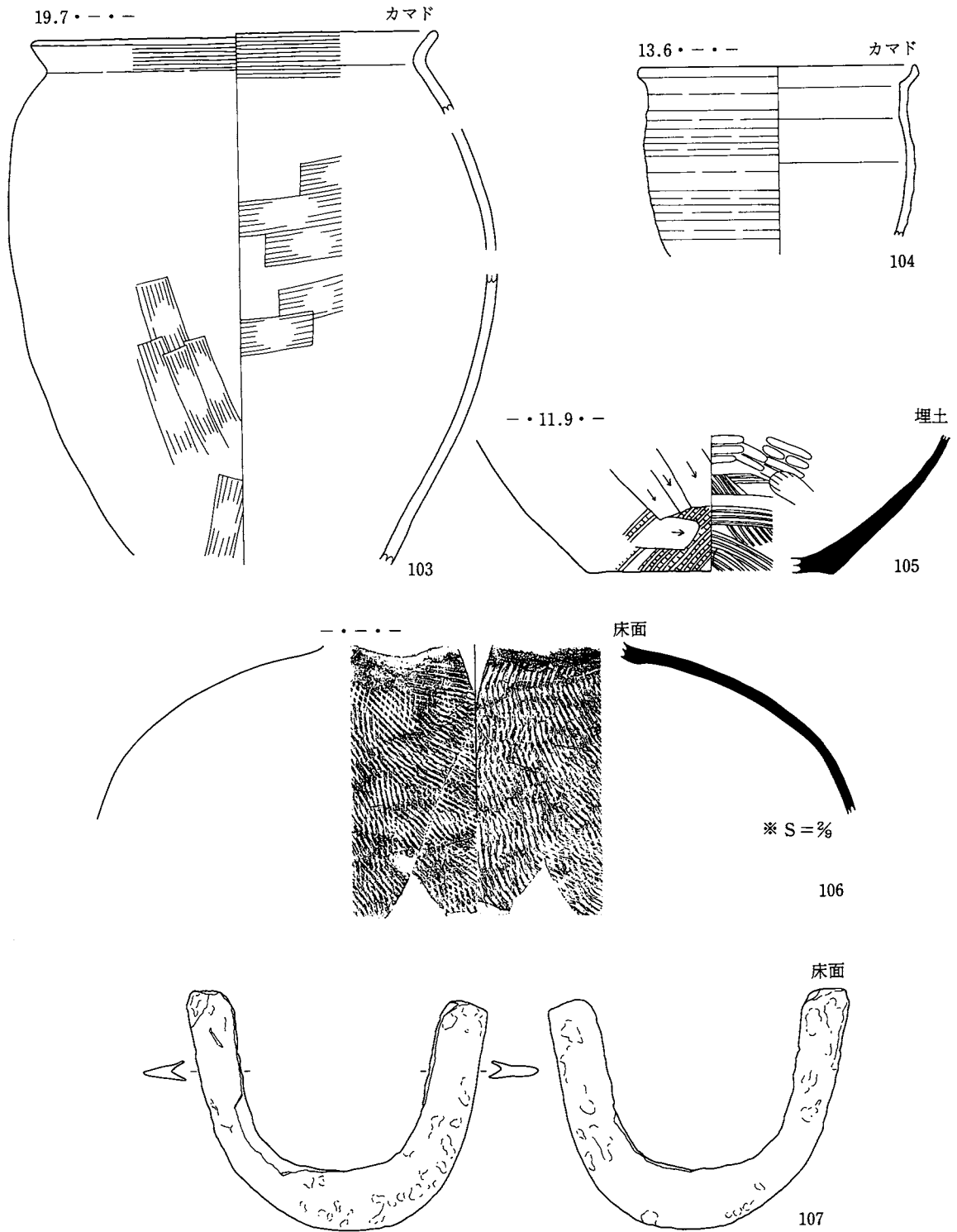
〈土器〉 95、96、108～110は土師器环形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。95、108～110は内外面とも無調整である。96は内面ミガキのち黒色処理を施している。97～99は高台付き环形土器である。97は内外面とも丹念なミガキのち、黒色処理を施している。体部外面に3本の線が刻まれており、体部最下位の1点で交叉する。高台部の内面は丁寧になでつけられている。高台底面には沈線をもつ。98、99は内外面とも無調整である。大きめのもので、体部はやや薄手である。100は土師器环形土器あるいは高台付き环形土器の体



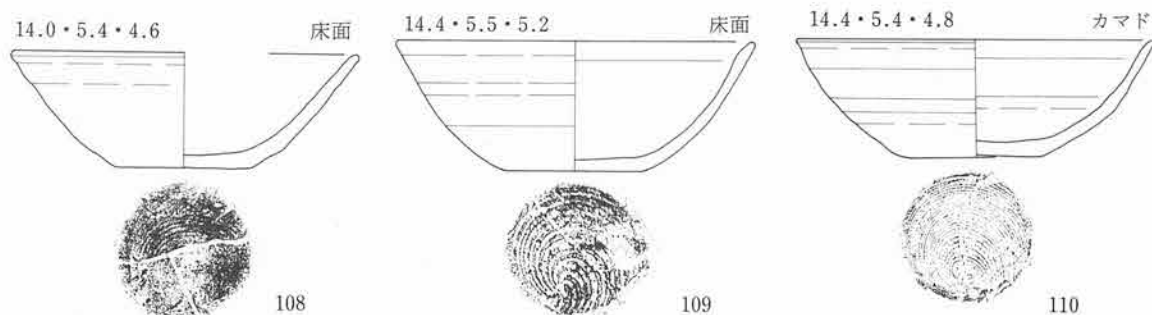
第23図 RA 05 竪穴住居跡



第24図 R A 05 竪穴住居跡・出土遺物 - I



第25図 R A 05 竪穴住居跡・出土遺物 - 2



第26図 R A 05 竪穴住居跡・出土遺物 - 3

部破片で内外面ともミガキのち黒色処理を施したのち外面に交叉する2本の線が刻まれる。水平方向の線は右端で上方へ直角に曲がる。101、103、104はカマドから出土した土師器甕形土器。101はロクロ未使用で内面および底面に痕が見られる。103はやや薄手で胴の張る器形。ロクロ未使用。104はロクロ使用。102は床面から出土したロクロ使用の土師器鉢形土器で体部外面の下半はヘラケズリ調整、内面はミガキのち黒色処理を施している。105、106は須恵器甕形土器、105は底部破片、106は体部上半の破片。床面および煙道から出土した破片が接合した。

〈鉄製品〉107は床面から出土した鋤先である。

R A 06 竪穴住居跡

遺構（第26図、写真図版8）

〈位置と残存状況〉7 Q 22 o ほか。R A 07 竪穴住居跡に隣接する。壁上部の崩落が著しい。

〈形状と規模〉北東壁を長辺とする隅丸台形である。規模は長辺の北東壁が2.8m、短辺の南西壁が2.3m、北東-南西方向が約2.8mである。

〈埋土〉9層に細分される。自然堆積である。埋土に灰白色火山灰を含まない。

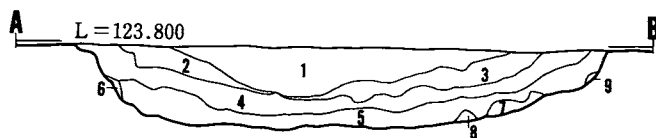
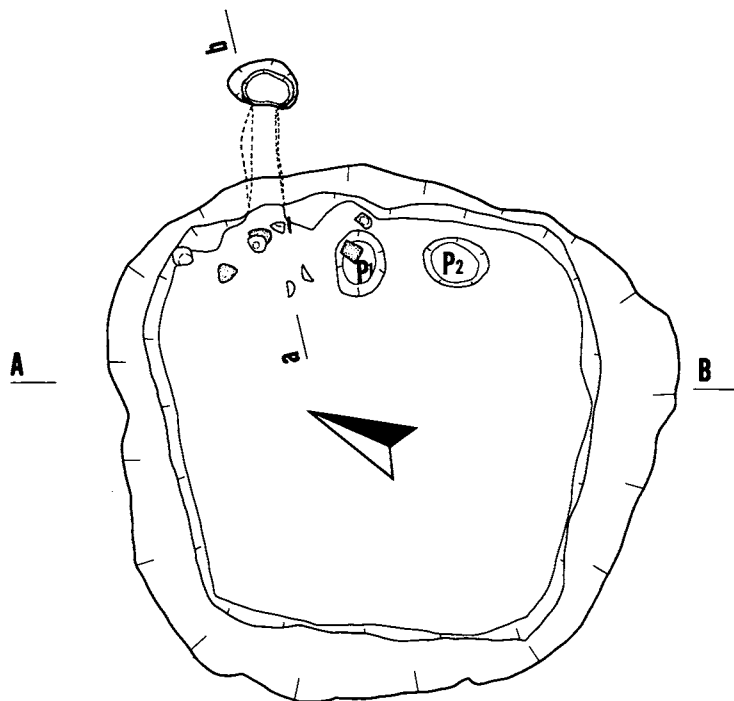
〈壁〉床面から緩やかに立ち上がる。壁の上部は崩落によって失われている。

〈床〉地山IV層を掘り込んで床面としている。

〈柱穴・土坑〉カマドを構築している北東壁沿いに2個検出したが、貯蔵穴と思われる。

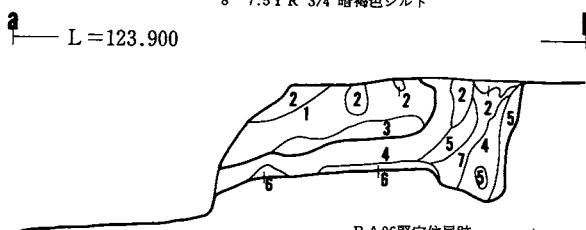
〈カマド〉北東壁の北隅寄りに構築されている。煙道はくりぬき式で、規模は長さ106cm、幅は27cm前後である。北東壁を掘り込んで袖としている。燃焼部の焼土の焼成は不良である。燃焼部の規模は60cm以下と推定される。

〈時期〉出土した遺物から平安時代に属する。



RA06竪穴住居跡 A-B

- 1 7.5YR 2/1 黒色砂質シルト 小礫を含む
- 2 7.5YR 2/2 黒褐色砂質シルト 小礫を含む
- 3 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト
- 4 7.5YR 3/2 黒褐色シルト
- 5 10YR 3/1 黒褐色シルト
- 6 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト
- 7 10YR 3/4 暗褐色シルト 黄褐色粘質シルト粒多量に混じる
- 8 7.5YR 3/4 暗褐色シルト



RA06竪穴住居跡 a-b

- 1 10YR 4/4 褐色砂質シルト 地山
- 2 7.5YR 3/3 暗褐色シルト
- 3 10YR 3/3 暗褐色シルト
- 4 7.5YR 3/2 黒褐色シルト
- 5 7.5YR 3/3 暗褐色砂質シルト
- 6 10YR 4/6 褐色砂質シルト
- 7 10YR 3/4 暗褐色シルト

第27図 RA06竪穴住居跡

12.9・5.0・4.3 床面



111

13.0・5.4・4.2 床面



112

13.0・6.0・3.6 床面



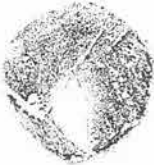
113

13.0・5.0・3.4 床面



114

13.5・5.7・4.1 床面



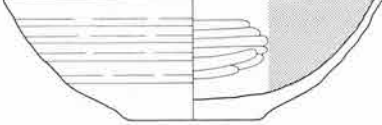
115

13.9・6.2・4.1 床面



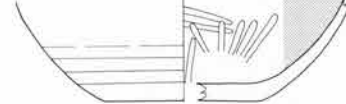
116

15.2・5.2・5.0 床面



117

—・6.2— 床面



118

13.1・4.9・3.7 カマド



119

13.3・4.7・5.0 埋土



120

13.5・5.6・3.8 カマド



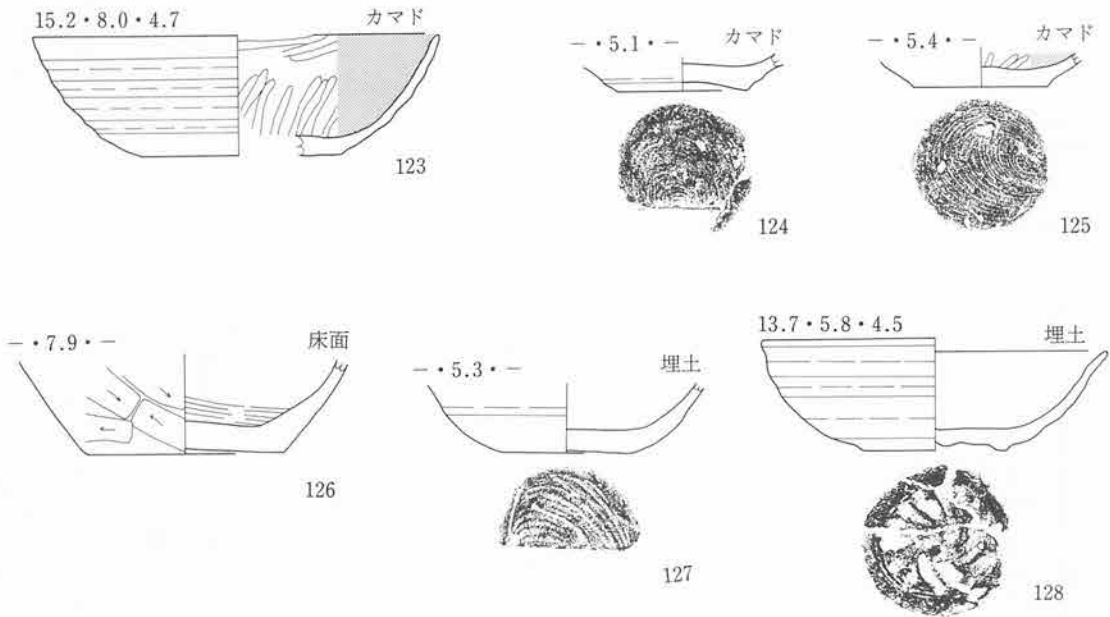
121

13.0・5.0・3.8 床面



122

第28図 R A 06 竪穴住居跡・出土遺物 - I



第29図 R A 06 竪穴住居跡・出土遺物 - 2

遺物 (第27, 28図、写真図版34)

カマド付近の床面を中心に、埋土からも出土している。

〈土器〉111~125、127は土師器坏形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離し回転糸切りである。112、115、117、118、123、127は内面ミガキのち黒色処理を施している。そのほかは内外面とも無調整である。123はやや大ぶり。126は土師器甕形土器の底部破片、底面近くをヘラケズリ調整。128は高台部が剝離した土師器高台付坏形土器。底面にはナデツケ痕が残る。

R A 07 竪穴住居跡

遺構 (第29図、写真図版9)

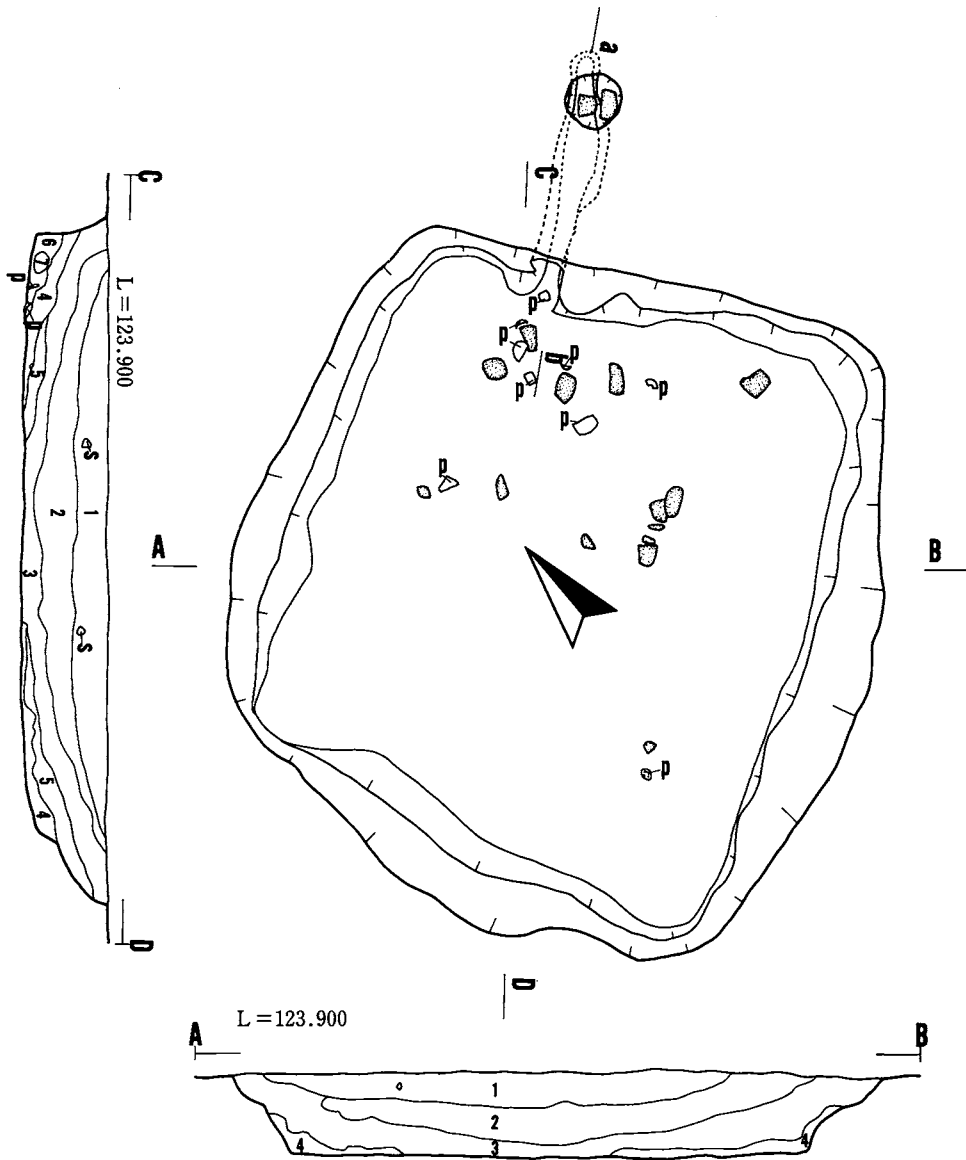
〈位置と残存状況〉7 Q 24 q ほか。R A 06 竪穴住居跡に隣接する。壁上部の崩落が著しい。

〈形状と規模〉東南壁を長辺とする隅丸台形である。規模は長辺の南東壁が4.1m、短辺の北西壁が3.4m、北東-南西方向が約3.5mである。

〈埋土〉7層に細分される。自然堆積である。埋土に灰白色火山灰は含まない。

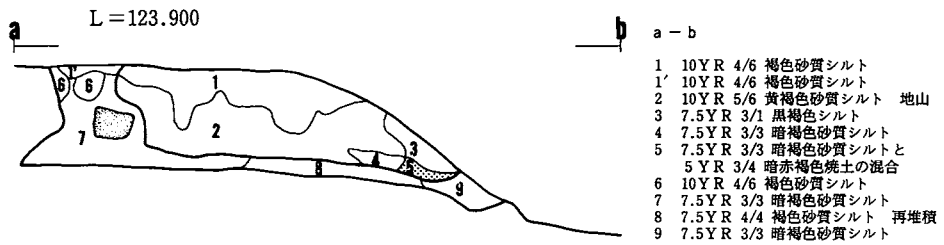
〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。壁の上部は崩落によって失われている。

〈床〉地山IV層を掘り込んで床面としている。



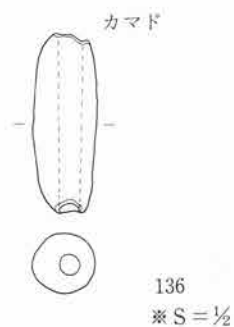
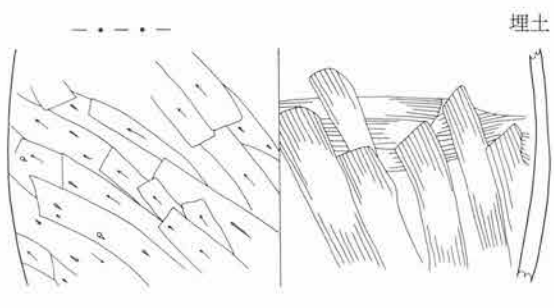
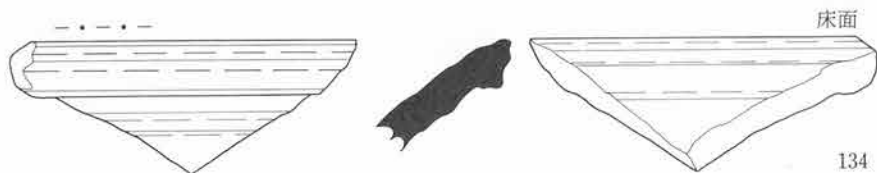
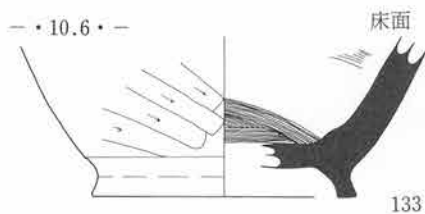
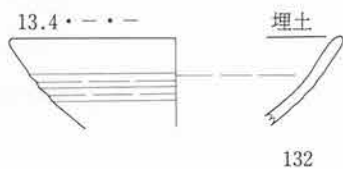
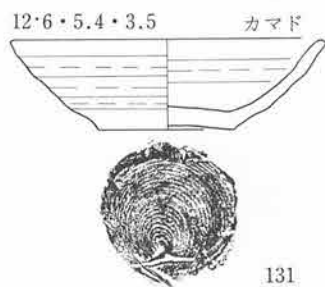
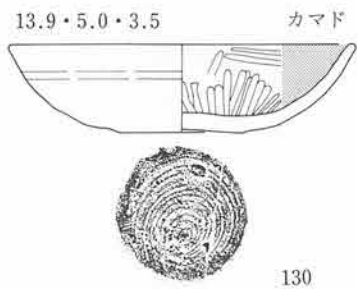
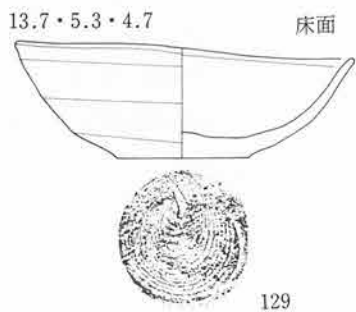
RA07竪穴住居跡 A-B、C-D

- | | |
|------------------------------|-------------------------------------|
| 1 10Y R 2/1 黒色砂質シルト 小礫を含む | 5 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト |
| 2 7.5Y R 1.7/1 黒色砂質シルト 小礫を含む | 6 7.5Y R 2/3 極暗褐色シルト |
| 3 10Y R 2/2 黒褐色シルト | 7 10Y R 4/6 褐色砂質シルト 部分的にかゝる焼成をうけている |
| 4 10Y R 3/3 暗褐色シルト | |



- | |
|--|
| 1 10Y R 4/6 褐色砂質シルト |
| 1' 10Y R 4/6 褐色砂質シルト |
| 2 10Y R 5/6 黄褐色砂質シルト 地山 |
| 3 7.5Y R 3/1 黒褐色シルト |
| 4 7.5Y R 3/3 暗褐色砂質シルト |
| 5 7.5Y R 3/3 暗褐色砂質シルトと
5Y R 3/4 暗赤褐色焼土の混合 |
| 6 10Y R 4/6 褐色砂質シルト |
| 7 7.5Y R 3/3 暗褐色砂質シルト |
| 8 7.5Y R 4/4 褐色砂質シルト 再堆積 |
| 9 7.5Y R 3/3 暗褐色砂質シルト |

第30図 RA07竪穴住居跡



第31図 R A 07 竪穴住居跡・出土遺物 - 3

〈柱穴・土坑〉 検出されなかった。

〈カマド〉北東壁の北隅寄りに構築されている。煙道はくりぬき式で、規模は長さ160cm、幅32cm前後である。煙出し部を亜円礫で構築した痕跡が見られる。北東壁を掘り込んで袖を構築している。燃焼部の焼土の焼成は不良である。燃焼部の規模は40cm前後と推定される。

〈遺物の出土〉 床面を中心に埋土からも出土している。土器、土製品で構成される。

〈時期〉 出土した遺物から平安時代に属する。

遺物（第30図、写真図版35）

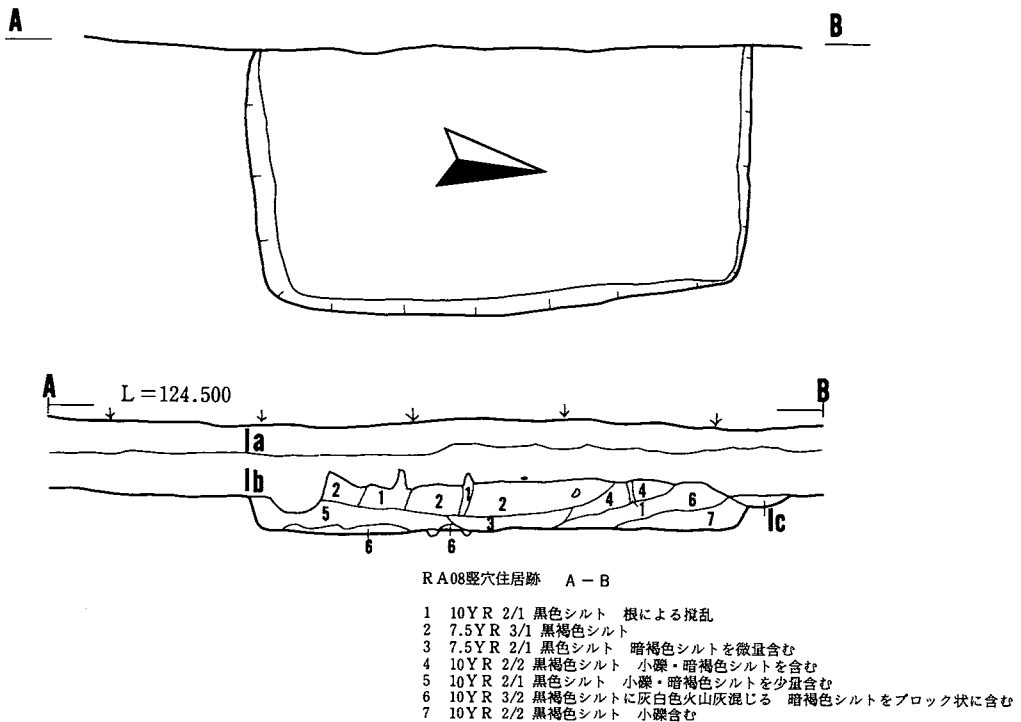
〈土器〉 129～132は土師器环形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。130は内面ミガキのち黒色処理を施している。口径・底径に比して器高の小さい器形である。そのほかは無調整である。133は高台をもつ須恵器壺形土器の底部破片。134は須恵器甕形土器の口縁部破片。135は土師器甕形土器の胴部破片である。

〈土製品〉 136はカマドから出土した土錘である。

R A 08 竪穴住居跡

遺構（第31図、写真図版10）

〈位置と残存状況〉 6 N 9 o ほか。遺構の西半分が調査範囲外にある。



第32図 R A 08竪穴住居跡

〈形状と規模〉遺構の西半分が調査範囲外にあるため全体の形状は不明であるが、調査した東半分は南北方向約3.2mの方形を呈する。

〈埋土〉7層に細分される。

〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。

〈床〉基本土層のII層を掘り込んで床としている。掘り方はない。

〈柱穴・土坑〉検出されなかった。

〈カマド〉調査した東半分には検出されなかった。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

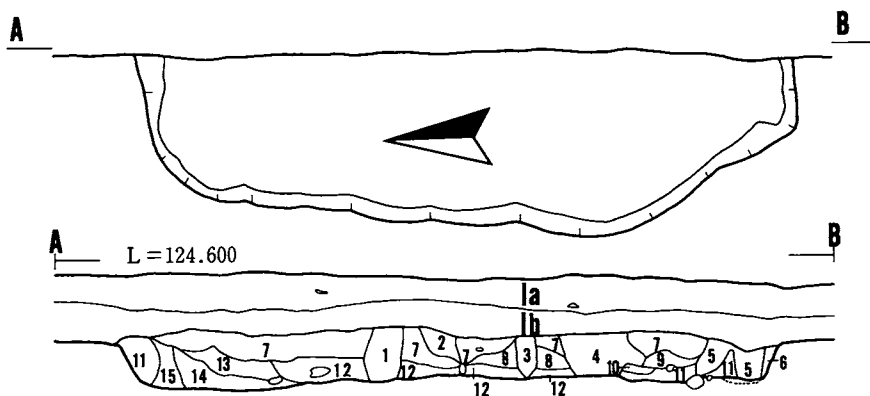
〈時期〉検出面および周辺から出土した遺物から平安時代に属するものと推定される。

R A 09 竪穴住居跡

遺構（第32図、写真図版10）

〈位置と残存状況〉6 N 6 y ほか。遺構の東半分が調査範囲外にある。

〈形状と規模〉遺構の東半分が調査範囲外にあるため全体の形状は不明であるが、調査した西半分は南北4.2mの不整な方形を呈する。



R A 09竪穴住居跡 A - B

- | | | | | | |
|-----|--------------------|--------------------|----|--------------------|---------------|
| 1~5 | 10 Y R 2/1 黒褐色シルト | 根による攪乱 | 11 | 10 Y R 2/3 黒褐色シルト | 礫を少量含む |
| 6 | 10 Y R 2/3 黒褐色シルト | | 12 | 7.5 Y R 2/2 黒褐色シルト | 小礫を多量に含む |
| 7 | 10 Y R 2/2 黒褐色シルト | 小礫・炭化物・灰白色火山灰を含む | 13 | 10 Y R 3/4 暗褐色シルト | |
| 8 | 10 Y R 2/3 黒褐色シルト | 炭化物含む 褐色土がブロック状に混入 | 14 | 7.5 Y R 2/1 黒色シルト | 灰白色火山灰を含む |
| 9 | 7.5 Y R 2/2 黒褐色シルト | | 15 | 10 Y R 2/3 黒褐色シルト | 暗褐色土をブロック状に含む |
| 10 | 10 Y R 3/3 暗褐色シルト | | | | |

第33図 R A 09竪穴住居跡平面・埋土断面

- 〈埋土〉 15層に細分される。耕作による攪乱が著しい。
- 〈壁〉 床面からほぼ直立して立ち上がる。
- 〈床〉 基本土層のII層を掘り込んで床としている。掘り方はない。
- 〈柱穴・土坑〉 検出されなかった。
- 〈カマド〉 調査した西半分には検出されなかった。
- 〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。
- 〈時期〉 検出面および周辺から出土した遺物から平安時代に属するものと推定される。

2. 掘立柱建物跡

R B 01 掘立柱建物跡

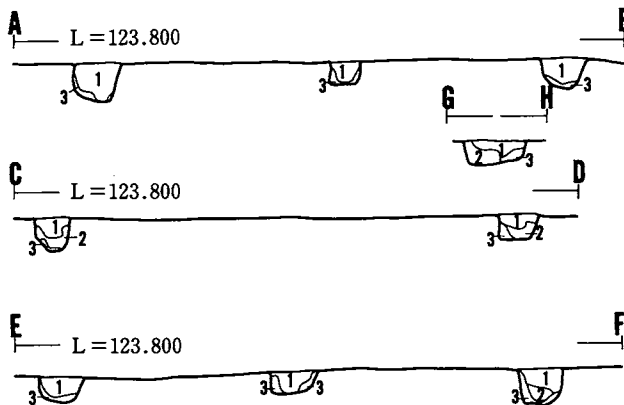
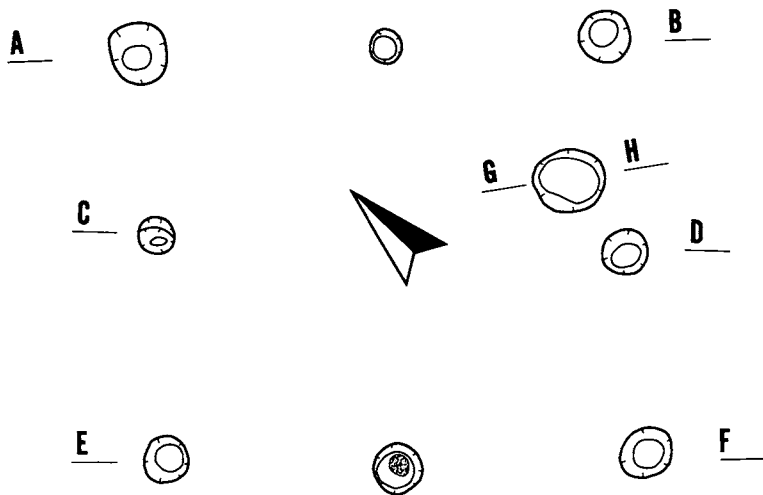
遺構（第33図、写真図版11）

- 〈位置と残存状況〉 7 Q18 g ほか。R A05竪穴住居跡の東に隣接する。
- 〈形状と規模〉 掘り方は9ヶ所検出され、桁行2間（3.1m）×梁行2間（2.6m）の北西－南東棟（N－45°－W）である。柱穴間距離は1.6m～1.2mである。
- 〈柱穴の掘り方〉 平面形はほぼ円形で、規模は35cm×24cm前後、深さは25cm～15cmである。埋土は灰白色火山灰が霜降り状に混じる黒褐色土が主体で、ほぼ単層である。柱痕跡はP₇以外には検出されなかった。P₉は柱穴にはならない可能性もある。
- 〈出土遺物〉 本遺構から遺物は出土していない。
- 〈時期〉 埋土中の火山灰から平安時代に属する。

R B 02 掘立柱建物跡

遺構（第34図、写真図版12）

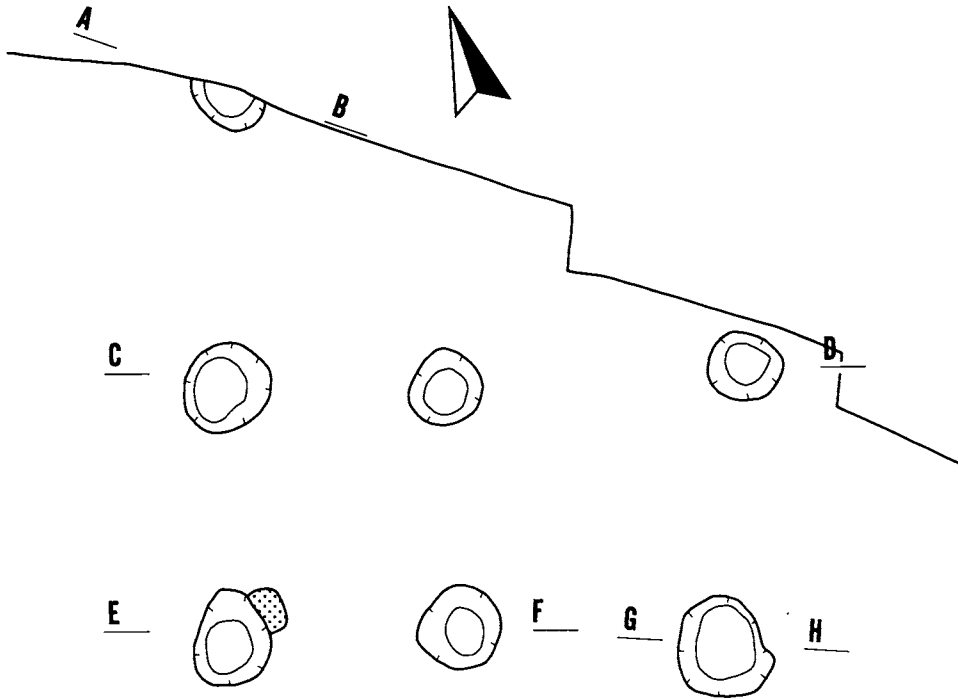
- 〈位置と残存状況〉 7 Q24 u ほか。R A07竪穴住居跡の東に隣接する。柱穴の北東列は調査範囲外にあるものと推定される。R C03柱穴列と重複し、これより新しい。
- 〈形状と規模〉 掘り方は7ヶ所検出され、桁行2間（3.8）m×梁行2間（3.4m）の北西－南東棟（N－17°－E）になると推定される。柱穴間距離は1.9m～1.5mである。
- 〈柱穴の掘り方〉 平面形は不整平面形のもので、規模65cm～45cm×55cm～45cm、深さは45cm～28cmである。埋土に灰白色火山灰を含まない。柱痕跡は検出されなかった。
- 〈出土遺物〉 本遺構から遺物は出土していない。
- 〈時期〉 平安時代に属するものと推定される。



RB01掘立柱建物跡 A-B、C-D、E-F、G-H

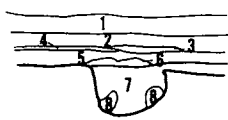
- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰が霜降り状に混じる
- 2 7.5YR 2/3 黒褐色シルト
- 3 10YR 3/4 暗褐色砂質シルト

第34図 RB01掘立柱建物跡平面・埋土断面



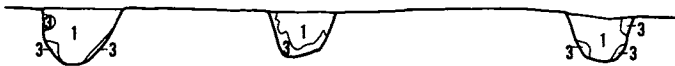
A — L = 124.000 — B

R B02掘立柱建物跡 A - B



- 1 7.5YR 2/1 黒色シルト 表土
- 2 7.5YR 2/2 黒褐色シルト
- 3 7.5YR 3/2 黒褐色シルト 酸化鉄含む
- 4 7.5YR 3/1 里褐色シルト
- 5 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 6 10YR 2/3 黒褐色シルト
- 7 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり
- 8 10YR 3/4 暗褐色砂質シルト

C — L = 123.800 — D



E — L = 123.800 — F

G — L = 123.800 — H



R B02掘立柱建物跡 C - D、E - F、G - H

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト
- 2 10YR 3/3 暗褐色シルト 10YR 4/6 褐色砂質シルトがブロック状に入る
- 3 10YR 4/6 褐色砂質シルト

第35図 R B02掘立柱建物跡平面・埋土断面

3. 柱穴列

R C 01 柱穴列

遺構 (第35図、写真図版13)

〈位置と残存状況〉 7 Q 8 x ほか。R A 01 竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

〈形状と規模〉 2 個の柱穴を検出した、列の方向は北西-南東 (N-44°-W) で、どちらも石を集めており礎石状にしている。柱穴間の距離は4.6mである。

〈柱穴の掘り方〉 ほぼ黒褐色土の単層である。柱痕跡は検出されなかった。

〈出土遺物〉 本遺構から遺物は出土していない。

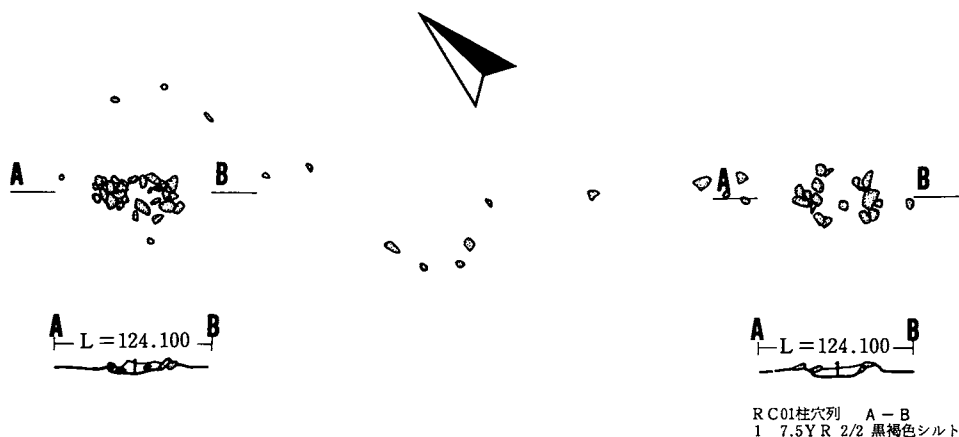
〈時期〉 平安時代より新しいが、時代を断定する資料は出土しておらず不明である。

R C 02 柱穴列

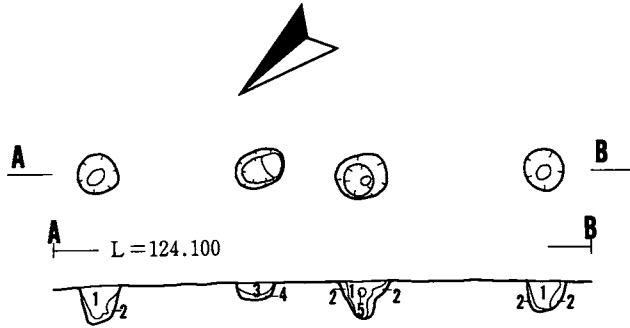
遺構 (第36図、写真図版13)

〈位置と残存状況〉 7 Q 20 e ほか。R A 05 竪穴住居跡の南東に隣接する。

〈形状と規模〉 4 個の柱穴を検出した。列の方向は北東-南西 (N-40°-E) で、長さ2.9mである。柱穴間の距離は1.2m~0.7mで、R A 05 竪穴住居跡に付属する可能性もある。

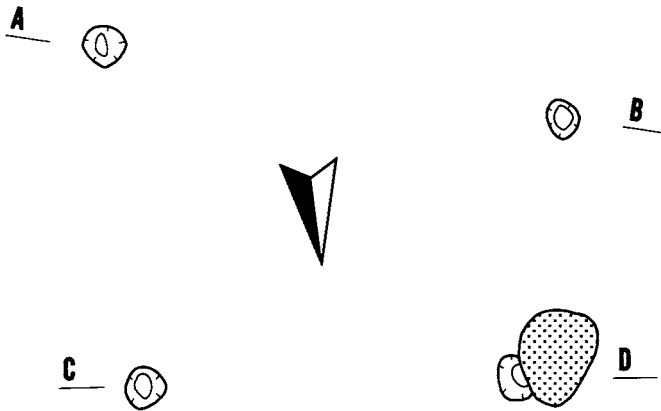


第36図 R C 01 柱穴列平面・埋土断面



RC02柱穴列 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰が霜降り状に混じる
- 2 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト
- 3 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 4 10Y R 3/4 暗黒褐色砂質シルトと7.5Y R 2/2 黒褐色シルトの混合
- 5 灰白色火山灰ブロック



RC03柱穴列 A-B

- 1 10Y R 2/2 黒褐色シルト 粘性つよい
- 2 10Y R 3/4 暗褐色シルト

第37図 RC02・03柱穴列平面・埋土断面

〈柱穴の掘り方〉平面径は不整形円で、規模は35cm～32cm×29cm～27cm、深さは25cm～10cmである。埋土は灰白色火山灰が霜降り状に混じる黒褐色土が主体で、それぞれ2層に細分される。柱痕跡は検出されなかった。

〈出土遺物〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代に属するものと推定される。

R C 03 柱穴列

遺構（第36図、写真図版13）

〈位置と残存状況〉7 Q 25 u ほか。R B 02掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

〈形状と規模〉4個の柱穴が台形状に配列される。平行する南側の長い列の方向が北西－南東方向(N-18°-N)で、柱穴間の距離はP₁-P₂が2.25m、P₂-P₃が2.5m、P₃-P₄が1.5m、P₄-P₁が3.05mである。

〈柱穴の掘り方〉平面形は不整形円で、規模は径29cm～23cm、深さは22cm～7cmである。埋土は黒褐色土が主体で、2層に大別できる。柱痕跡は検出されなかった。

〈出土遺物〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉R B 02掘立柱建物跡より古いことから平安時代か平安時代以前と推定される。

4. 土 坑

R D 01 土坑

遺構（第37図、写真図版14）

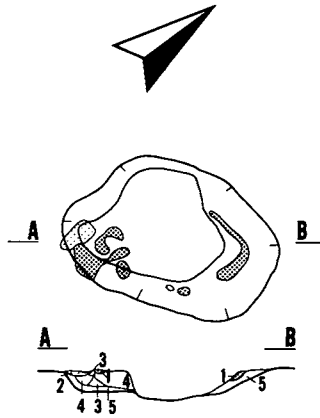
〈位置と残存状況〉7 N 7 i。はじめ焼土遺構として登録したものであるが、精査の進行に伴い土坑に登録変更したものである。

〈形状と規模〉平面形は不整形形を呈し、断面形はバケツ形である。規模は開口部径144cm×95cm、底部径97cm×71cm、深さは中心部で18cmである。壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。検出面には焼土が形成されている。

〈埋土〉黒褐色土主体で5層に細分される。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉不明である。



R D 01土坑

- 1 5 Y R 3/4 暗赤褐色 焼土
- 2 5 Y R 3/2 暗赤褐色 焼土
- 3 10 Y R 2/1 黒色 炭化物層須
- 4 7.5 Y R 3/3 暗褐色シルト
- 5 7.5 Y R 2/2 黒褐色シルト 10 Y R 4/6 褐色砂質シルト微量含む

第38図 R D 01土坑平面・埋土断面

R D 02 土坑

遺構（第38図、写真図版14）

〈位置と残存状況〉 7 P 8 v ほか。R A 01 竪穴住居跡の西に隣接する。

〈形状と規模〉 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径242cm×151cm、底部径210cm×128cm、深さは中心部で57cmである。壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

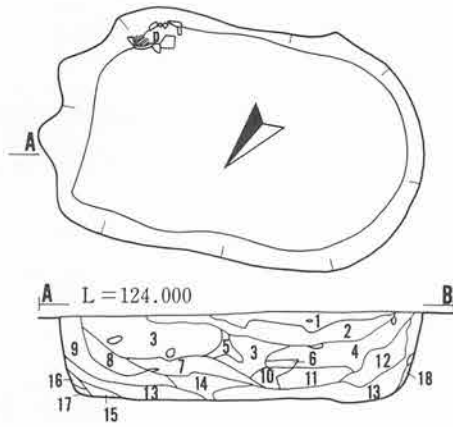
〈埋土〉 黒褐色土主体で18層に細分される。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器、底面から土師器甕形土器が出土している。

〈時期〉 埋土の状況・出土遺物から平安時代に属する。

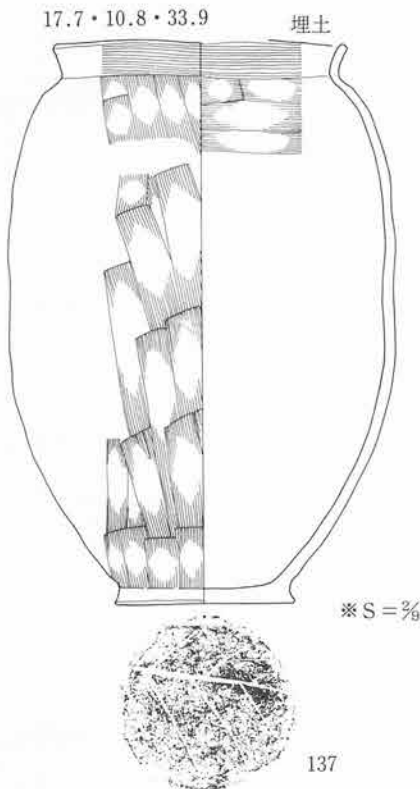
遺物（第38図、写真図版35）

〈土器〉 137は土師器甕形土器である。ロクロ未使用成形で胴部が膨らむ長胴甕である。底部には木葉痕が見られる。138は土師器坏形土器の底部破片でロクロ成形、底部切り離しは回転糸切り、無調整である。

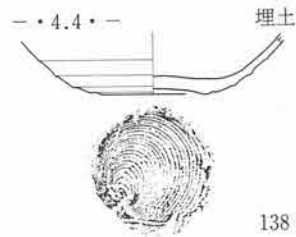


RD02土坑 A-B

- | | | | |
|----|------------|----------|---------------|
| 1 | 7.5Y R 3/2 | 暗褐色シルト | 小礫を含む |
| 2 | 7.5Y R 2/2 | 黒褐色シルト | |
| 3 | 10Y R 4/4 | 褐色砂質シルト | |
| 4 | 10Y R 3/3 | 暗褐色砂質シルト | |
| 5 | 10Y R 2/3 | 黒褐色シルト | 根による擾乱 |
| 6 | 10Y R 2/2 | 黒褐色シルト | |
| 7 | 7.5Y R 2/2 | 黒褐色シルト | |
| 8 | 10Y R 3/4 | 暗褐色シルト | |
| 9 | 10Y R 3/4 | 暗褐色シルト | 灰白色火山灰を微量含む |
| 10 | 10Y R 3/3 | 暗褐色シルト | 灰白色火山灰を多量に含む |
| 11 | 10Y R 2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色土をブロック状に含む |
| 12 | 7.5Y R 3/3 | 暗褐色シルト | 小礫を含む |
| 13 | 7.5Y R 2/4 | 黒褐色シルト | |
| 14 | 10Y R 3/4 | 暗褐色シルト | 黄褐色土をブロック状に含む |
| 15 | 7.5Y R 2/3 | 極暗褐色シルト | |
| 16 | 10Y R 5/6 | 黄褐色砂質シルト | 地山の再堆積 |
| 17 | 10Y R 4/4 | 褐色砂質シルト | |
| 18 | 7.5Y R 3/3 | 暗褐色シルト | |



137



138

第39図 RD02土坑・平面・埋土断面・出土遺物

R D 03 土坑

遺構（第39図、写真図版14）

〈位置と残存状況〉 7 P 6 t ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整楕円形を呈する。規模は開口部径148cm×96cm、底部径119cm×66cm、深さは中心部で19cmである。壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に細分される。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器2点が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

遺物（第39図、写真図版35）

〈土器〉 139、140は土師器坏形土器でロクロ成形、底部切り離しは回転糸切り、無調整である。

R D 04 土坑

遺構（第39図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉 7 P 5 t ほか。

〈形状と規模〉 平面形は長方形を呈し、断面形も長方形である。規模は開口部径158cm×104cm、底部径142cm×77cm、深さは中心部で28cmである。壁は底面よりほぼ直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。人為堆積と推定される。

〈遺物の出土〉 底面から土師器坏形土器1点が出土している。

〈時期〉 埋土の状況・出土遺物から平安時代に属する。

遺物（第39図、写真図版35）

〈土器〉 141は土師器坏形土器でロクロ成形、底部切り離しは回転糸切り、内面ミガキのち黒色処理を施している。

R D 05 土坑

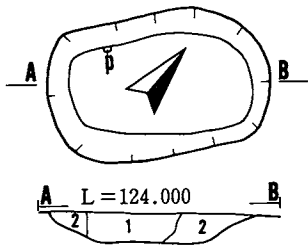
遺構（第40図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉 7 P 2 m ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整長方形を呈する。規模は開口部径200cm×97cm、底部径167cm×73cm、深さは中心部で24cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

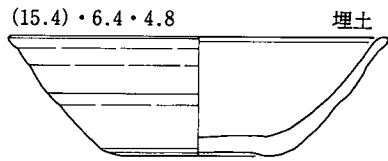
〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 底面・埋土から土師器坏形土器、土師器甕形土器が出土している。

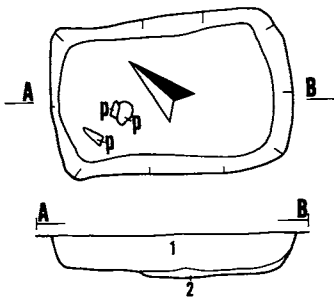


RD03土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/3 極暗褐色シルトに褐色シルト粒少量含む
- 2 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト

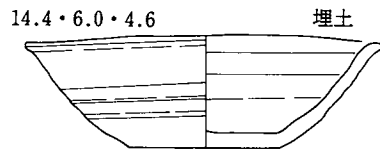


139

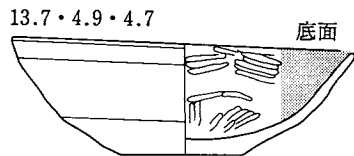


RD04土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 褐色シルト粒少量含む
- 2 10YR 3/4 暗褐色シルト



140



141

第40図 R D 03 · 04土坑 · 出土遺物

〈時期〉 出土遺物から奈良時代に属する。

遺物（第40図、写真図版35）

〈土器〉 142は土師器甕形土器の口縁部から体部にかけての破片、外面には明瞭なハケメが見られる。143は土師器坏形土器の口縁部から体部にかけての破片で非ロクロ成形、体部に段を持ち、丸底である。内面ミガキのち黒色処理を施している。144は土師器甕形土器の底部破片で調整は外面ハケメ、内面ヘラナデである。

R D 06 土坑

遺構（第40図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉 7 P 4 s ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形円形を呈する。規模は開口部径163cm×78cm、底部径135cm×52cm、深さは中心部で18cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 不明である。

R D 07 土坑

遺構（第41図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 7 P 1 p ほか。

〈形状と規模〉 平面形は本体が不整形楕円形を呈するが、南西壁から同方向に溝状の掘り込みを持つ。断面形は舟形である。規模は開口部径176cm×128cm、底部径125cm×82cm、深さは中心部で40cmである。溝状の掘り込みは長さ122cm、幅32cm、深さ10cm程度である。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

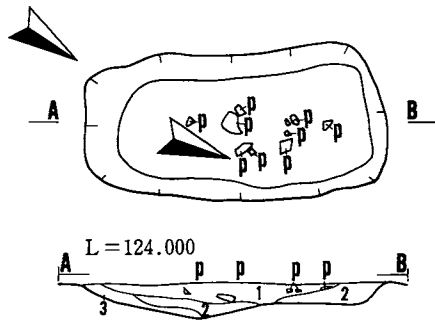
〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。底面には焼土が形成され、炭化物粒がある。

〈遺物の出土〉 底面・埋土から土師器甕形土器が5点出土している。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代である。

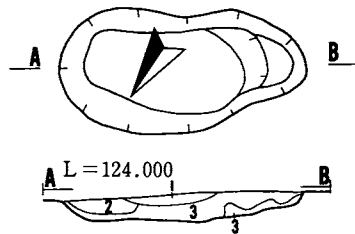
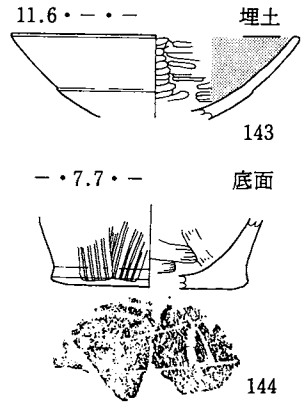
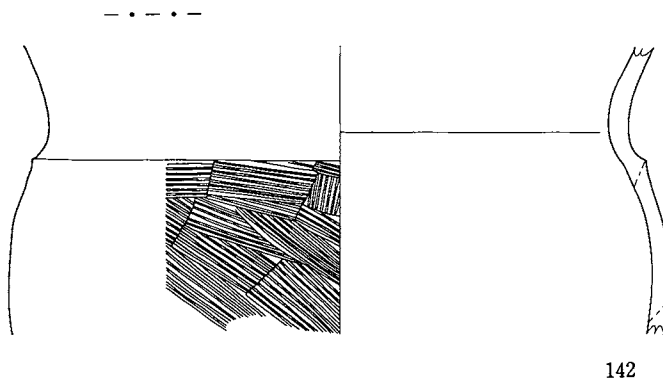
遺物（第41図、写真図版36）

〈土器〉 145～149はいずれもロクロ非使用の土師器甕形土器、145と147は底部破片。146、148、149は口縁部破片である。147は胴部が大きく膨らむ器形と思われる。内外面ともハケメ、底部には木葉痕が見られる。146は口縁部に最大径を持ち、体部上半から次第にすぼむ器形。頸部に段を持ち、外面はケズリ、内面はヘラナデ調整。148は口縁部が頸部段の位置から外傾して外反



R D05土坑 A - B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 炭化物粒・焼土粒を微量含む
- 2 10Y R 2/3 黒褐色シルトと10Y R 4/4 褐色シルトの混合
- 3 10Y R 3/4 暗褐色シルト
- 4 10Y R 4/4 褐色砂質シルト



R D06土坑 A - B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし
- 2 7.5Y R 3/3 暗褐色シルトと10Y R 4/6 褐色砂質シルトの混合
- 3 10Y R 4/6 褐色砂質シルト

第41図 R D05・06土坑・平面・埋土断面・出土遺物

し、最大径が口縁部にある器形。調整は内外面ともヘラナデである。149も最大径が口縁部あるいは体部上半にある器形で、調整は外面ハケメ、内面ヘラナデである。

R D 08 土坑

遺構（第42図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 6 O 17 i ほか。

〈形状と規模〉平面形は不整形を呈する。規模は開口部径163cm×78cm、底部径135cm×52cm、深さは中心部で18cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体でほぼ単層である。人為堆積である。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 09 土坑

遺構（第42図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 6 O 18 i ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形を呈する。規模は開口部径148cm×80cm、底部径134cm×57cm、深さは中心部で27cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 10 土坑

遺構（第42図、写真図版16）

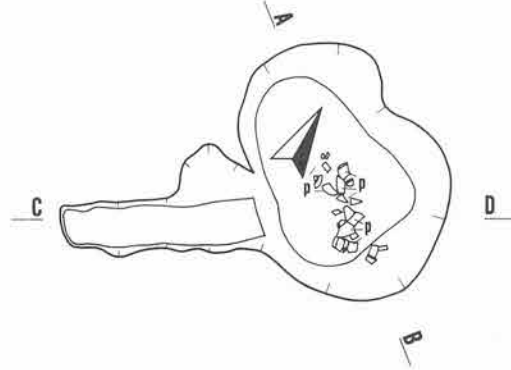
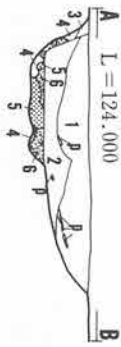
〈位置と残存状況〉 7 P 1 1 ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形を呈する。底面に一段低い方形の掘り込みと柱穴状のピットがある。規模は開口部径127cm×88cm、底部径114cm×58cm、50cm×58cm、深さは中心部で34cmである。壁は南西壁が底面から急角度をもって、それ以外の壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。埋土下位には炭化物層がある。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。



RC07土坑

A-B

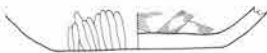
- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 炭化物粒微量含む
- 2 10Y R 2/3 黒褐色シルト10Y R 4/4 褐色シルト微量含む
- 3 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 4 7.5Y R 3/4 暗褐色砂質シルト
- 5 2.5Y R 焼土層
- 6 7.5Y R 2/1 黒色 炭化物層

C-D

- 1 10Y R 3/3 暗褐色シルト10Y R 4/4 褐色砂質シルト微量含む
- 2 10Y R 2/3 黒褐色シルト10Y R 4/6 褐色砂質シルト少量含む
- 3 10Y R 4/6 褐色砂質シルト



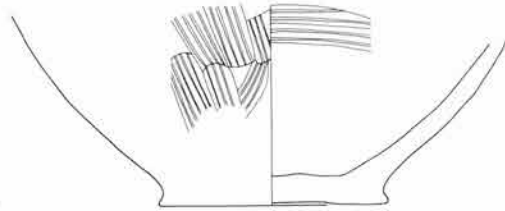
---6.6--- 底面



145

---9.2---

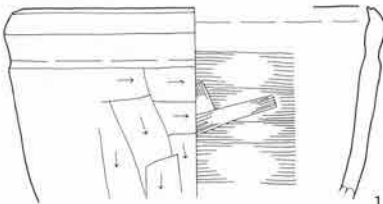
底面



147

14.2---

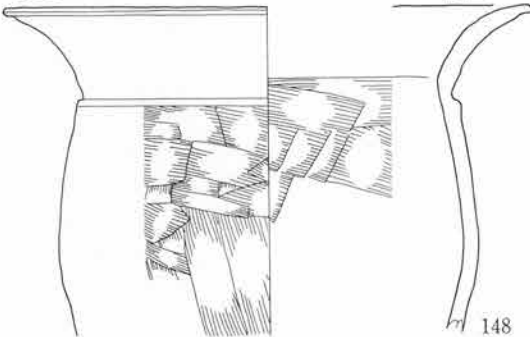
底面



146

21.1---

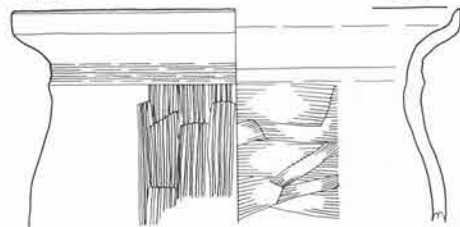
底面



148

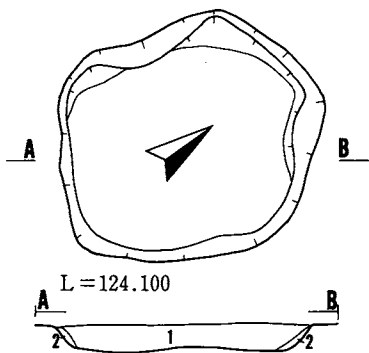
17.9---

底面



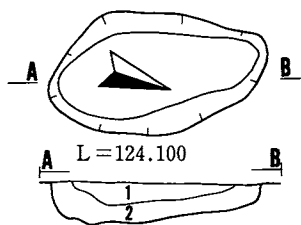
149

第42図 RD07土坑平面・埋土断面・出土遺物



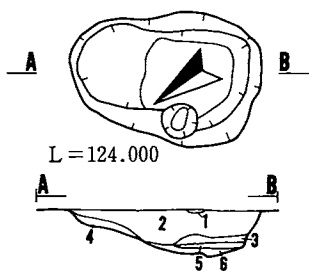
RD09土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト
- 2 7.5YR 3/3 暗褐色シルト



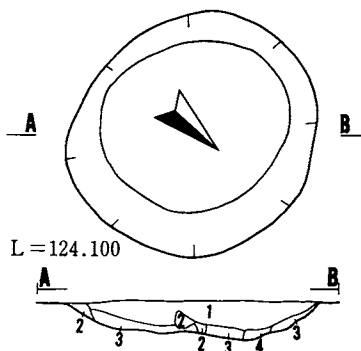
RD08土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 炭化物含む
- 2 10YR 4/6 褐色砂質シルト



RD10土坑 A-B

- 1 10YR 3/3 暗褐色シルトと
7.5YR 2/2 黒褐色シルトの混合
- 2 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 炭化物微量含む
- 3 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 炭化物粒少量含む
- 4 10YR 3/4 暗褐色シルト しまりあり
- 5 7.5YR 2/1 黒色 炭化物層
- 6 10YR 3/4 暗褐色シルト しまりなし



RD11号土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/1 黒色シルト
- 2 10YR 2/1 黒色シルト 根による攪乱
- 3 10YR 3/3 暗褐色シルト
- 4 10YR 3/2 黒褐色シルト 小礫を多く含む

第43図 RD08・09・10・11土坑・平面・埋土断面

R D 11 土坑

遺構（第42図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 6 w ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径162cm×155cm、底部径110cm×116cm、深さは中心部で26cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は著しい凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 12 土坑

遺構（第43図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 7 u ほか。

〈形状と規模〉 平面形は隅丸方形を呈する。規模は開口部径315cm×215cm、底部径302cm×198cm、深さは中心部で18cmである。遺構の東壁から北壁の北西壁に沿って周溝状の掘り込みが見られる。総延長は434cmで、深さは約6cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は礫層であり、これに起因する凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器の細片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

R D 13 土坑

遺構（第43図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 s ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整方形を呈する。規模は開口部径76cm×95cm、底部径53cm×72cm、深さは中心部で14cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 14 土坑

遺構（第43図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 6 t。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ円形である。規模は開口部径68cm×60cm、底部径38cm×37cm、深さは中心部で22cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 15 土坑

遺構（第43図、写真図版18）

〈位置と残存状況〉 6 N 6 t ほか。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ円形である。規模は開口部径61cm×54cm、底部径33cm×25cm、深さは中心部で22cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 16 土坑

遺構（第43図、写真図版18）

〈位置と残存状況〉 6 N 6 s ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形円形を呈する。規模は開口部径66cm×62cm、底部径42cm×49cm、深さは中心部で32cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 17 土坑

遺構（第43図、写真図版18）

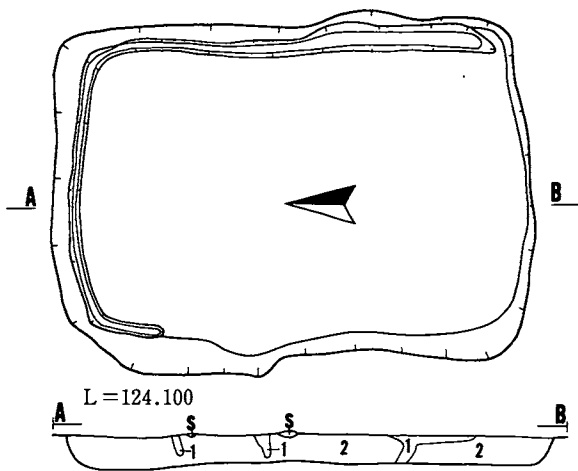
〈位置と残存状況〉 6 N 6 s ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形円形を呈する。規模は開口部径66cm×62cm、底部径42cm×49cm、深さは中心部で16cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

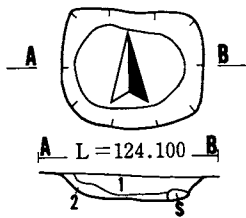
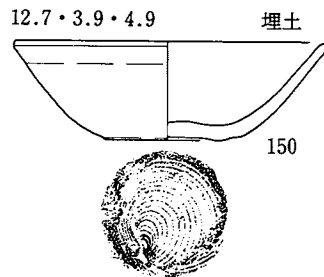
〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。



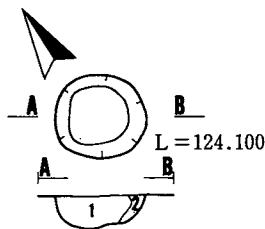
RD12
RD12土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい 根による攪乱層
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性やや強い 炭化物・小礫を含む



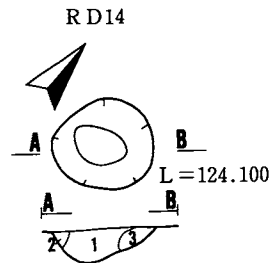
RD13土坑 A-B

- 1 10YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性つよい



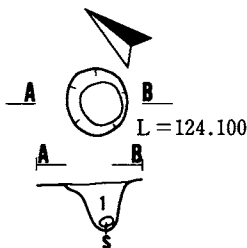
RD14土坑 A-A

- 1 7.5YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい
- 2 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性よわい



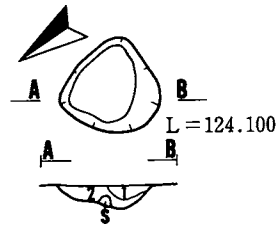
RD15土坑 A-B

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 2 10YR 2/3 黒褐色シルト 暗褐色土微量混じる
- 3 10YR 3/2 黒褐色シルト



RD16土坑 A-B

- 1 7.5YR 1.7/1 黒色シルト 粘性つよい



RD17土坑 A-B

- 1 10YR 2/1 黒色シルト
- 2 10YR 2/3 黒褐色シルト

第44図 RD12・13・14・15・16・17土坑

R D 18 土坑

遺構（第44図、写真図版18）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 v ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形円形を呈する。規模は開口部径60cm×67cm、底部径45cm×52cm、深さは中心部で43cmである。壁は緩やかに外傾してのち直立する。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 19 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉 6 N 8 u ほか。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ楕円形である。規模は開口部径95cm×74cm、底部径88cm×68cm、深さは中心部で7cmである。壁はほとんど失われている。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒色土の単層である。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 20 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉 6 N 8 t ほか。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ楕円形を呈する。規模は開口部径110cm×80cm、底部径96cm×63cm、深さは中心部で20cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器の細片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

R D 21 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉 6 N 8 s ほか。

〈形状と規模〉 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径149cm×86cm、底部径138cm×72cm、深さは中心部で27cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器の細片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

R D 22 土坑

遺構 (第44図、写真図版19)

〈位置と残存状況〉 6 N 6 u。

〈形状と規模〉 平面形は不整形円形を呈する。規模は開口部径40cm×38cm、底部径28cm×29cm、深さは中心部で27cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器の細片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

R D 23 土坑

遺構 (第44図、写真図版19)

〈位置と残存状況〉 6 N 8 u。

〈形状と規模〉 平面形は不整形方形を呈する。規模は開口部径36cm×38cm、底部径34cm×28cm、深さは中心部で21cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 24 土坑

遺構 (第45図、写真図版20)

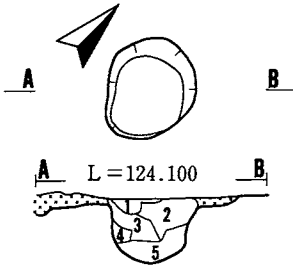
〈位置と残存状況〉 6 N10 r ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形楕円形を呈する。規模は開口部径198cm×108cm、底部径168cm×95cm、深さは中心部で17cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

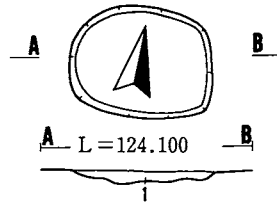
〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。



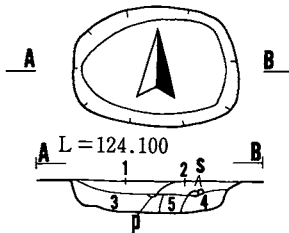
RD18土坑 A-B

- 1 7.5 2/1 黒色シルト
- 2 10YR 2/3 黒褐色シルト
- 3 10YR 2/2 黒褐色シルト 褐色土少量含む
- 4 10YR 2/2 黒褐色シルト 礫を多量に含む
- 5 10YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい 礫を多量に含む



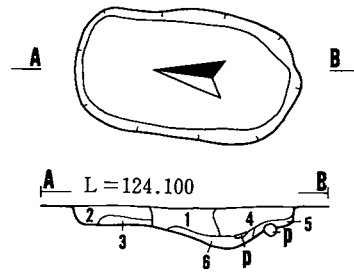
RD19土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい 炭化物微量混じる



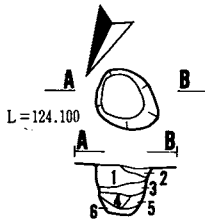
RD20土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい 炭化物微量混じる
- 2 10YR 2/1 黒色シルト
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト 炭化物微量混じる
- 4 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 5 10YR 3/4 暗褐色シルト 礫を多量に含む



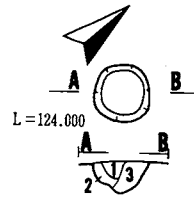
RD21土坑 A-B

- 1 10YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい
- 2 7.5YR 2/2 黒色シルト 粘性つよい
- 3 10YR 4/6 褐色シルト
- 4 10YR 2/2 黒褐色シルト 暗褐色土をブロック状に含む
- 5 10YR 3/4 暗褐色シルト
- 6 10YR 3/2 黒褐色シルト



RD22土坑 A-B

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 2 10YR 2/1 黒色シルト
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト
- 4 10YR 3/2 黒褐色シルト
- 5 10YR 3/2 黒褐色シルト 小礫を含む
- 6 10YR 4/6 褐色砂質シルト 小礫を多数含む



RD23土坑 A-B

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 2 10YR 3/3 暗褐色シルト
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト

第45図 RD18・19・20・21・22・23土坑・平面・埋土断面

R D 25 土坑

遺構（第45図、写真図版20）

〈位置と残存状況〉 6 N 10 r ほか。

〈形状と規模〉 平面形は西半はほぼ円形であるが東半が張り出す不整形である。規模は開口部径164cm×86cm、底部径85cm×80cm、深さは中心部で27cmである。壁はほぼ緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 26 土坑

遺構（第45図、写真図版20）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 q ほか。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ正方形である。規模は開口部径271cm×264cm、底部径252cm×246cm、深さは中心部で32cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がった後、直立する。底面は礫層であり、これに起因する凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で9層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 27 土坑

遺構（第45図、写真図版21）

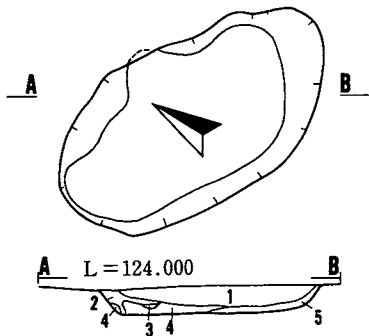
〈位置と残存状況〉 7 Q 12 e ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形を呈する。規模は開口部径107cm×95cm、底部径84cm×72cm、深さは中心部24cmである。壁は底面からやや外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。

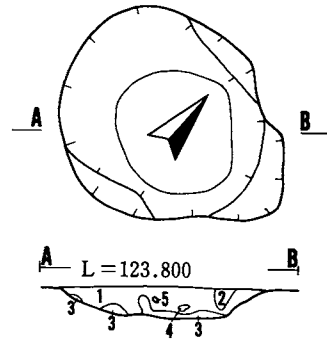
〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。



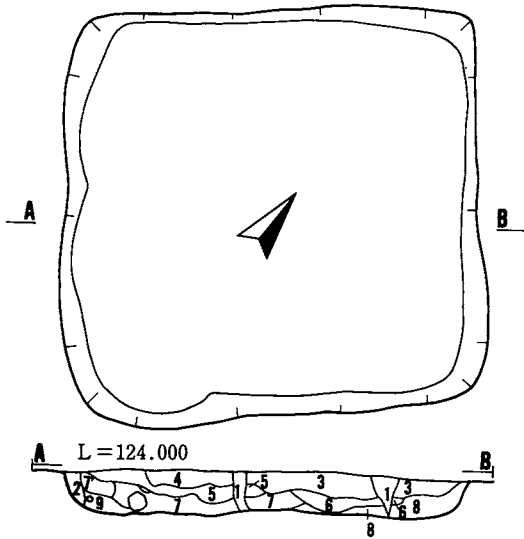
RD24土坑 A-B

- 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト 炭化物少量含む
- 2 10Y R 3/3 暗褐色シルト 黄褐色土ブロック状に含む
- 3 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト しまりよわい
- 4 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト しまりよわい
- 5 10Y R 3/4 暗褐色シルト 黄褐色土ブロック状に含む



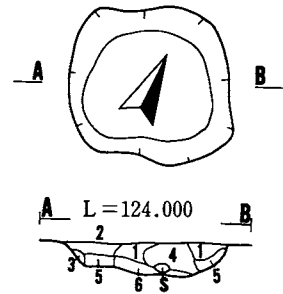
RD25土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 2 10Y R 3/4 黒褐色シルト 小礫よくむ
- 3 10Y R 3/2 黒褐色シルト 黄褐色土ブロック状に含む
- 4 10Y R 3/4 暗褐色シルト



RD26土坑 A-B

- 1 10Y R 2/1 黒色シルト
- 2 10Y R 2/3 黒褐色シルト 礫を多く含む
- 3 10Y R 2/2 黒褐色シルト 小礫・炭化物・灰白色火山灰を含む
- 4 10Y R 3/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰を含み、3層よりも多くの礫を含む
- 5 10Y R 3/1 黒褐色シルト 灰白色火山灰を微量含む
- 6 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト 灰白色火山灰を微量含む
- 7 7.5Y R 2/1 黒色シルト 灰白色火山灰を微量含む
- 8 7.5Y R 2/3 極暗褐色シルト 小礫を含む
- 9 10Y R 2/2 黒褐色シルト 礫を多量含む



RD27土坑 A-B

- 1 10Y R 1.7/1 黒色シルト
- 2 10Y R 2/1 黒色シルト
- 3 10Y R 3/2 黒褐色シルト 根による攪乱
- 4 10Y R 2/3 黒褐色シルト 小礫を含む
- 5 10Y R 3/3 暗褐色シルト
- 6 7.5Y R 3/2 黒褐色シルト 礫を多量を含む

第46図 R D 24・25・26・27土坑・平面・埋土断面

R D 28 土坑

遺構（第46図、写真図版21）

〈位置と残存状況〉 6 N 11 s ほか。R D 29号土坑と重複し、これよりも古い。

〈形状と規模〉平面形は不整楕円形を呈する。規模は開口部径172cm×126cm、底部径114cm×76cm、深さは中心部で28cmである。北壁と南壁が失われているが、残存する東壁と西壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で11層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 29 土坑

遺構（第46図、写真図版21）

〈位置と残存状況〉 6 N 11 s ほか。R D 28号土坑と重複し、これよりも新しい。

〈形状と規模〉平面形は隅丸方形を呈する。規模は開口部径126cm×108cm、底部径92cm×82cm、深さは中心部で28cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 30 土坑

遺構（第46図、写真図版21）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 s ほか。

〈形状と規模〉平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径62cm×63cm、底部径42cm×47cm、深さは中心部で38cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

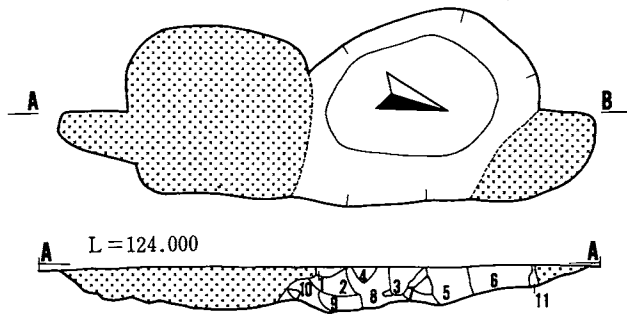
〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 31 土坑

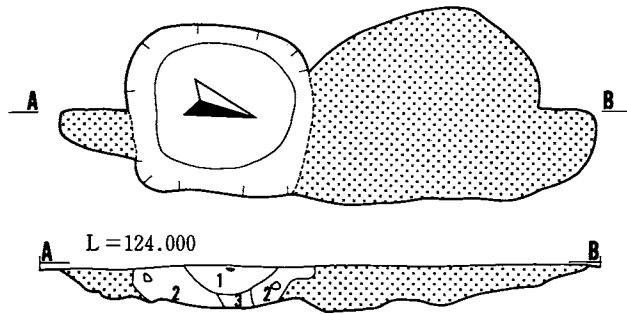
遺構（第47図、写真図版22）

〈位置と残存状況〉 7 P 9 q ほか。



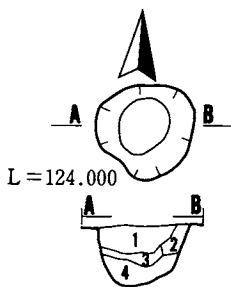
RD28土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 耕作による攪乱
- 2 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性ややつよい
- 3 10YR 3/1 黒褐色シルト
- 4 10YR 3/4 暗褐色シルト 炭化物含む
- 5 10YR 2/3 黒褐色シルト 褐色土霜降り状に入る
- 6 10YR 3/4 暗褐色シルト 小礫混じる
- 7 10YR 2/2 黒褐色シルト 褐色土ブロック状に混じる
- 8 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 小礫多量に混じる
- 9 10YR 2/3 黒褐色シルト
- 10 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト 炭化物含む・小礫混じる。
- 11 10YR 3/3 暗褐色シルト



RD29土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/3 極暗褐色シルト 炭化物少量含む 小礫あり
- 2 10YR 3/3 極暗褐色シルト 小礫含む
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト



RD30土坑 A-B

- 1 10YR 2/1 黒色シルト
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト
- 4 10YR 3/4 暗褐色シルト

第47図 RD28・29・30土坑・平面・埋土断面

〈形状と規模〉 平面形は不整長方形を呈する。規模は開口部径183cm×104cm、底部径172cm×89cm、深さは中心部で16cm、深さは中心部で16cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がったのち直立する。底面はほぼ平坦で、南西半に焼土が形成されている。

〈埋土〉 黒褐色土主体で7層に細分される。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 32 土坑

遺構（第47図、写真図版22）

〈位置と残存状況〉 7 Q 13 y ほか。R A 02 竪穴住居跡に隣接する。

〈形状と規模〉 平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径63cm×52cm、底部径45cm×38cm、深さは中心部で38cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 33 土坑

遺構（第47図、写真図版22）

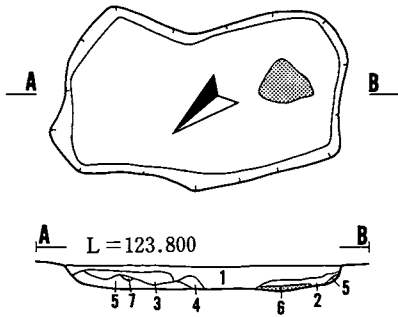
〈位置と残存状況〉 7 P 1 m ほか。R G 12 溝跡と重複し、これより新しい。

〈形状と規模〉 平面形は不整方形を呈する。規模は開口部径127cm×94cm、底部径78cm×43cm、深さは中心部で36cmである。壁は底面からほぼ直立して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

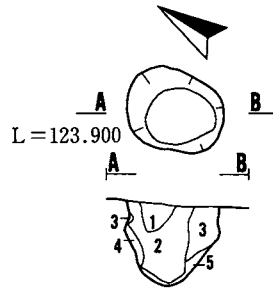
〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。



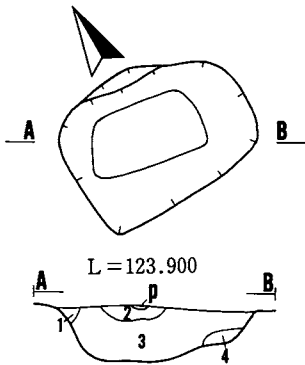
RD31土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト
- 2 7.5YR 2/1 黒色シルト
- 3 7.5YR 3/3 暗褐色シルト
- 4 7.5YR 3/3 暗褐色シルト 炭化物含む
- 5 10YR 5/6 黄褐色砂質シルト
- 6 5YR 3/4 暗赤褐色壤土
- 7 10YR 3/4 暗褐色砂質シルト



RD32土坑 A-B

- 1 10YR 2/1 黒色シルト 粘性つよい
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性ややつよい
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト
- 4 10YR 4/4 褐色砂質シルト 黒褐色土少量混じる
- 5 10YR 4/6 褐色砂質シルト



RD33土坑 A-B

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 耕作による攪乱
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト 褐色土を少量含む
- 4 10YR 2/3 黒褐色シルト

第48図 RD31・32・33土坑・平面・埋土断面

5. 溝 跡

R G 01 溝跡

遺構（第48図、写真図版23）

〈位置と規模〉 6 O 25 y ~ 7 O 3 w ほか。北東-南西方向に延びる。北東端は調査範囲外に続く。全長約 8 m、幅 50 cm 前後、深さ 4 cm 前後である。掘り込み面は II c 層下面である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で 2 層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 02 溝跡

遺構（第48図、写真図版23）

〈位置と規模〉 7 O 6 x ~ 7 O 8 v ほか。北東-南西方向に延びるが、北東端は調査範囲外に続く。全長 7.5 m、幅 50 cm 前後、深さ 3 cm 前後である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で 2 層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 03 溝跡

遺構（第48図、写真図版23）

〈位置と規模〉 6 P 21 j ~ 6 P 23 n ほか。南西方向に膨らみながら北西-南東方向に延びるが北西端と南東端はともに調査区外に続く。全長約 12 m、幅 50 cm 前後、深さ 3 cm 前後である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で 3 層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

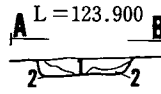
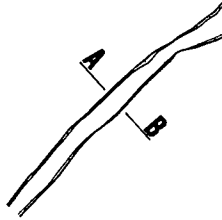
〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 04 溝跡

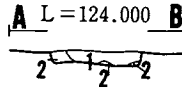
遺構（第49図、写真図版23）

〈位置と規模〉 6 N 23 j ~ 7 N 15 v ほか。北西-南東方向に延びるが、北東端は調査区外に続く。全長 47 m、幅 180 ~ 120 cm 前後、深さ 28 ~ 14 cm 程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

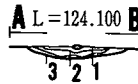
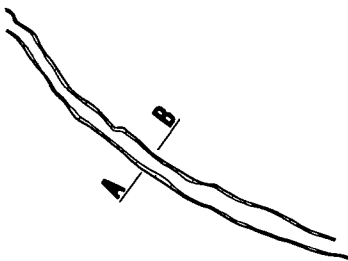
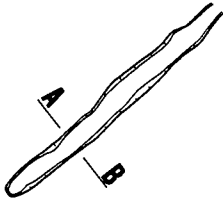
〈埋土〉 黒褐色土主体のほぼ単層であるが、部分的に崩落の土を含む。



RG01溝跡 A-B
 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
 2 10Y R 4/4 褐色砂質シルト

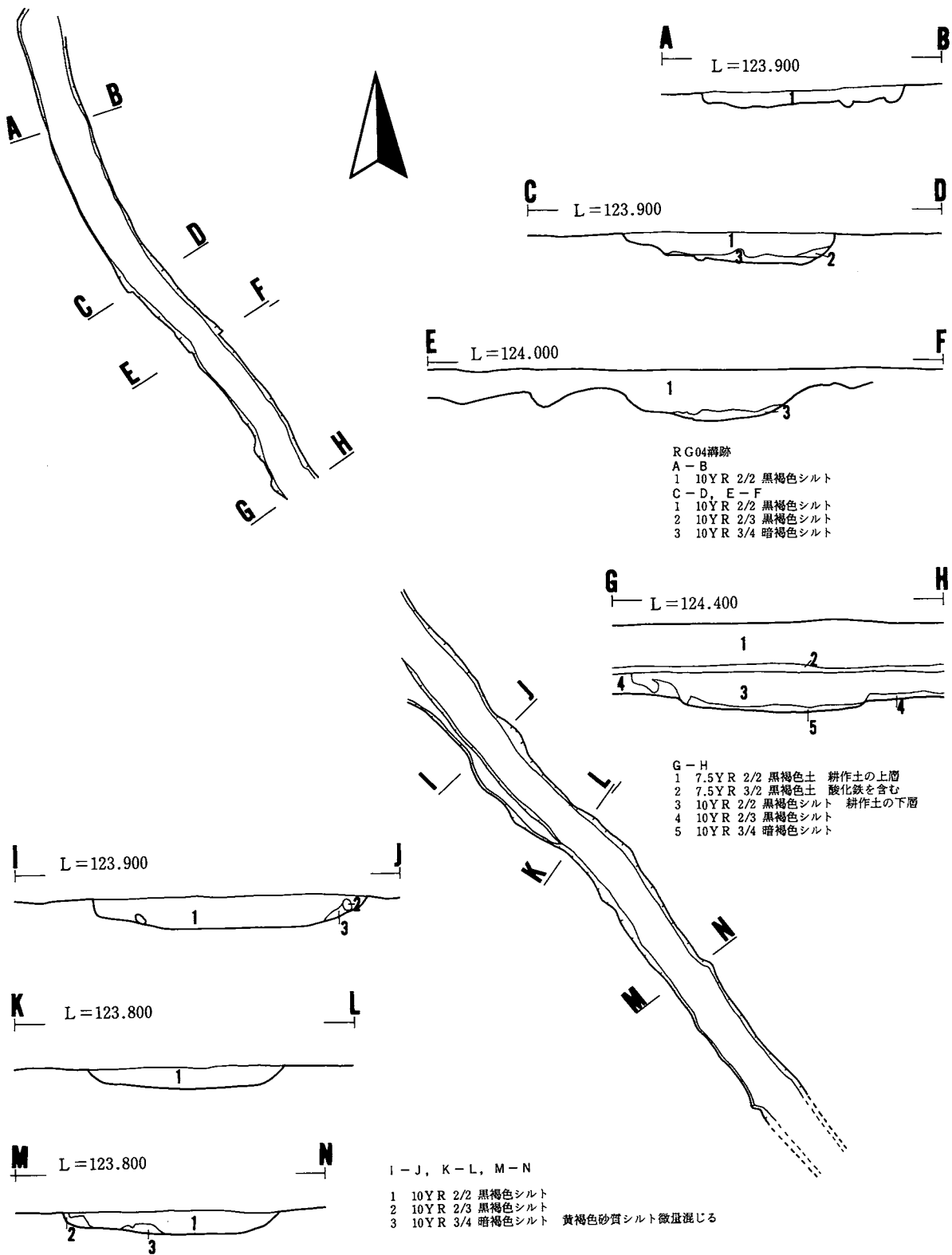


RG02溝跡 A-B
 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
 2 10Y R 4/4 褐色砂質シルト



RG03溝跡 A-B
 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
 2 10Y R 2/3 黒褐色シルトと10Y R 4/4 褐色砂質シルトの混合
 3 10Y R 4/4 褐色砂質シルト

第49図 R G 01・02・03溝跡平面・埋土断面



第50図 R G 04溝跡平面・埋土断面

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 05 溝跡

遺構（第50図、写真図版24）

〈位置と規模〉 6 O14 t～7 O10 b ほか。R G06溝跡と並行して北東－南西方向に延びるが北東端は調査区外へ続く。全長約45m、幅100cm～60cm、深さ20cm～4 cm程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土上位から土師器鉢形土器が出土している。

〈時期〉 埋土から土師器鉢形土器が出土しているが流れ込みの可能性が高く、不明である。

遺物（第53図、写真図版36）

151は土師器鉢形土器の口縁部から体部上半にかけての破片である。ロクロ未使用成形で内面はミガキ後黒色処理を施している。外面にもわずかにミガキがみられる。

R G 06 溝跡

遺構（第50図、写真図版24）

〈位置と規模〉 6 O15 u～6 O22 r ほか。R G05溝跡と並行して北東－南西方向に延びるが北東端は調査区外へ続く。全長約22m、幅100cm前後、深さ20cm程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 07 溝跡

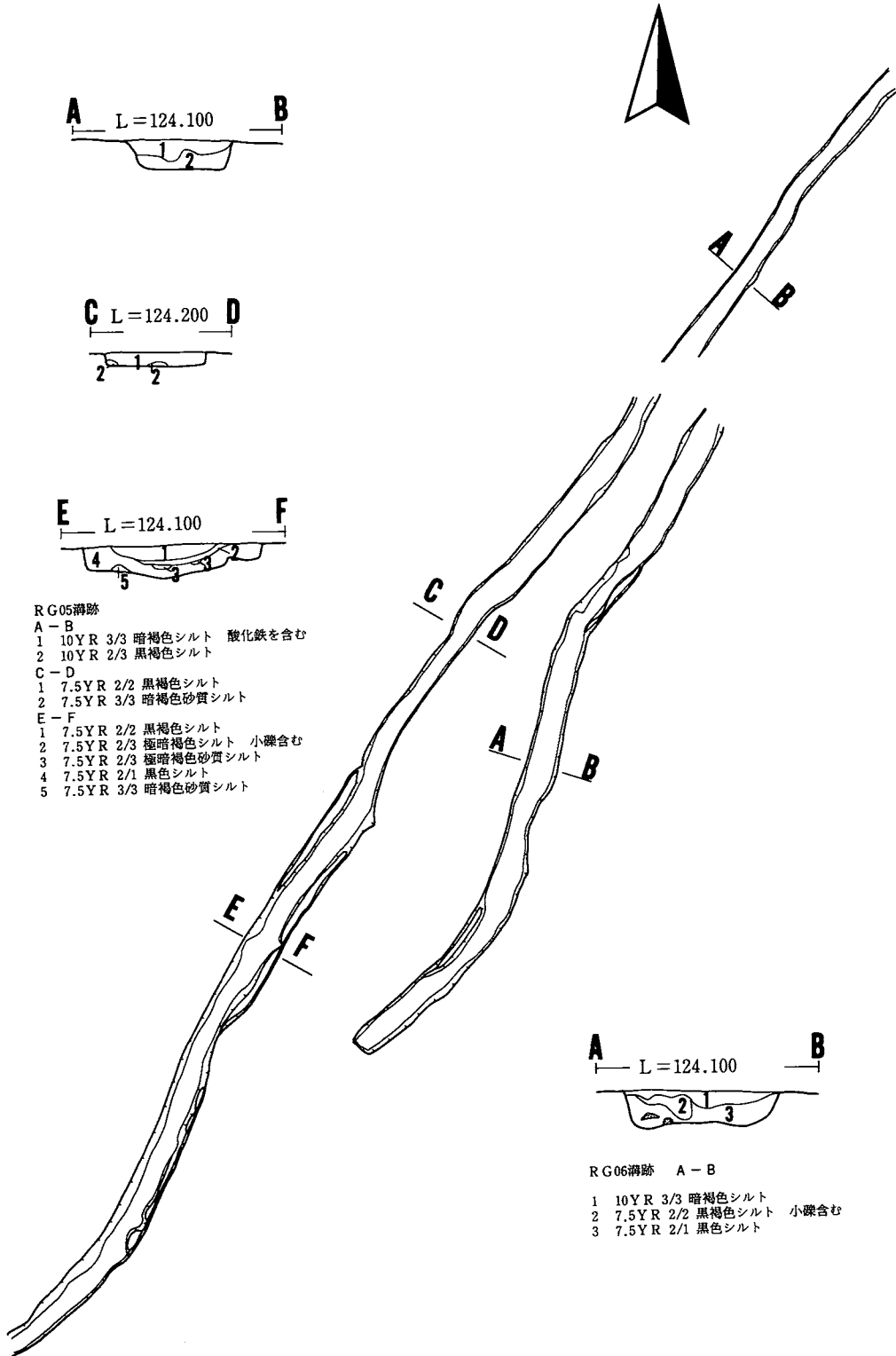
遺構（第51図、写真図版24、25）

〈位置と残存状況〉 6 N14 t～6 N13 y。R G08溝跡の南にあり、R G08溝跡、R G09溝跡とほぼ並行して北東－南西方向に延びるが、北東端は調査区外に続く。南西方向は消滅する。全長約13m、幅50cm前後、深さ4 cm程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉 検出面・埋土から土師器の破片が多数出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。



第51図 R G 05・06溝跡平面・埋土断面

R G 08 溝跡

遺構 (第51図、写真図版24、25)

〈位置と規模〉 6 N15 p～6 N12 y ほか。R G07溝跡の北、R G09溝跡の南にあり、R G07溝跡、R G09溝跡とほぼ並行して北東－南西方向に延びるが、北東端と南西端はともに調査区外に続く。全長約20m、幅50cm前後、深さ7 cm程度である。III層を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉 検出面、埋土から土師器が多数出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代である。

遺物 (第53図、写真図版36)

152、153、155～160は底面から出土した土師器坏形土器である。すべてロクロ使用成形である。152、156は内面ミガキ後黒色処理を施している。155は内外面とも丁寧なミガキ後黒色処理を施しており、底面は手持ちヘラケズリで再調整している。154は高台坏形土器であるが、高台部は剝離している。161は小型の片口形土器であるが、底部は失われている。内外面にナデ痕がみられる。

R G 09 溝跡

遺構 (第51図、写真図版25、26)

〈位置と規模〉 6 N13 p～6 N11 y ほか、R G08溝跡の北にあり、R G07溝跡、R G08溝跡とほぼ並行して北東－南西方向に延びるが、6 N13 r～6 N12 t までの約5 mほどは失われており、北東端と南西端はともに調査区外に続く。北東は約12m、南東は約4 m、幅50cm前後、深さ6 cm程度である。III層を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体でほぼ単層である。

〈遺物の出土〉 検出面、埋土から土師器が多数出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

遺物 (第38図、写真図版37)

162～167は土師器甕形土器である。いずれもロクロ未使用成形で、体部内外面には明瞭なハケメがみられる。162、163、165、167は口縁部から体部上半にかけての破片で、167は口縁端を欠く。いずれも最大形を口縁端に持つ長胴甕で、口縁部が外湾気味に外反する。163、165、167は頸部に軽い段を持つ。162、165は底部破片で底面には木葉痕がみられる。

R G 10 溝跡

遺構 (第51図、写真図版25、26)

〈位置と規模〉 6 N11 v～6 N10 y ほか。R G 09溝跡の北にあり、北側に頂部をもつ「く」字形を呈する。長さ8m、幅は最大で60cm、深さ14cm程度である。III層を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 検出面・埋土から土師器の破片が多数出土している。

〈時期〉 出土遺物、検出状況、埋土などから平安時代に属する。

R G 11 溝跡

遺構 (第52図、写真図版26)

〈位置と規模〉 8 Q 5 p～8 Q 4 w ほか、東西方向に伸びるが、東端と西端は調査区外に続く。全長約12.5m、幅130cm前後、深さ35cm程度である。II c層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 12 溝跡

遺構 (第52図、写真図版26)

〈位置と規模〉 6 P23 l～7 P 6 m ほか。R A 04竪穴住居跡、R D 32土坑と重複し、これよりも古い。ほぼ南北方向に伸びるが、北端と南端は調査範囲外に続く。全長約20m、幅340～150cm前後、深さ20cm程度である。III層下面を掘り込んでいる。

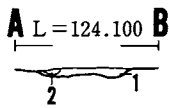
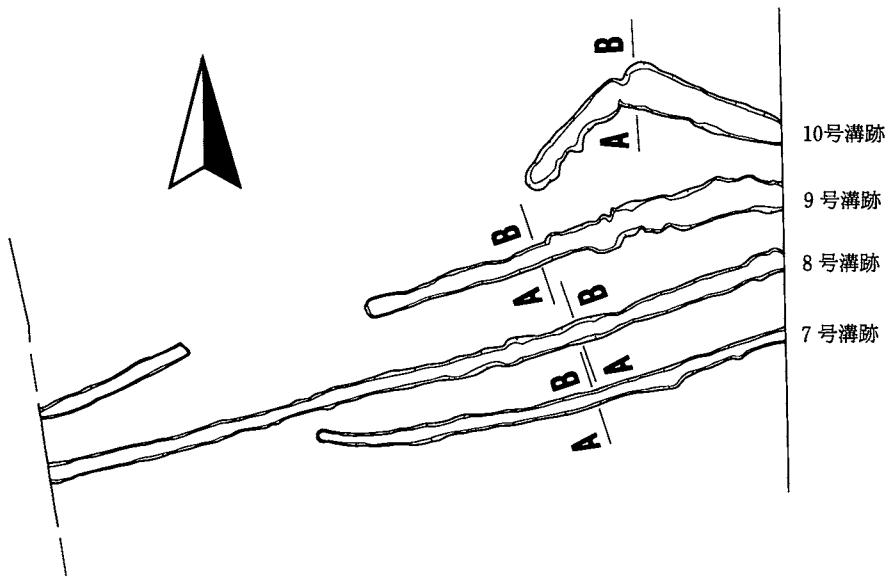
〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器甕形土器の底部破片1点が出土している。

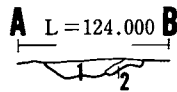
〈時期〉 出土遺物、R A 04竪穴住居跡の重複関係から奈良時代以前である。

遺物 (第38図、写真図版37)

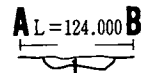
168は土師器甕形土器の底部破片である。外面にハケメ、底面には木葉痕がみられる。



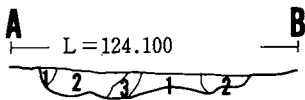
RG07溝跡 A-B
 1 10YR 2/1 黒色シルト
 2 10YR 2/3 黒褐色シルト



RG08溝跡 A-B
 1 10YR 2/1 黒色シルト
 2 10YR 2/3 黒褐色シルト

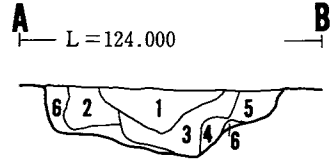
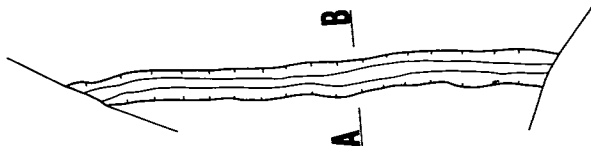


RG09溝跡 A-B
 1 10YR 2/1 黒色シルト



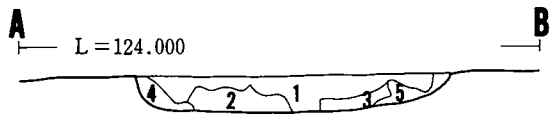
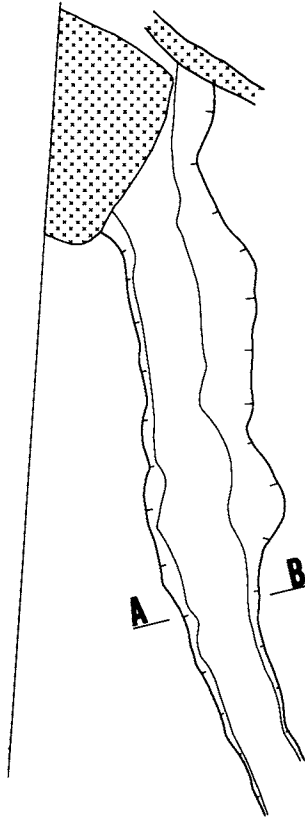
RG10溝跡 A-B
 1 10YR 2/2 黒褐色シルト
 2 10YR 2/1 黒色シルト
 3 10YR 3/4 暗褐色シルト

第52図 R G 07・08・09・10溝跡平面・埋土断面



RG11溝跡

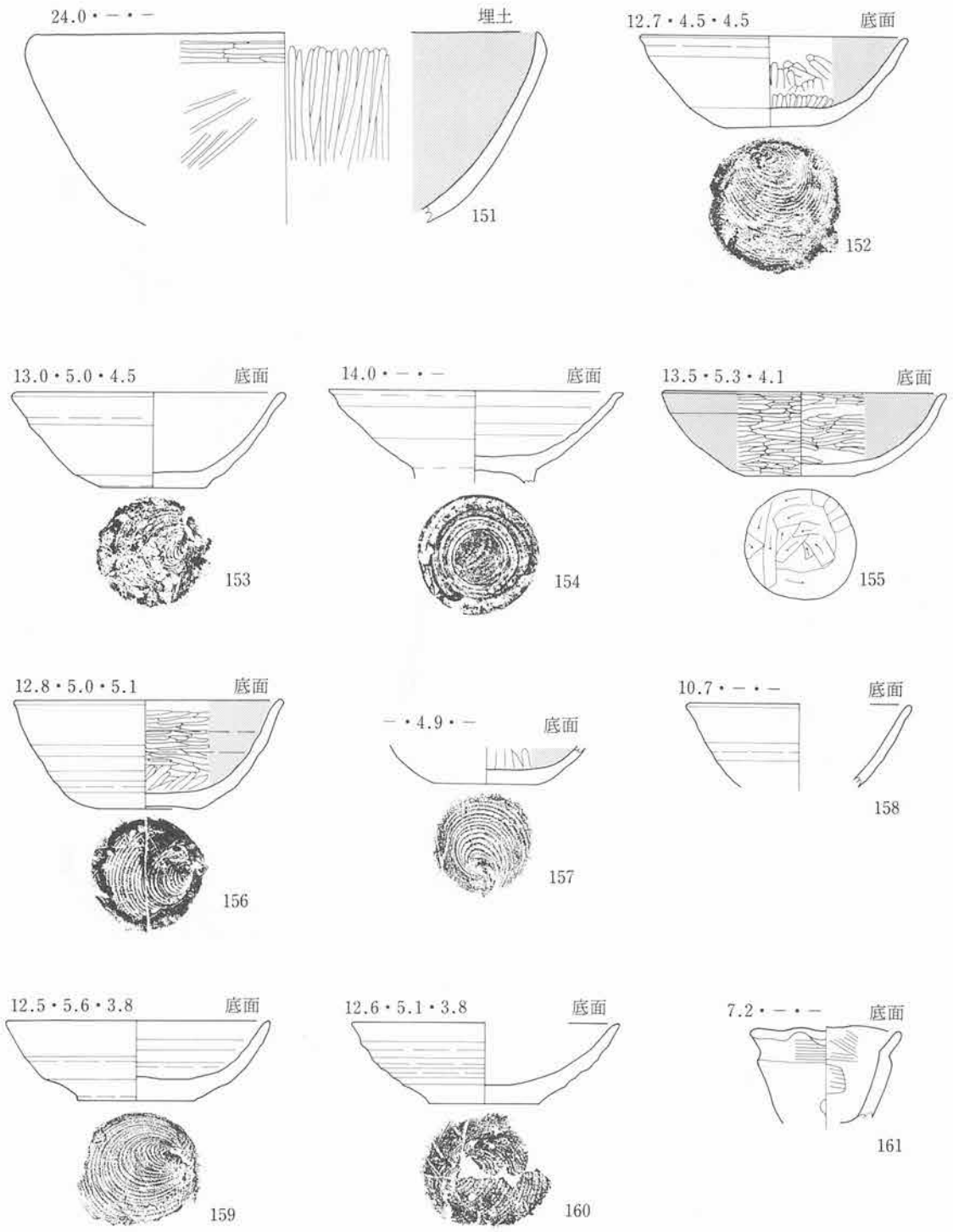
- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 小礫を含む
- 2 7.5Y R 2/3 極暗褐色シルト
- 3 10Y R 2/3 黒褐色シルト 炭化物を微量含む
- 4 10Y R 3/3 暗褐色シルト
- 5 10Y R 3/4 暗褐色シルト
- 6 10Y R 4/4 褐色砂質シルト



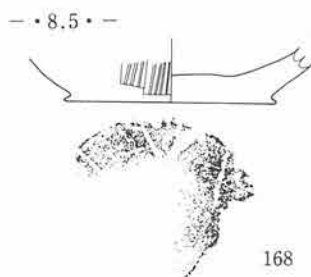
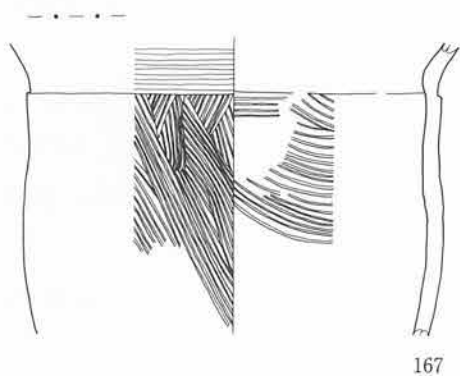
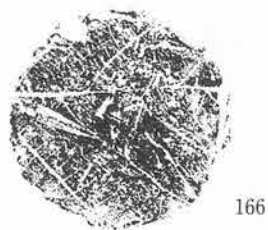
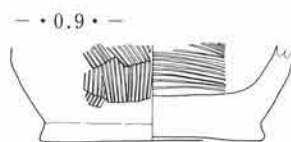
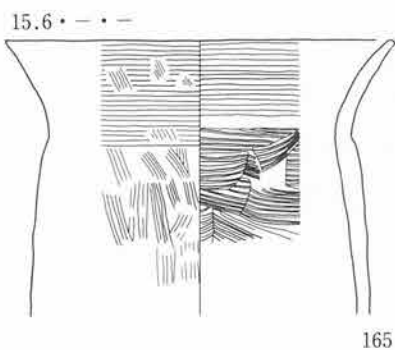
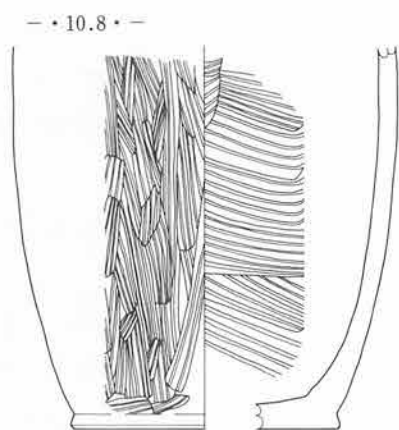
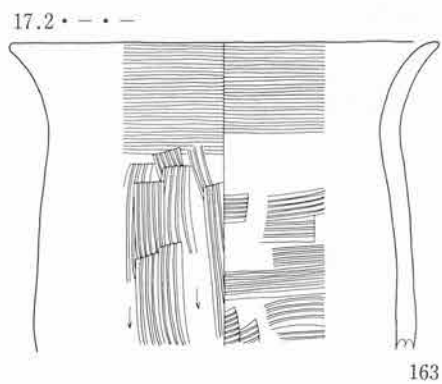
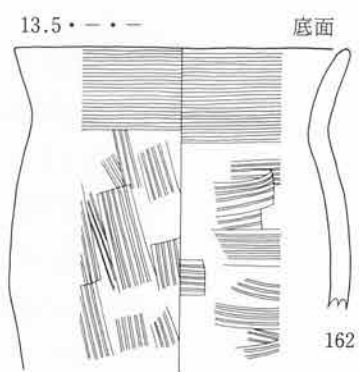
RG12溝跡

- 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
- 2 10Y R 2/3 極暗褐色シルト
- 3 10Y R 2/3 極暗褐色シルト 炭化物を微量含む
- 4 10Y R 4/4 褐色砂質シルト
- 5 10Y R 4/4 褐色砂質シルト 炭化物を微量含む

第53図 R G II・12溝跡平面・埋土断面



第54図 R G 05 · 08溝跡 · 出土遺物



第55図 R G 09 · 12溝跡 · 出土遺物

6. 遺構外の出土遺物

奈良時代の土師器・土製品、平安時代の土師器・須恵器・土製品・江戸時代の寛永通寶・瓦などが出土している。遺物の出土した地点は地域的に限られており、グリッド的には遺構の集中する6 N区、7 P区、7 Q区からの出土が多い。6 O区からの遺構の検出は溝跡のみであるが、遺物の出土があり、当該の時期の遺構があったが後世の耕作などによる削平によって失われた可能性が大きい。また、層位的にはI c層からの出土が多い。以下、器種ごとに記述する。169～189、182～184は6 Nから出土した土師器坏形土器である。170、171、173は内面ミガキ後黒色処理を施している。182は内外面ともミガキ後黒色処理を施している。その他は無調整であるが、180は底部がやや高台状を呈している。181は土師器甕形土器の底部破片である。184は土師器坏形土器の体部破片であるが表面に線刻（「夙」か？）がみられる。

184～188は6 O区のほぼ同地点からの出土である。184～187は土師器坏形土器。いずれもロクロ未使用成形で体部下半に段をもち、丸底である。184、185は内面ミガキ後黒色処理、187は内外面ともミガキ後黒色処理を施している。188は土師器甕形土器、底部には木葉痕がみられる。RG06溝跡出土の151もこれらと共伴するものである可能性が高い。

189、190、196は7 P区から出土した土師器坏形土器。いずれもロクロ成形、切り離しは回転糸切り、189は内面ミガキ後黒色処理、190、196は無調整である。

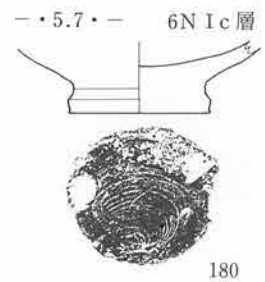
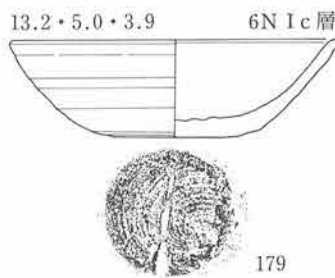
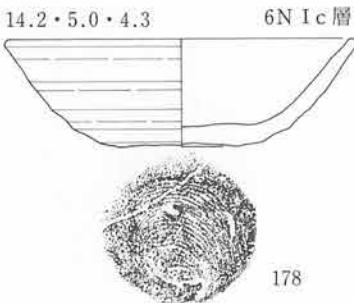
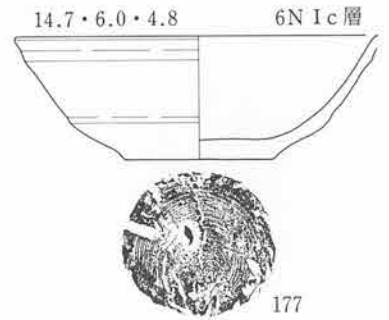
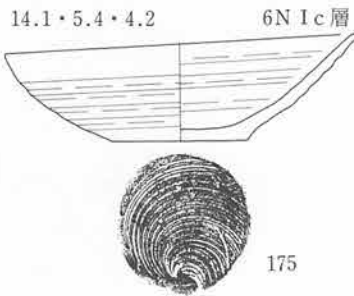
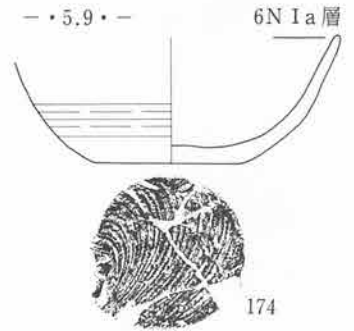
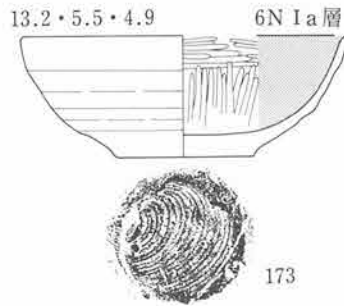
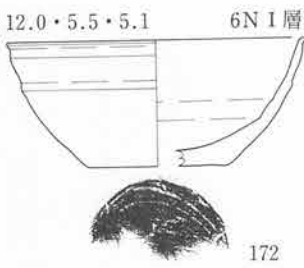
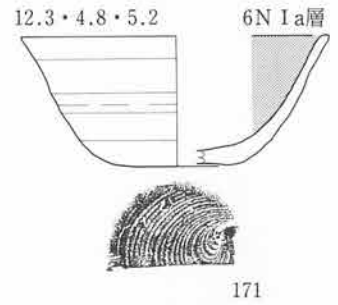
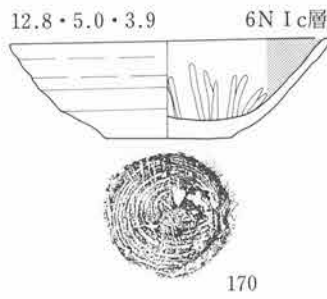
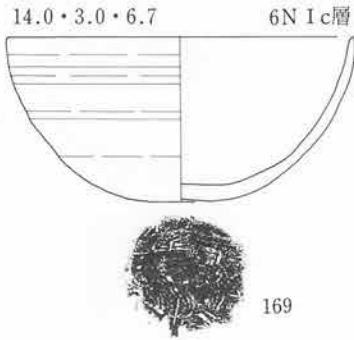
193～195も7 P区から出土している。193、194は体部破片で全体の器形は不明であるが、土師器坏形土器あるいは土師器高台付坏形土器の体部破片であると推定される。内外面ともミガキ後黒色処理を施しており、表面に線刻を伴う。195は土師器高台付坏形土器で、ロクロ成形、内外面ともミガキ後黒色処理を施している。

191、192、196は8 Q区から出土した土師器坏形土器。いずれもロクロ成形、切り離しは回転糸切りである。

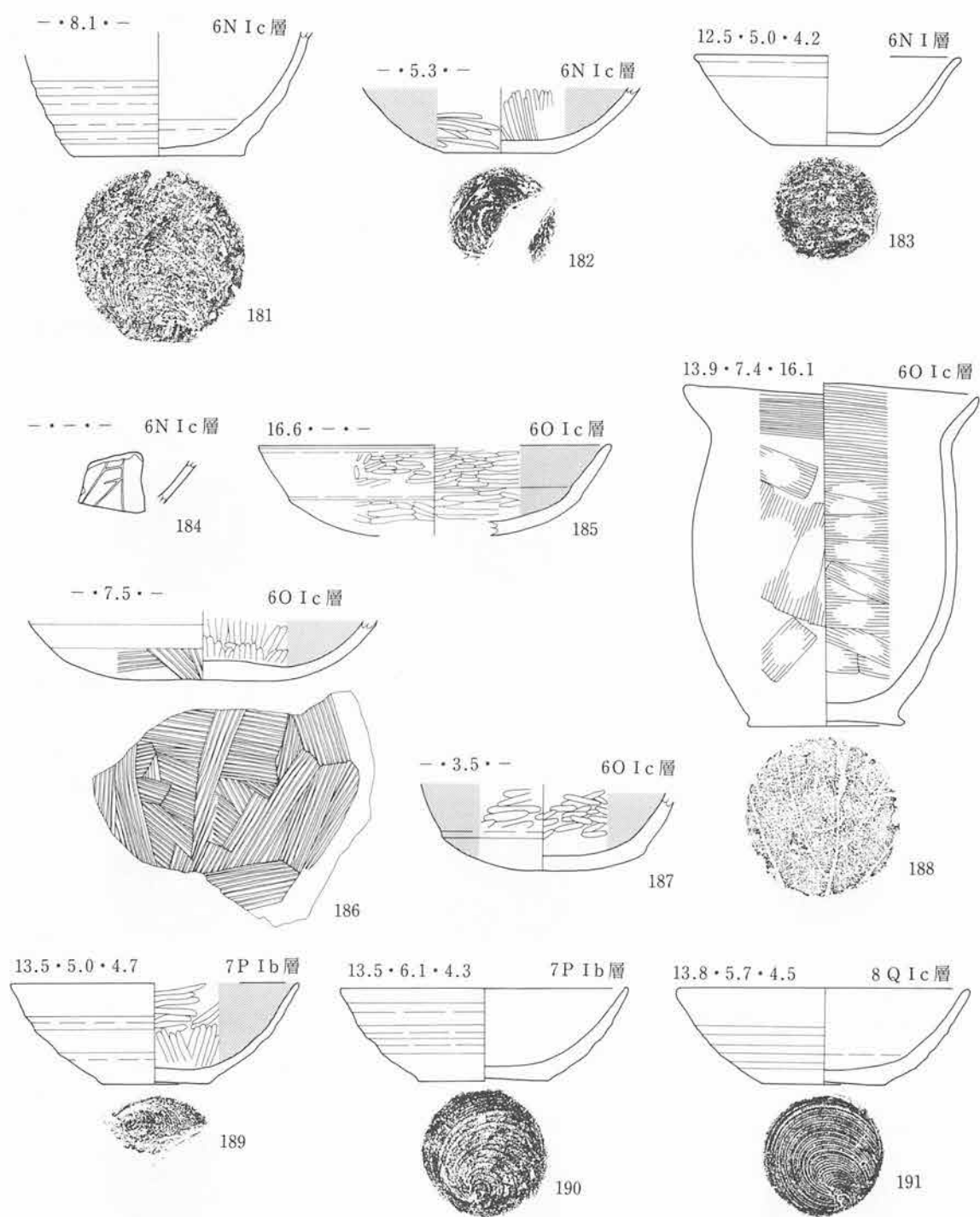
197、198は7 P区出土の土師器甕形土器。197は口縁部破片、198は底部破片で、198は底部にもハケメがみられる。

199～206は須恵器甕形土器。199～202は口縁部破片、203～205は底部破片、206は体部破片である。須恵器の破片は7 P、7 Q、8 Q区の全域にわたって出土しているが比較的大きな破片のものを提示した。207は7 P区出土の土製勾玉、208は6 O区の184～188の土器とほぼ同地点から出土した土玉である。

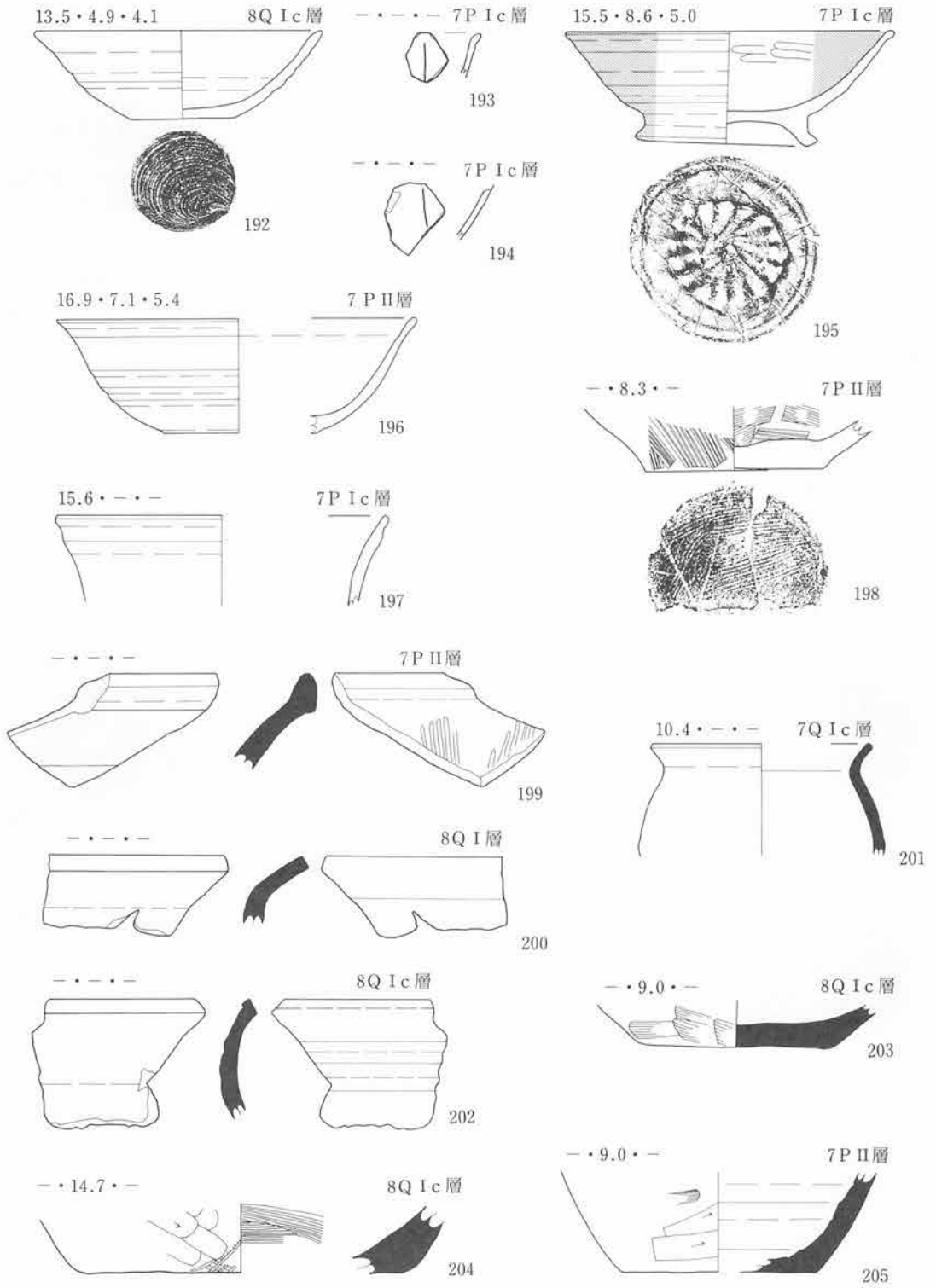
209は7 M区から出土した軒丸瓦の破片で瓦当面には双鶴文が描かれている。210～212は7 Q区から出土した寛永通寶である。



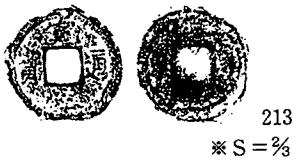
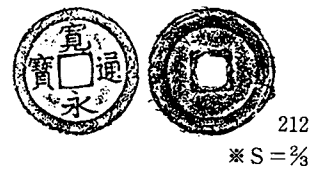
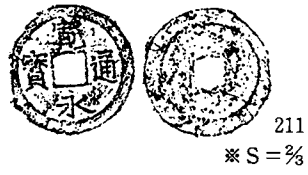
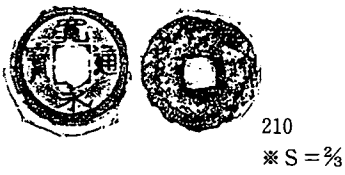
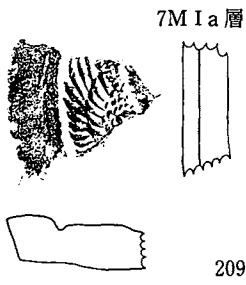
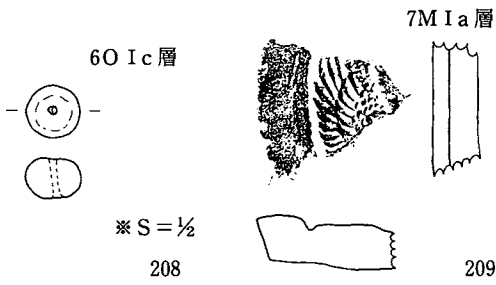
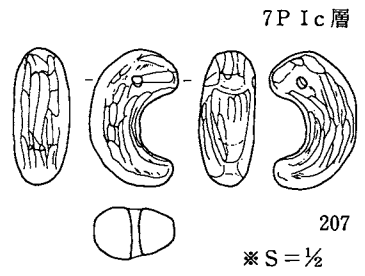
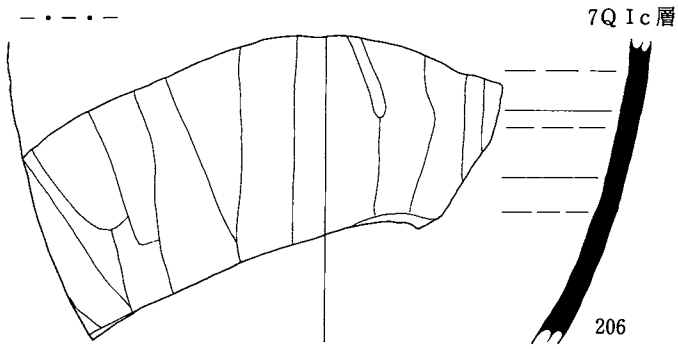
第56図 遺構外出土遺物 - 1



第57図 遺構外出土遺物-2



第58図 遺構外出土遺物 - 3



第59図 遺構外出土遺物 - 4

V. ま と め と 考 察

1. 出土した土師器・須恵器について

出土した遺物は総量で大コンテナ15箱である。きわめて細片で実測不能な破片を除き、反転実測可能なものはすべて図化し報告書に掲載した。この大半が奈良・平安時代の土師器・須恵器であり、それ以外のものはきわめて僅少である。したがって、この両時代の出土遺物を中心に述べ、可能なものについては器種・器形・調整技法による分類をおこなう。

① 土師器坏形土器

土師器坏形土器は出土遺物の中で最も個体数が多い。ロクロ不使用土器をI類、ロクロ使用土器をII類として大分類する。また、内外面の調整技法のうち黒色処理の有無によって、内面黒色処理の施されたものをa類、内外面とも黒色処理の施されたものをb類、無調整のものをc類として小分類した。I類にはb類・c類のものは伴わない。また、その他の調整技法のうち底面に再調整のあるものに特にR類とした。このようにして分類した類型内での器形的な特徴はほぼ共通している。また、II類に属するものの底部切り離しはすべて回転糸切りである。

- | | |
|------------------|------------------------|
| 土師器坏形土器 I 類 | ロクロ不使用のもの |
| 土師器坏形土器 II a 類 | ロクロ使用のうち内面黒色処理されたもの |
| 土師器坏形土器 II a-R 類 | 上記のものうち、底面に再調整のあるもの |
| 土師器坏形土器 II b 類 | ロクロ使用のうち内外面とも黒色処理されたもの |
| 土師器坏形土器 II b-R 類 | 上記のものうち、底面に再調整のあるもの |
| 土師器坏形土器 II c 類 | ロクロ使用のうち器面調整の施されていないもの |

② 土師器高台付坏形土器

土師器高台付坏形土器は高台の剝離したものを含めて20点掲載している。すべてロクロ成形底部切り離しは回転糸切りによるものであるため、器面調整によって3分類した。内面黒色処理されているものを1類、内外面とも黒色処理されているものを2類、ロクロ調整痕以外に再調整がなく黒色処理されていないものを3種とする。

- | | |
|-------------------|------------------|
| 土師器高台付坏形土器 II a 類 | 内面黒色処理されているもの |
| 土師器高台付坏形土器 II b 類 | 内外面とも黒色処理されているもの |
| 土師器高台付坏形土器 II c 類 | 器面調整の施されていないもの |

③ 土師器甕形土器

土師器甕形土器もロクロ不使用土器をI類、ロクロ使用土器をII類として大分類する。また、器高もしくは口径によってS（小型）、M（中型）、L（大型）の3段階に区分する。IM類における各土器は器形的な差異が著しい。

土師器甕形土器S類 器高が15cm未満または口径が12cm未満のもの

土師器甕形土器M類 器高が15cm以上30cm未満または口径が12cm以上20cm未満のもの

土師器甕形土器L類 器高が30cm以上または口径が20cm以上のもの

④ 土師器甕

RA03竪穴住居跡から1点(91)が出土している。無底式のものである。

⑤ 土師器鉢形土器

RA05竪穴住居跡から1点(102)が出土している。ロクロ使用成形、内面ミガキのち黒色処理を施している。

⑥ 須恵器坏形土器

RA02竪穴住居跡から1点(79)が出土している。口径に比べ器高が低く、いわゆる皿形を呈する。内面が研磨されており、硯に転用されたものと推定される。

⑦ 須恵器壺形土器

須恵器壺形土器は多数出土しているが、破片が多く、口縁から底部まで残存し、器高その他計測値を明らかにできるものは少ない。

⑧ 須恵器甕形土器

須恵器甕形土器は多数出土しているが、やはり破片が多く、口縁から底部まで残存し、器高その他計測値を明らかにできるものは少ない。

2. 土師器・須恵器の遺構別構成と年代

土師器・須恵器の出土した遺構についてその器種別分類を一覧表に示した。数値は接合・復元し、実測図を掲載した個体数である。このほかにも多数の破片が出土しているが、器形的な特徴はほぼ共通しており差異がなく、同時期のものと考えられる。遺構によって出土点数が少なく共伴関係が不明瞭なものもある。

土師器・須恵器の遺構別構成一 1

遺構	地区	土 師 器											須 恵 器			その他の遺物			時 代	
		坏・高台坏				甕 I 類			甕 II 類			甕	鉢	壺	土製品	鉄製品	古 銭			
		I	IIa	IIb	IIc	S	M	L	S	M	L									
RA 01	7P		7		19		2	2							2	1		2		平安
RA 02	7P		8	1	24	2	7	1		2				1	4			2		平安
RA 03	7P						3	1				1								奈良
RA 04	6P	1				1														奈良
RA 05	7Q		1	2	6	1		1		1			1		2			1		平安

土師器・須恵器の遺構別構成－2

遺 構	地 区	土 師 器											須 恵 器			その他の遺物			時 代			
		坏・高台坏				甕 I 類			甕 II 類				甗	鉢	坏	甕	壺	土製品		鉄製品	古 銭	
		I	IIa	IIb	IIc	S	M	L	S	M	L											
RA 06	7Q		6		11		1															平 安
RA 07	7Q		1		3			1									1	1	1			平 安
RA 08	6N																					平 安
RA 09	6N																					平 安
RD 02	7P				1			1														平 安
RD 03	7P				2																	平 安
RD 04	7P		1																			平 安
RD 05	7P	1				1		1														奈 良
RD 07	7P						5															奈 良
RD 12	6N				1																	平 安
RG 05	6O												1									不 明
RG 08	6N		3	1	5	1																平 安
RG 09	6N						6															平 安
RG 12	7P						1															奈 良 以 前
総計		2	27	4	72	6	25	8	0	3	0	1	2	1	9	2	1	5	0			

遺構外遺物の地区別出土状況

地 区	土 師 器											須 恵 器			その他の遺物			総 計				
	坏・高台坏				甕 I 類			甕 II 類				甗	鉢	坏	甕	壺	土製品		鉄製品	古 銭		
	I	IIa	IIb	IIc	S	M	L	S	M	L												
6 N 区		3	2	10					1													16
6 O 区	3					1											1					5
7 M 区																	1					1
7 P 区		1	3	2		1			1							1	1	1				11
7 Q 区																2						2
8 Q 区				2												4					4	10
総 計	3	4	5	14	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	7	1	3	0	4			45

3. 竪穴住居跡について

〈検出棟数と残存状況〉

9棟が検出・精査された。3棟はその大部分が調査範囲外にあり、精査ができたのは一部分である。住居跡の時代比定は遺物からおこなったが、形状・規模・柱穴配置・カマドなどからも小区分が可能である。

〈形状・規模と柱穴配置〉

柱穴が検出された竪穴住居跡はRA01、RA02、RA03、RA05、RA08、RA09の6棟である。このうち、柱穴配置が確認できたのはRA01、RA02、RA05の3棟である。このうち、RA01、RA02はカマドの構築された南西壁の壁際に2個、隅から内側に入った位置に2個を掘り込んでおり、ほぼ正方形に近い配置を示す。また、どちらも壁際に掘り込まれた柱穴のうち、1個がカマドの袖と重なっており、隅から内側に入った位置のものは掘り方を伴う。

柱穴と床面積の関係をみると、床面積が20㎡以上の竪穴住居跡では柱穴を持ち、配置も明確である。また、20㎡に近いものは、配置は明確でないものの柱穴を確認できるが、18㎡以下のものは柱穴を伴わない。以上、4本柱を持つ竪穴住居跡と柱穴を持たない竪穴住居跡は、大体20㎡（一辺約4.5m）前後を境にしているとす他遺跡の報告例と矛盾しない。

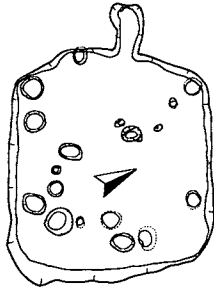
〈カマド〉

痕跡を含め、カマドを検出できた竪穴住居跡はRA01、RA02、RA03、RA05、RA06、RA07の6棟である。このうち、RA01、RA02、RA03、RA05の4棟では掘り込み式、RA06、RA07の2棟はくり抜き式である。カマドをもつ4棟のうちRA01、RA02は多数の石を組んでいる。カマドを構築してる壁はRA01、RA02、RA05が南西壁、RA03が北西壁、RA06、RA07が南西壁である。

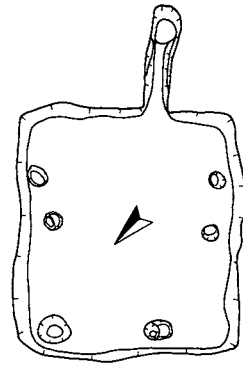
〈埋土と降下火山灰〉

埋土および床面に灰白色火山灰の含まれる竪穴住居跡はRA01、RA02、RA03、RA05、の4棟である。このうち、RA01、RA02竪穴住居跡は床面の全域と壁際に灰白色火山灰の堆積がみられる。堆積の様相はほぼ同様で、埋土上位には灰白色火山灰がふくまれず、床面と床面から壁際の中位にかけてである。RA05竪穴住居跡は床面・壁際のみならず埋土上位にも霜降りブロック状の堆積が見られ、前述の2棟と堆積の様相を異にする。RA03は検出面から埋土最上位に灰白色火山灰の小さいブロックを検出したのみである。他の竪穴住居跡には灰白色火山灰の堆積は見られない。これらは遺構の埋没の時間差を示すものであろう。

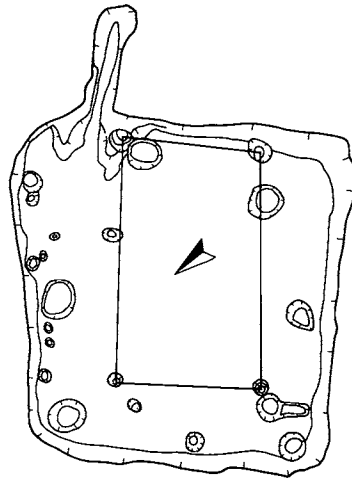
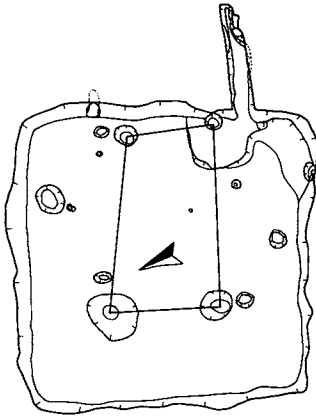
RA06、RA07竪穴住居跡には埋土に火山灰の堆積が見られないが、RA03竪穴住居跡の埋土上部には火山灰の堆積が見られることから類推すると、火山灰降下の時期よりもあとのものと推定される。これらから以下の細分が可能である。



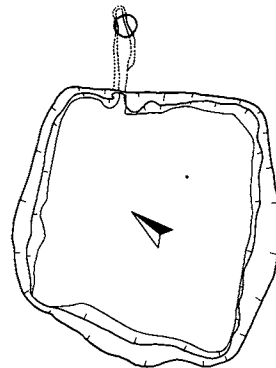
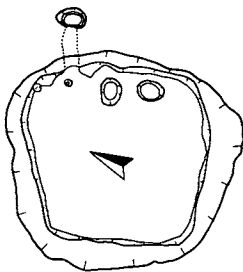
①奈良時代(RA01)



②平安時代I-a(RA05)



平安時代I-b(RA01、RA02)



平安時代II(RA06、RA07)

第60図 竪穴住居跡の分類

① 奈良時代 R A 03・R A 04竪穴住居跡

埋土最上位に火山灰が入る場合がある。カマドは北東壁あるいは住居跡の北半に構築されている。

② 平安時代

I - a 期 R A 05竪穴住居跡

南東壁にカマドを構築しており、埋土上位に火山灰の埋積層。柱穴配置は不明である。

I - b 期 R A 01・R A 02竪穴住居跡

南東壁に石で構築した掘り込み式カマドをもち、埋土下位・床面に火山灰の堆積層が見られる。柱穴配置は北側の床に2個、南側壁際に2個（カマド袖に1個）で配置も明確である。

II 期 R A 06・R A 07竪穴住居跡

北東壁にくり抜き式のカマドを構築しており、埋土には火山灰を含まない。柱穴は検出されず、配置も不明である。また壁上部の崩落が著しい。

4. 掘立柱建物跡・柱穴列・土坑について

掘立柱建物跡は2棟が検出・精査された。R B 01掘立柱建物跡は埋土に霜降りブロック状態の灰白色火山灰の堆積が見られる。この堆積の様相は先述した平安時代 I a 期竪穴住居跡と同様で、埋没時期の同時性を示唆するものであろう。R A 02掘立柱建物跡は出土遺物がなく、埋土の堆積状況からも時代を比定できないが、R A 05竪穴住居跡と R B 01掘立柱建物跡の位置関係から類推すると平安時代 II 期竪穴住居跡と同時存在の可能性が大きい。

柱穴列は3列が検出・精査されている。R C 01柱穴列は R A 01竪穴住居跡と重複し、これよりも新しいが時期決定資料に欠け、時代・時期とも不明である。R C 02柱穴列は埋土に霜降りブロック状の灰白色火山灰の堆積が見られる。この堆積の様相は先述した平安時代 I a 期竪穴住居跡、R B 01掘立柱建物跡と同様で、やはり埋没時期の同時性を示唆している。R C 03柱穴列は R B 02掘立柱建物跡と重複し、これよりも古いが出土遺物がなく、埋土の堆積状況からも時期は比定できない。

土坑は33基が検出・精査された。実測された出土遺物があるのは6基である。2基が奈良時代、4基が平安時代に比定される。出土遺物がない土坑については位置関係・埋土の堆積状況からは時期を比定できない。R D 04・R D 08土坑については埋土堆積の状況は人為的なものと推定され、墓塚の可能性も考えられる。

溝跡は12条が検出・精査された。R G 01～R G 04、R G 06溝跡、R G 11溝跡については検出面・埋土の堆積状況からは時代・時期を比定できない。R G 07～R G 10溝跡は形状・出土遺物から平安時代に属するものと推定されるが、竪穴住居跡の時期区分との比較資料はない。R G

12溝跡は出土遺物・重複関係から奈良時代以前に属する。

5. まとめ

(1) 奈良時代に属する遺構は竪穴住居跡2棟と土坑2基であるが、遺物が出土しておらず、時期不明とした7P区の土坑にもこの時代に属するものもあると思われる。また、遺物が出土している6O区付近の調査区外にも遺構は存在するものと考えられる。

遺構から出土した土師器坏形土器は内面は無段で、ミガキのち黒色処理を施しているが、外面は段を持ち丸底のものが主体である。土師器甕形土器は体部から口縁部にかけて段を持ち、口縁が外湾気味に外反するものが主体である。これらから8世紀前半のものと考えられる。

(2) 平安時代に属する遺構は竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、柱穴列1列、土坑3基であるが、やはり6N区、7P区にある遺物が出土しておらず、時期不明とした土坑のうちにも、この時代に属するものが多数あると考えられる。

遺構から出土した遺物は、基本的には須恵器坏形土器は伴わず、土師器甕形土器はロクロ不使用のものが過半を占める。土師器坏形土器・土師器高台付坏形土器はすべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りによるもので、器面調整の有無に係わらず器形は丸みをおび、口縁がやや外反する。底部再調整のものは僅少である。これらから9世紀後半から10世紀にかけてのものと考えられる。遺構は形状・規模・位置関係などからも3期に細分することが可能であるが、遺物はすべて9世紀後半から10世紀前半にかけての時期におさまる。

(3) 本宮熊堂B遺跡は雫石川によって形成された河岸段丘上に立地している。遺構の集中している今回の調査範囲の北半および東半は旧河道の自然堤防であった微高地上につくられた奈良・平安時代の集落跡であった。特に平安時代の遺構については、当該時期は9世紀初頭に設置された志波城・徳丹城が廃絶されて北上盆地の総括権が胆沢城に集約され、9世紀半ばの律令的な郡制の変容と相前後して在地首長層が台頭してきた時期であるとされており、その性格などは不明なところがある。今回の調査によって集落の存在は明らかになったが、その起源・性格などは再考すべき点が多い。今後、盛南開発事業の進展にともない埋蔵文化財包蔵地約60万㎡の調査が計画されている。土器分類・時期区分を含め遺跡の起源・性格などは比較資料の増加をまって今後の検討課題としたい。

本宮熊堂B遺跡出土環形土器観察表-1

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	器面調整			底部 再調整	計測値：cm			備考	分類
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高		
1	RA 01	床 面	土師器・坏	なし	なし	なし	なし	13.1	5.1	4.9		IIc
2	〃	〃	〃	なし	M	O	あり	—	5.5	—	墨書	IIa-R
3	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	—	5.7	—		IIc
4	〃	〃	〃	なし	M	O	なし	13.7	5.1	5.3		IIa
5	〃	〃	〃	なし	なし	なし	—	14.8	—	—		IIc
6	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	14.1	6.8	4.0		IIa
7	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	12.7	4.8	5.3	墨書	IIc
8	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	12.4	5.1	4.5	〃	IIc
9	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	14.7	—	—		IIc
10	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	15.2	5.6	4.5		IIc
11	〃	カマド	〃	なし	なし	なし	なし	15.2	6.3	4.2		IIc
12	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	12.4	5.3	4.4		IIc
13	〃	〃	〃	なし	M	O	—	15.8	—	—		IIa
14	〃	〃	〃	なし	なし	なし	—	15.7	—	—		IIc
15	〃	埋土	〃	なし	M	O	なし	—	4.0	—		IIa
16	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	13.8	5.4	3.5		IIc
17	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	13.5	5.5	4.7		IIc
18	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	13.8	6.0	5.0		IIc
19	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	13.9	5.6	4.7		IIc
20	〃	〃	〃	なし	なし	なし	—	11.0	—	—		IIc
21	〃	〃	〃	—	なし	なし	なし	—	—	—		IIc
22	〃	〃	〃	—	なし	なし	なし	—	—	—		IIc
23	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	—	5.6	—		IIc
24	〃	〃	〃	なし	なし	なし	なし	—	5.0	—		IIc
25	〃	〃	〃	なし	M	O	なし	—	5.1	—		IIa
26	〃	〃	〃	なし	M	O	なし	—	7.2	—	底部へた高台状	IIa
36	RA 02	床	〃	なし	なし	なし		14.0	5.3	4.0		IIc
37	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.2	6.8	4.9		IIc
38	〃	〃	〃	なし	なし	なし		13.8	6.0	5.0		IIc
39	〃	〃	〃	なし	M	O		14.0	6.0	4.9		IIa
40	〃	〃	〃	なし	なし	なし		15.2	3.5	4.7		IIc
41	〃	〃	土師器・高台付坏	なし	なし	なし		15.2	6.1	6.1		IIc
42	〃	〃	〃	なし	なし	O		12.6	7.0	4.8		IIa
43	〃	〃	土師器・坏	なし	M	O		14.2	5.8	4.6		IIa
44	〃	〃	〃	なし	M	O		14.7	6.2	6.0		IIa
45	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.7	5.5	5.1		IIc
46	〃	カマド	〃	なし	なし	なし		14.7	5.7	4.0		IIc
47	〃	床	〃	なし	なし	なし		14.0	4.7	4.3		IIc
48	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.0	—	—		IIc
49	〃	〃	〃	なし	なし	なし		12.1	—	—		IIc

本宮熊堂B遺跡出土環形土器観察表一 2

No	遺 構	遺構・地点・層位	種 類・器 種	器 面 調 整			底 部 再調整	計 測 値 : cm			備 考	分 類
				外 面	内 面	黒色処理		口 径	底 径	器 高		
50	RA 02	床 面	土師器・坏	なし	なし	なし		—	4.9	—		IIc
51	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.5	—	—	墨 書	IIc
52	〃	〃	〃	なし	M	O		13.0	—	—		IIa
53	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	4.9	—		IIc
54	〃	カマド	〃	なし	なし	なし		—	5.6	—		IIc
55	〃	床 面	〃	なし	なし	なし		—	5.4	—		IIc
56	〃	〃	〃	なし	M	O		—	6.6	—		IIa
57	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	6.0	—		IIc
58	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	5.6	—		IIc
59	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	6.0	—		IIc
60	〃	〃	土師器・高台付坏	なし	なし	なし		—	8.6	—		IIc
61	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	7.9	—		IIc
62	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	9.6	—		IIc
63	〃	〃	〃	O	M	O		—	8.0	—		IIb
70	〃	カマド	土師器・坏	なし	M	O		14.1	6.3	4.1		IIa
75	〃	埋 土	〃	なし	なし	なし		13.9	5.8	4.5		IIc
76	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.8	—	—		IIc
77	〃	〃	〃	なし	M	O		13.7	5.0	4.8		IIa
78	〃	〃	〃	なし	なし	なし		13.3	6.4	4.2		IIc
79	〃	〃	須恵器・坏	なし	なし	なし		12.1	5.3	2.6		—
93	RA 04	〃	土師器・坏	O	M	O		15.0	5.7	4.2	奈 良	I
95	〃	埋 土	〃	なし	なし	なし		14.9	5.6	5.5		IIc
96	〃	〃	〃	なし	M	O		14.6	5.9	4.0		IIa
97	〃	カマド	土師器・高台付坏	O	M	O		15.5	7.2	6.0		IIb
98	〃	床 面	〃	なし	なし	なし		15.7	8.4	6.3		IIc
99	〃	〃	〃	なし	なし	なし		16.6	8.2	6.4		IIc
100	〃	埋 土	土師器・坏	O	M	O		—	—	—		IIb
108	RA 05	床 面	〃	なし	なし	なし		14.0	5.4	4.6		IIc
109	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.4	5.5	5.2		IIc
110	〃	カマド	〃	なし	なし	なし		14.4	5.4	4.8		IIc
111	RA 06	床 面	〃	なし	なし	なし		12.9	5.0	4.3		IIc
112	〃	〃	〃	なし	M	O		13.0	5.4	4.2		IIa
113	〃	〃	〃	なし	M	O		13.0	6.0	3.6		IIc
114	〃	〃	〃	なし	なし	なし		13.0	5.0	3.4		IIc
115	〃	〃	〃	なし	M	O		13.5	5.7	4.1		IIa
116	〃	〃	〃	なし	なし	なし		13.9	6.2	4.1		IIc
117	〃	〃	〃	なし	M	O		15.2	5.2	5.0		IIa
118	〃	〃	〃	なし	M	O		—	6.2	—		IIa
119	〃	カマド	〃	なし	なし	なし		13.1	4.9	3.7		IIc
120	〃	埋 土	〃	なし	なし	なし		13.3	4.7	5.0		IIc

本宮熊堂B遺跡出土环形土器観察表— 3

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	器面調整			底部 再調整	計測値：cm			備考	分類
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高		
121	RA 06	カマド	土師器・坏	なし	なし	なし		13.5	5.6	3.8		IIc
122	〃	床	〃	なし	なし	なし		13.0	5.0	3.8		IIc
123	〃	カマド	〃	なし	M	O		15.2	8.0	4.7		IIa
124	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	5.1	—		IIc
125	〃	〃	〃	なし	M	O		—	5.4	—		IIa
127	〃	埋土	〃	なし	なし	なし		—	5.3	—		IIc
128	〃	〃	土師器・高台付坏	なし	なし	なし		13.7	5.8	4.5	高台部剝離	IIc
129	RA 07	床	土師器・坏	なし	なし	なし		13.7	5.3	4.7		IIc
130	〃	カマド	〃	なし	M	O		13.9	5.0	3.5		IIa
131	〃	〃	〃	なし	なし	なし		12.6	5.4	3.5		IIc
132	〃	埋土	〃	なし	なし	なし		13.4	—	—		IIc
138	RD 02	埋土	〃	なし	なし	なし		—	4.4	—		IIc
139	RD 03	埋土	〃	なし	なし	なし		15.4	6.4	4.8		IIc
140	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.4	6.0	4.6		IIc
141	RD 04	底面	〃	なし	M	O		13.7	4.9	4.7		IIa
143	RD 05	埋土	〃	なし	M	O		11.6	—	—	奈良	I
150	RD 12	埋土	〃	なし	なし	なし		12.7	3.9	4.9		IIc
152	RG 04	底面	〃	なし	M	O		12.7	4.5	4.5		IIa
153	RG 08	〃	〃	なし	なし	なし		13.0	5.0	4.5		IIc
154	〃	〃	土師器・高台付坏	なし	なし	なし		14.0	—	—		IIc
155	〃	〃	〃	O	M	O	O	13.5	5.3	4.1		IIb-R
156	〃	〃	〃	なし	M	O		12.8	5.0	5.1		IIa
157	〃	〃	〃	なし	M	O		—	4.9	—		IIa
158	〃	〃	〃	なし	なし	なし		10.7	—	—		IIc
159	〃	〃	〃	なし	なし	なし		12.5	5.6	3.8		IIc
160	〃	〃	〃	なし	なし	なし		12.6	5.1	3.8		IIc
169	遺構外	6N I c層	〃	なし	なし	なし		14.0	3.0	6.7		IIc
170	〃	〃	〃	なし	M	O		12.8	5.0	3.9		IIa
171	〃	6N I a層	〃	なし	なし	O		12.3	4.8	5.2		IIa
172	〃	6N I 層	〃	なし	なし	なし		12.0	5.5	5.1		IIc
173	〃	6N I a層	〃	なし	M	O		13.2	5.5	4.9		IIa
174	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	5.9	—		IIc
175	〃	6N I c層	〃	なし	なし	なし		14.1	5.4	4.2		IIc
176	〃	〃	〃	なし	なし	なし		12.4	6.1	4.5		IIc
177	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.7	6.0	4.8		IIc
178	〃	〃	〃	なし	なし	なし		14.2	5.0	4.3		IIc
179	〃	〃	〃	なし	なし	なし		13.2	5.0	3.9		IIc
180	〃	〃	〃	なし	なし	なし		—	5.7	—		IIc
182	〃	6N I 層	〃	O	M	O		—	5.3	—		IIb
183	〃	6N I 層	〃	なし	なし	なし		12.5	5.0	4.2		IIc

本宮熊堂B遺跡出土土器観察表-4

Na	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	器面調整			底部 再調整	計測値：cm			備考	分類
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高		
184	遺構外	6N1c層	土師器・高台付坏	O	M	O		—	—	—		IIb
185	〃	〃	土師器・坏	なし	M	O		16.6	—	—		I
186	〃	〃	〃	なし	M	O		—	7.5	—		I
187	〃	〃	〃	O	M	O		—	3.5	—		I
189	〃	7P1b層	〃	なし	M	O		13.5	5.0	4.7		IIa
190	〃	〃	〃	なし	なし	なし		13.5	6.1	4.3		IIc
191	〃	8Q1c層	〃	なし	なし	なし		13.8	5.7	4.5		IIc
192	〃	〃	〃	なし	なし	なし		13.5	4.9	4.1		IIc
193	〃	7P1c層	〃	O	M	O		—	—	—		IIb
194	〃	〃	〃	O	M	O		—	—	—		IIb
195	〃	〃	土師器・高台付坏	O	M	O		15.5	8.6	5.0		IIb
196	〃	7P1I層	土師器・坏	なし	なし	なし		16.9	7.1	5.4		IIc

本宮熊堂B遺跡出土甕形土器観察表-1

Na	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	外面調整			内面 調整	底部	計測値：cm			備考	分類
				口縁	体上	体下			口径	底径	器高		
27	RA 01	カマド	土師器・壺	ナデ	ハケメ	—	ハケメ	—	21.2	—	—		(1L)
28	〃	埋土	〃	なし	ケズリ	—	ナデ	—	14.4	—	—		(1M)
29	〃	〃	〃	なし	ケズリ	—	ナデ	—	20.9	—	—		(1L)
30	〃	〃	〃	ナデ	ケズリ	—	ハケメ	—	13.1	—	—		(1M)
31	〃	〃	須恵器・壺	—	なし	—	なし	—	—	—	—		
32	〃	〃	〃・瓶	—	なし	—	なし	—	—	—	—		
33	〃	床面	〃・壺	なし	タタキ	—	—	—	—	—	—		
64	RA 02	〃	〃	—	—	ヘラケズリ ヘラミガキ	ハケメ	なし	—	16.0	—		
65	〃	〃	土師器・壺	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	—	8.1	—		(1S)
66	〃	〃	〃	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	なし	—	7.9	—		(1M)
67	〃	煙道	〃	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	木葉痕	6.6	6.6	6.6		1S
68	〃	床面	〃	—	—	ハケメ ヘラナデ	ヘラナデ	〃	—	9.2	—		(1M)
69	〃	カマド	須恵器・壺	なし	なし	なし		回転線切り痕	11.8	6.4	12.3		
71	〃	〃	土師器・壺	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ ヘラナデ	—	19.0	—	—		(1M)
72	〃	床面	〃	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕	—	11.3	—		(1M)
73	〃	カマド	〃	なし	なし	—	ヨコナデ ヘラナデ	—	11.8	—	—		1S
74	〃	〃	〃	—	—	ヘラケズリ	なし	なし	—	10.1	—		(1M)
80	〃	埋土	〃	なし	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	—	16.4	—	—		(1M)
81	〃	〃	〃	なし	なし	—	ヘラナデ ヨコナデ	—	17.6	—	—		(1M)
82	〃	〃	〃	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	なし	—	10.4	—		(1L)
83	〃	〃	〃	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	—	10.2	—		1M
84	〃	床面	須恵器・壺	なし	タタキ	なし	なし	—	—	—	—		
85	〃	〃	〃	—	—	タタキ	タタキ	—	—	—	—		
88	RA 03	埋土	土師器・壺	ユビナデ	ハケメ	—	ヨコナデ	—	19.0	—	—		1M

本宮熊堂B遺跡出土甕形土器観察表-2

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	外面調整			内面調整	底部	計測値: cm			備考	分類
				口縁	体上	体下			口径	底径	器高		
89	RA 03	床面	土師器・甕	—	—	ハケメ	ハケメ ヘラナデ	—	—	7.6	—		IM
90	〃	〃	〃	なし	—	ハケメ	なし	なし	—	7.3	—		(IM)
91	〃	埋土	土師器・甕	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヨコナデ	—	16.2	8.5	12.8		—
92	〃	カマド	〃・甕	—	ケズリ	—	なし	—	—	—	—		(IL)
94	RA 04	埋土	〃	なし	なし	ハケメ		木葉痕	—	6.8	—		(IS)
101	RA 05	カマド	〃	ヨコナデ	なし	ヘラナデ	ハケメ ヨコナデ	ハケメ	12.9	8.3	12.4		IS
102	〃	床面	土師器・鉢	なし	なし	ケズリ	ヘラミガキ	なし	20.3	6.4	15.9	内黒	—
103	〃	カマド	〃・甕	ヨコナデ	なし	ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	—	19.7	—	—		IL
104	〃	〃	〃	なし	なし	—	—	—	13.6	—	—		(IS)
105	〃	埋土	〃	—	—	ヘラケズリ タタキメ	ヘラミガキ ヘラナデ ハケメ	なし	—	11.9	—		(IL)
106	〃	床面	須恵器・甕	—	タタキメ	—	タタキメ	—	—	—	—		—
126	RA 06	〃	土師器・甕	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	なし	—	7.9	—		(IM)
133	RA 07	〃	須恵器・壺	—	—	ヘラケズリ	ヨコナデ	なし	—	10.6	—	高台	—
134	〃	〃	〃・甕	なし	—	—	—	—	—	—	—		—
135	〃	埋土	土師器・甕	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	—	—	—	—		(IL)
137	RD 02	埋土	土師器・甕	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕	17.7	10.8	33.9		IL
142	RD 05		〃	なし	ハケメ	—	なし	—	—	—	—		(IL)
144	〃	底面	〃	—	—	ハケメ	ヘラナデ	木葉痕	—	7.9	—		(IS)
145	RD 07	〃	〃	—	—	ヘラミガキ	ヘラナデ	〃	—	6.6	—		(IM)
146	〃	〃	〃	なし	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	—	14.2	—	—		(IM)
147	〃	〃	〃	—	—	ハケメ	ハケメ	木葉痕	—	9.2	—		(IM)
148	〃	〃	〃	なし	ヘラナデ	—	ヘラナデ	—	21.1	—	—		(IM)
149	〃	〃	〃	なし	ハケメ	—	ヘラナデ	—	17.9	—	—		(IM)
151	RG 04	埋土	〃	ヘラミガキ	なし	なし	ヘラミガキ	—	24.0	—	—	内黒	—
161	RG 08	底面	〃	ヨコナデ	なし	なし	ヘラナデ	—	7.2	—	—	片口	IS
162	RG 09	〃	〃	ヨコナデ	ハケメ	—	ヨコナデ ハケメ	—	13.5	—	—		(IM)
163	〃	〃	〃	ヨコナデ	ハケメ	—	ヨコナデ ハケメ	—	17.2	—	—		(IM)
164	〃		〃	—	ハケメ	ハケメ	ハケメ	木葉痕	—	10.8	—		(IM)
165	〃		〃	ヨコナデ	ナデ	—	ハケメ	—	—	9.0	—		(IM)
166	〃		〃	—	—	ハケメ	ハケメ	木葉痕	—	8.5	—		(IM)
167	〃		〃	ヨコナデ	ハケメ	—	ハケメ	—	—	—	—		(IM)
168	RG 12		〃	—	—	ハケメ	なし	木葉痕	—	8.5	—		(IM)
181	遺構外	6N1c層	〃	—	—	なし	なし	回転糸切り	—	8.1	—		(IIM)
188	〃	6O1c層	〃	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ ヨコナデ	木葉痕	13.9	7.4	16.1		IM
197	〃	7P1c層	〃	なし	なし	—	なし	—	15.6	—	—		(IIM)
198	〃	7P11層	〃	なし	なし	ハケメ	ヘラナデ ハケメ	ハケメ	—	8.3	—		(IM)
199	〃	〃	須恵器・甕	なし	なし	—	ヘラミガキ	—	—	—	—		
200	〃	8Q1c層	〃	なし	なし	—	なし	—	—	—	—		
201	〃	7Q1c層	〃・壺	なし	なし	—	なし	—	10.4	—	—		
202	〃	8Q1c層	〃・甕	なし	なし	—	なし	—	—	—	—		

本宮熊堂B遺跡出土甕形土器観察表-3

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	外面調整			内面調整	底部	計測値：cm			備考	分類
				口縁	体上	体下			口径	底径	器高		
203	遺構外	8C1c層	須恵器・壺	—	—	ヘラナデ	なし	—	—	9.0	—		IL
204	〃	8Q1c層	〃	—	—	ヘラケズリ タダキメ	ハケメ	—	—	14.7	—		
205	〃	7P11層	須恵器・壺	—	—	ヘラケズリ ヘラナデ	なし	—	—	9.0	—		
206	〃	7Q1c層	〃・壺	—	—	ケズリ	なし	—	—	—	—		

本宮熊堂B遺跡出土土製品観察表

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	計測値：cm			重量：g	備考
				長さ	幅	厚さ		
136	RA 07	床面	土錘	4.1	1.7	1.7	11.59	S=½
207	遺構外	7P1c層	勾玉	3.5	2.2	1.3	9.41	S=½
208	〃	6O1c層	土玉	1.5	1.3	0.9	2.15	S=½
209	〃	7M1a層	軒丸瓦	—	—	1.7	54.2	近世

本宮熊堂B遺跡出土鉄製品観察表

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	計測値：cm			重量：g	備考
				長さ	幅	厚さ		
34	RA 01	床面	刀子	10.8	1.9	0.2	8.5	
35	〃	〃	紡錘車	15.6	4.1	0.4	13.51	
86	RA 02	〃	釘	5.6	1.0	0.6	10.88	
87	〃	〃	刀子	5.6	1.1	0.3	4.60	
110	RA 05	〃	鋤先	11.4	14.6	1.0	97.74	

本宮熊堂B遺跡出土古銭観察表

No	遺構	遺構・地点・層位	銘	直径：cm	重量：g	備考
210	遺構外	711Q	寛永通寶	2.3	1.56	
211	〃	〃	〃	2.6	2.36	
212	〃	〃	〃	2.4	3.09	
213	〃	〃	〃	2.3	7.37	3枚接着

写 真 图 版



遺跡遠景



調査区全景

写真図版Ⅰ 遺跡全景（空中写真）



基本層序-1



基本層序-2

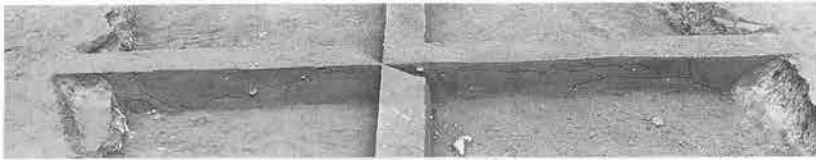


基本層序-3

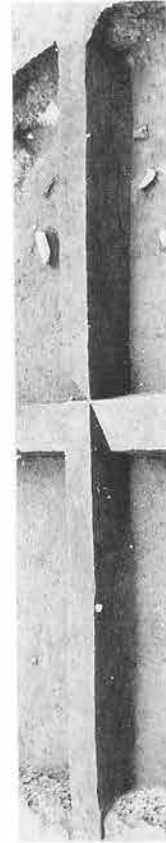
写真図版2 基本層序1、2、3



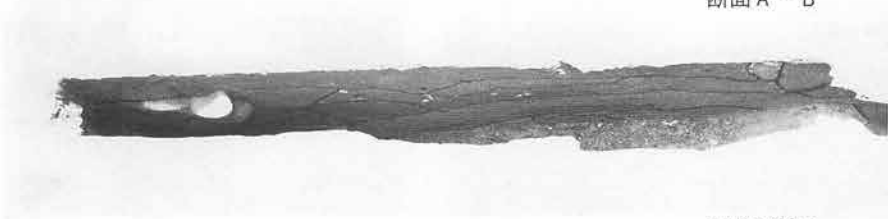
R A 01 竪穴住居跡 完掘平面



断面 A - B



断面 C - D

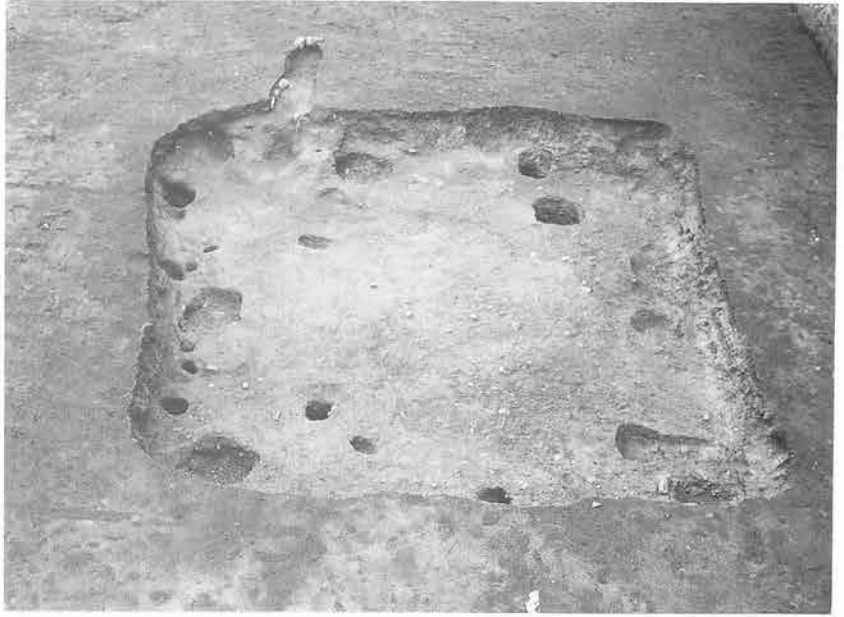
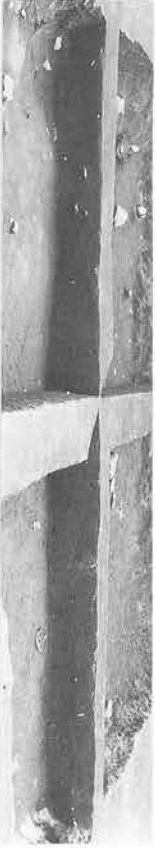


煙道部断面

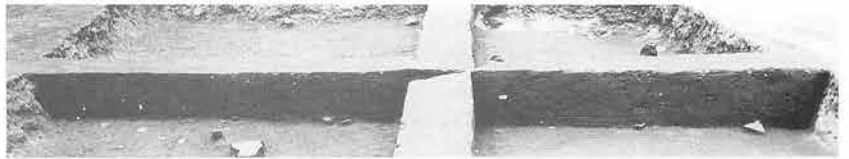


カマド検出

断面 C-D



R A 02 竪穴住居跡完掘平面



断面 A-B



カマド断面 1



カマド断面 2

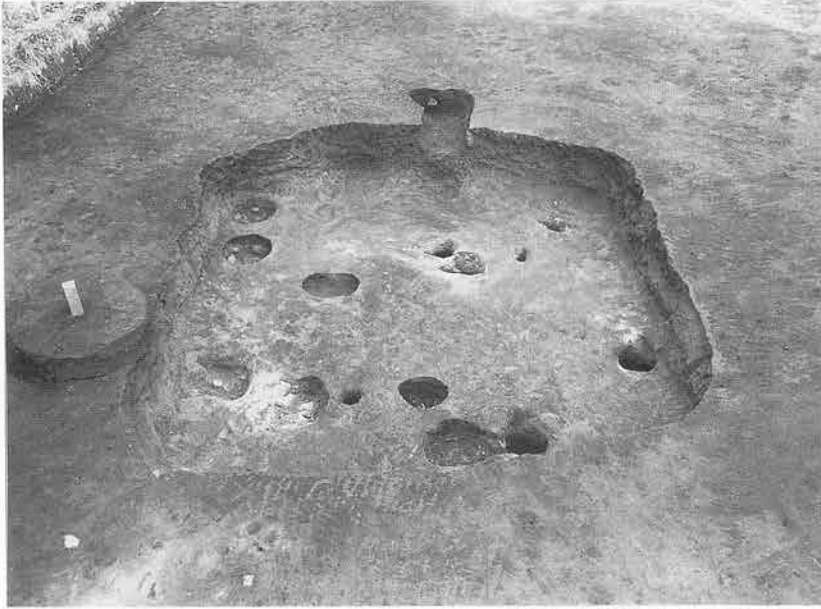


遺物出土状況

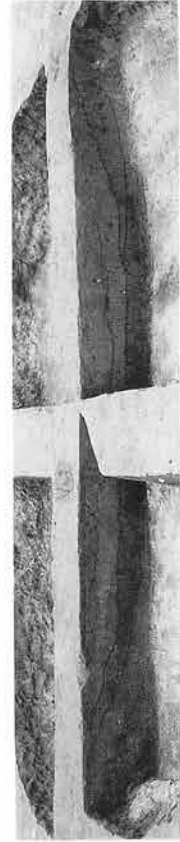


煙出し

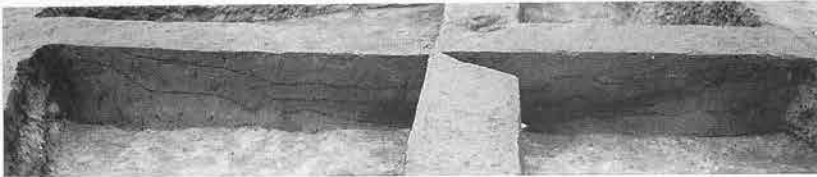
写真図版 4 R A 02 竪穴住居跡



R A 03 竪穴住居跡完掘平面



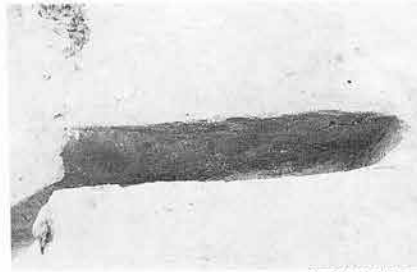
断面 C-D



断面 A-B



カマド断面



煙道部断面



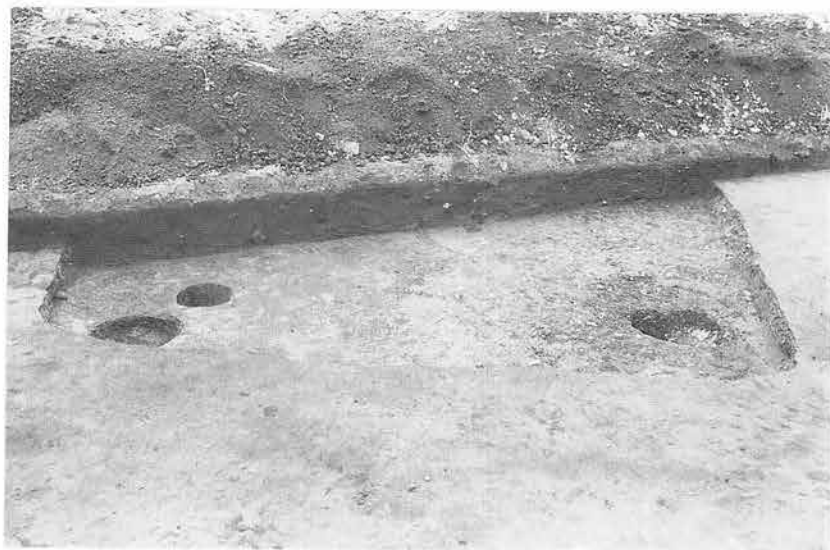
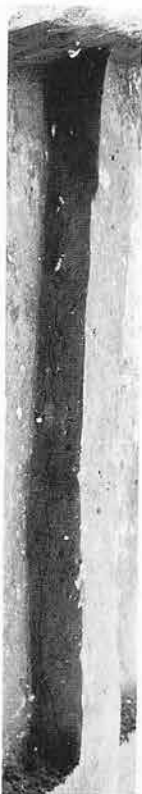
遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版 5 R A 03 竪穴住居跡

埋土断面 C-D



R A 04 豎穴住居跡 完掘平面



埋土断面 A-B

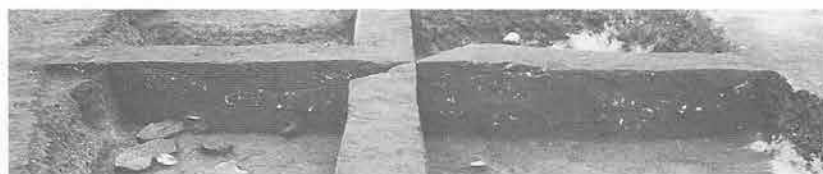


掘り方

断土断面 C-D



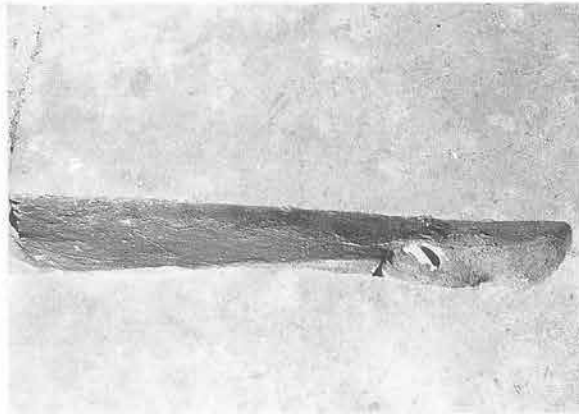
R A 05 竖穴住居跡完掘平面



埋土断面 A-B



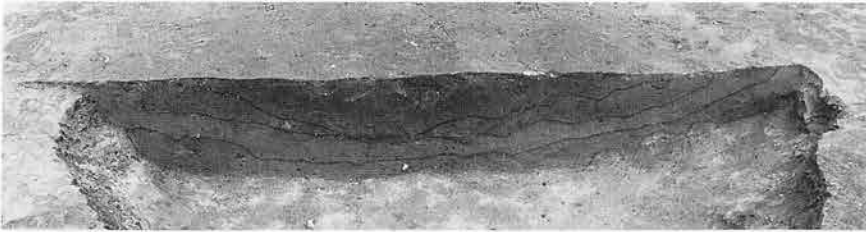
カマド検出



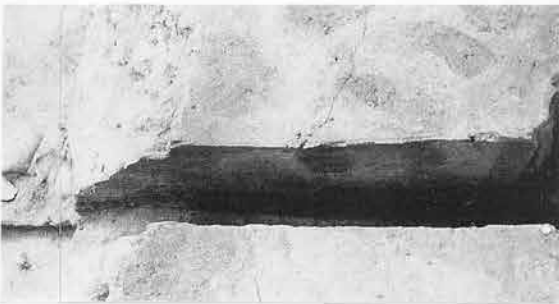
煙道部断面



R A 06 竪穴住居跡 完掘平面



埋土断面 A - B

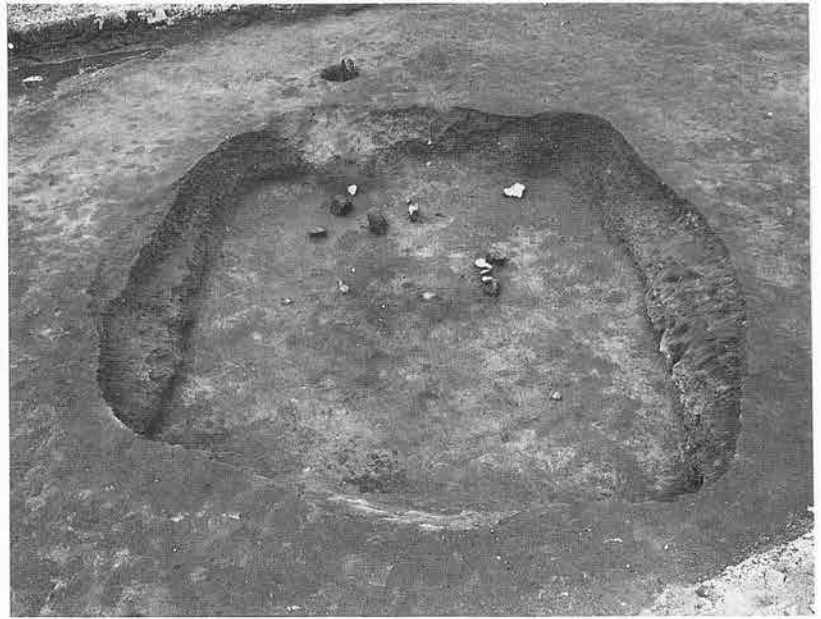


煙道部断面

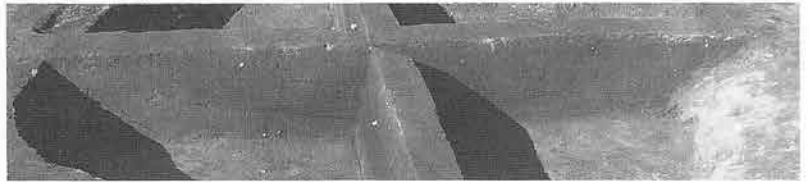


煙出し部断面

埋土断面 C-D



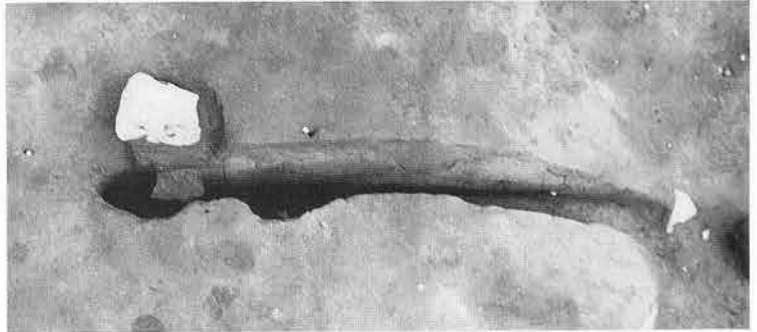
R A 07 竖穴住居跡 完掘平面



埋土断面 A-B



煙出し部断面



煙道部断面



R A 08 竖穴住居跡完掘平面・断面

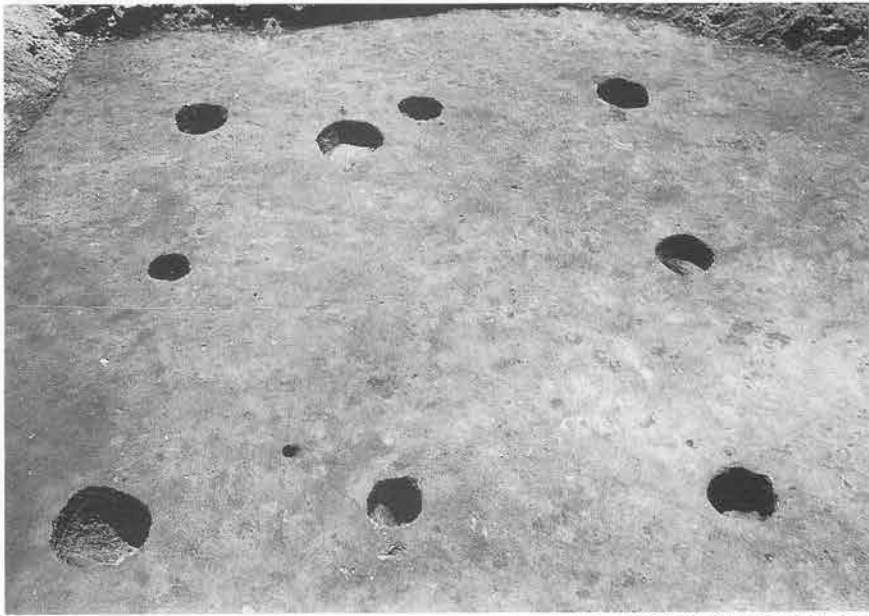


R A 09 竖穴住居跡完掘平面



断面

写真図版10 R A 08・09 竖穴住居跡



R B01掘立柱建物跡 完掘平面



柱穴断面 1



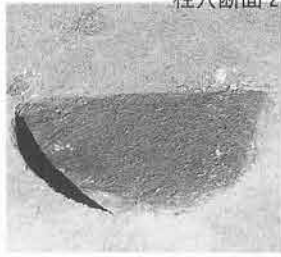
柱穴断面 2



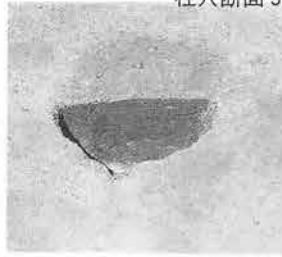
柱穴断面 3



柱穴断面 4



柱穴断面 5



柱穴断面 6



柱穴断面 7



柱穴断面 8

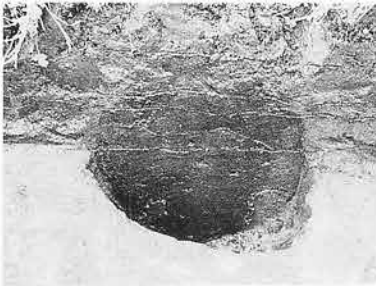


柱穴断面 9

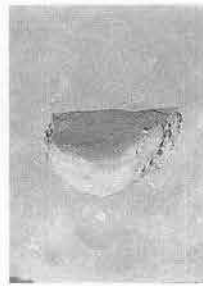
写真図版II R B01掘立柱建物跡



R B 02掘立柱建物跡完掘



柱穴断面 1



柱穴断面 2



柱穴断面 3



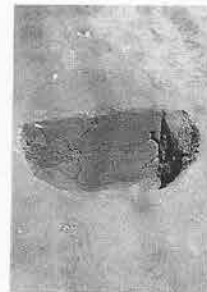
柱穴断面 4



柱穴断面 5



柱穴断面 6



柱穴断面 7



R C 01柱穴列 検出



柱穴断面 1



柱穴断面 2



R C 02柱穴列 完掘



柱穴断面 1



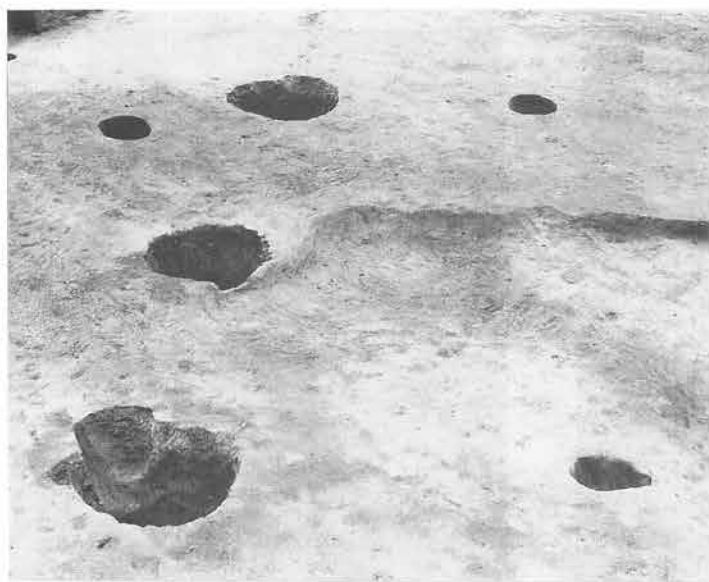
柱穴断面 2



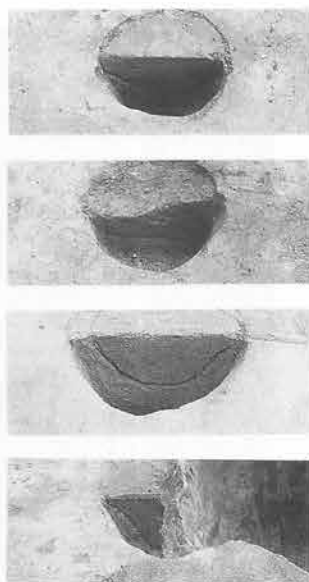
柱穴断面 3



柱穴断面 4



R C 03柱穴列 完掘



柱穴断面



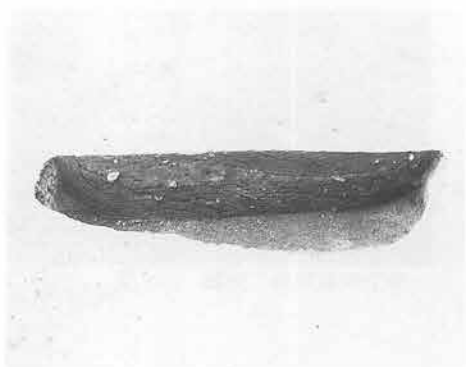
R D 01土坑 検出



完掘



R D 02土坑 完掘

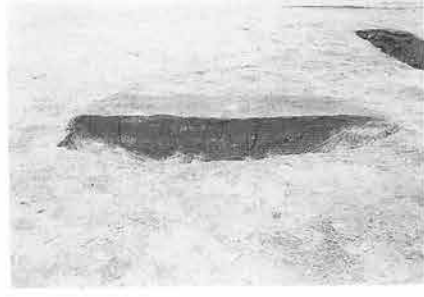


R D 02土坑 断面

写真図版14 R C 03柱穴列, R D 01・02土坑



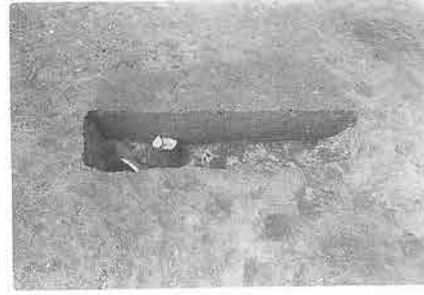
R D 03土坑 完掘



埋土断面



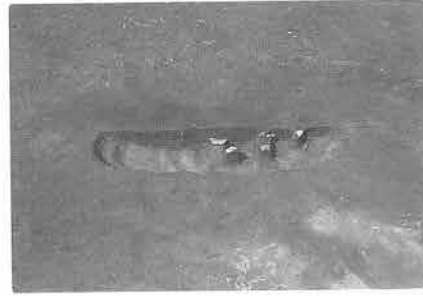
R D 04土坑 完掘



埋土断面



R D 05土坑 完掘



埋土断面



R D 06土坑 完掘



埋土断面

写真図版15 R D 03・04・05・06土坑



R D 07土坑完掘



埋土断面



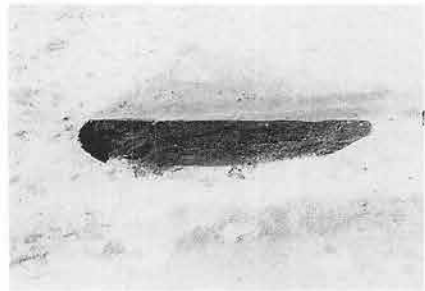
R D 08土坑 完掘



埋土断面



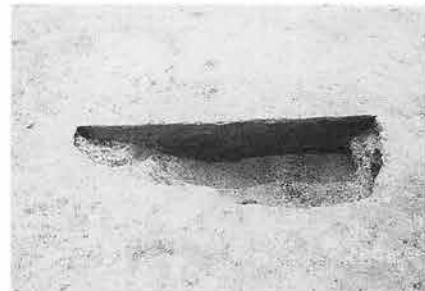
R D 09土坑 完掘



埋土断面



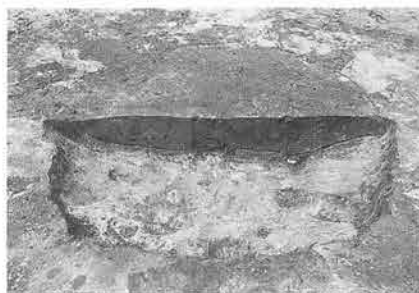
R D 10土坑 完掘



埋土断面



R D 11土坑 完掘



埋土断面



R D 12土坑 完掘



埋土断面



R D 13土坑 完掘



埋土断面



R D 14土坑 完掘



埋土断面

写真図版17 R D 11・12・13・14土坑



R D 15土坑 完掘



埋土断面



R D 16土坑 完掘



埋土断面



R D 17土坑 完掘



埋土断面



R D 18土坑 完掘



埋土断面

写真图版18 R D 15 · 16 · 17 · 18土坑



R D 19土坑 完掘



埋土断面



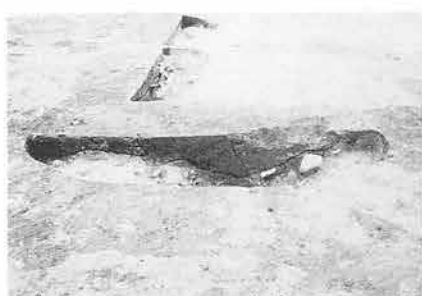
R D 20土坑 完掘



埋土断面



R D 21土坑 完掘



埋土断面



R D 22土坑 完掘



埋土断面

写真図版19 R D 19・20・21・22土坑



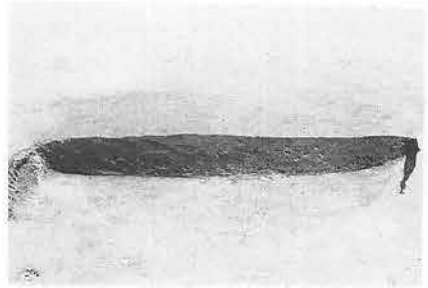
R D 23土坑 完掘



埋土断面



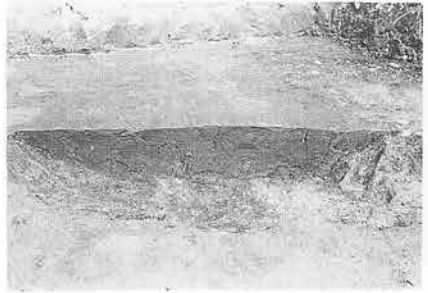
R D 24土坑 完掘



埋土断面



R D 25土坑 完掘



埋土断面



R D 26土坑 完掘



埋土断面

写真図版20 R D 23・24・25・26土坑



R D 27土坑 完掘



埋土断面



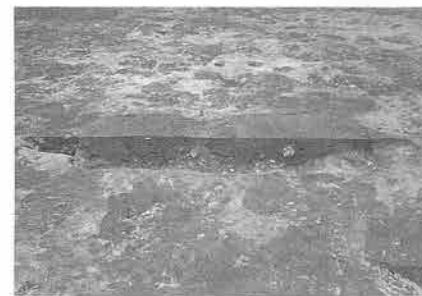
R D 28土坑 完掘



埋土断面



R D 29土坑 完掘



埋土断面



R D 30土坑 完掘

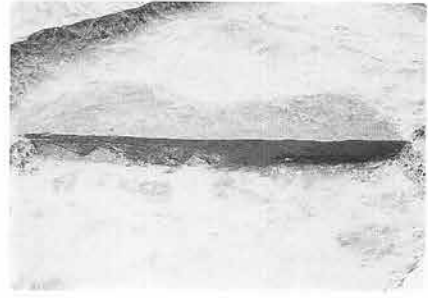


埋土断面

写真図版21 R D 27・28・29・30土坑



R D 31土坑 完掘



埋土断面



R D 32土坑 完掘



埋土断面



R D 33土坑 完掘



埋土断面



R G 01溝跡 完掘



R G 02溝跡 完掘



R G 03溝跡 完掘



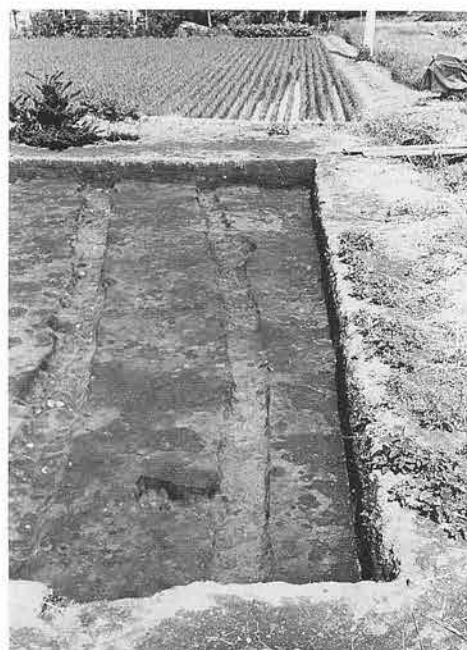
R G 04溝跡 完掘



R G 05溝跡 完掘



R G 06溝跡 完掘



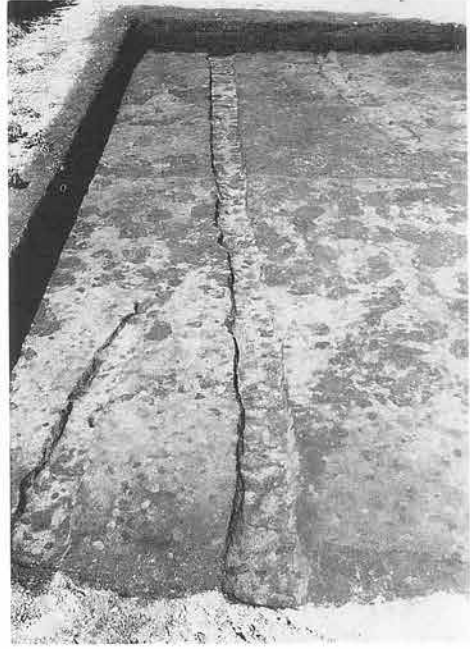
R G 07溝跡 完掘(東半)



R G 08溝跡 完掘(東半)



R G 07溝跡 完掘(西半)



R G 08溝跡 完掘(西半)



R G 09溝跡 完掘



R G 10溝跡 完掘



R G 08・09 溝跡遺物出土状況



R G 08 溝跡遺物出土状況



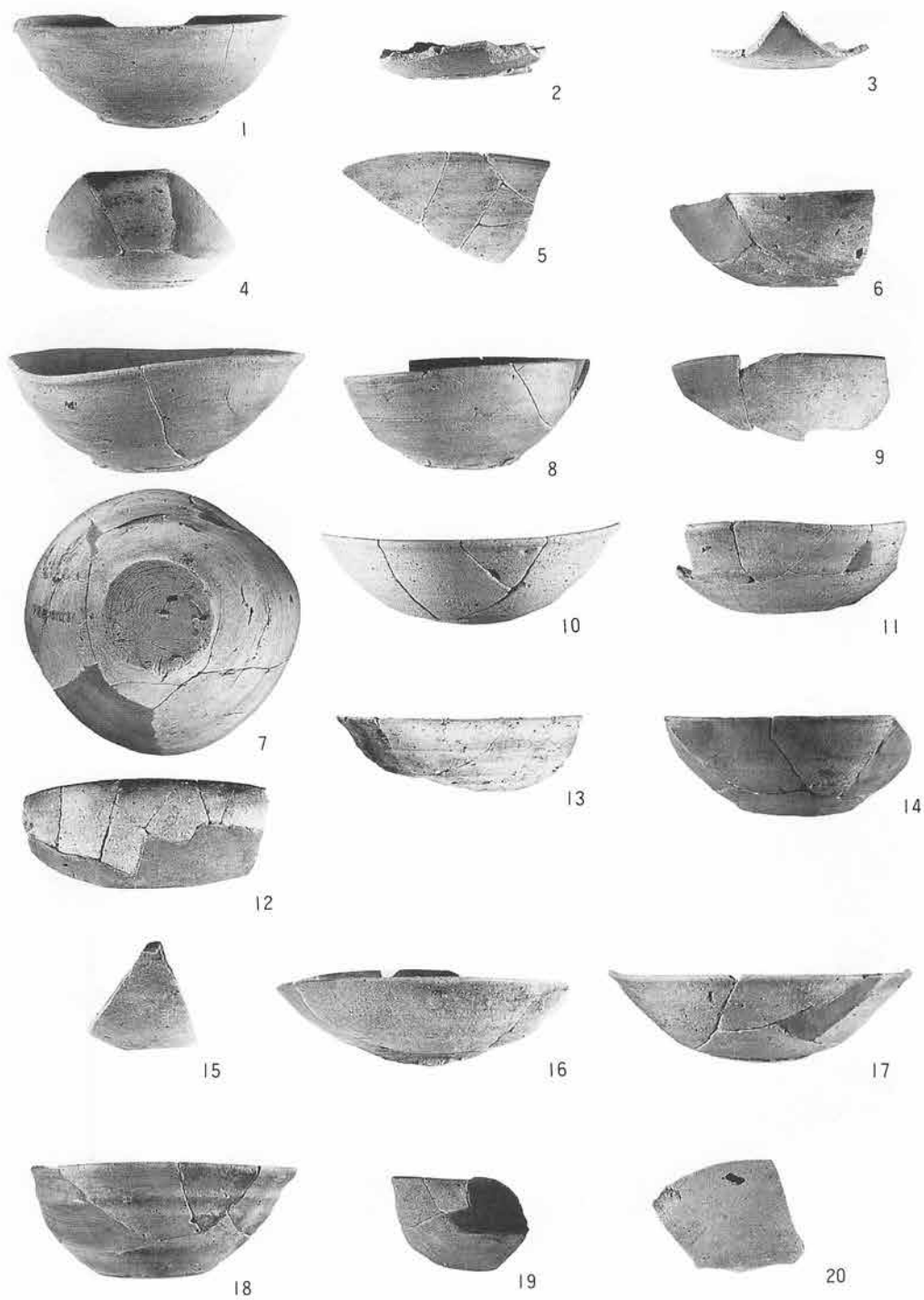
R G 09 溝跡遺物出土状況



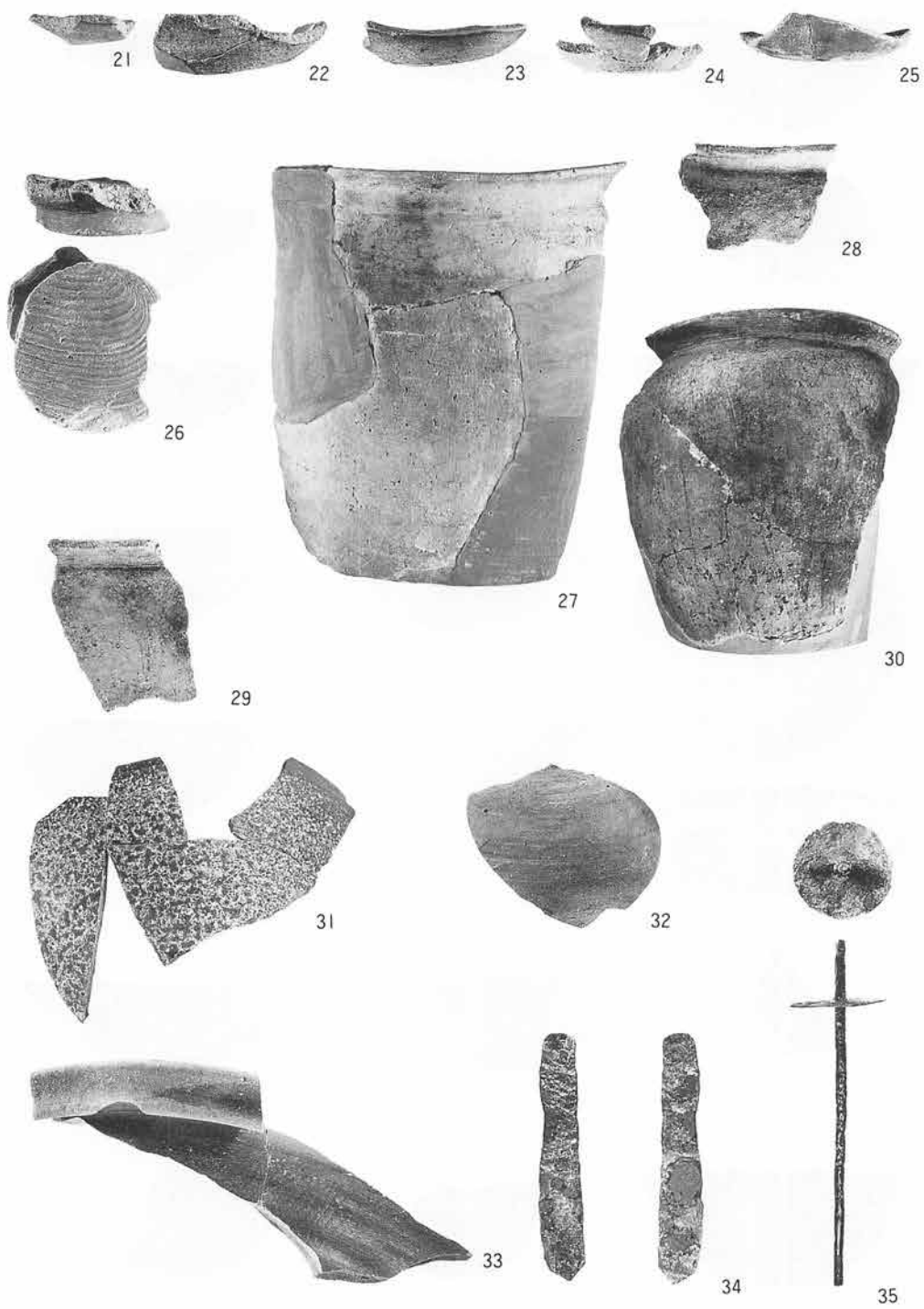
R G 11 溝跡 完掘



R G 12 溝跡 完掘



写真図版27 遺構内出土遺物一 I



写真図版28 遺構内出土遺物-2



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54

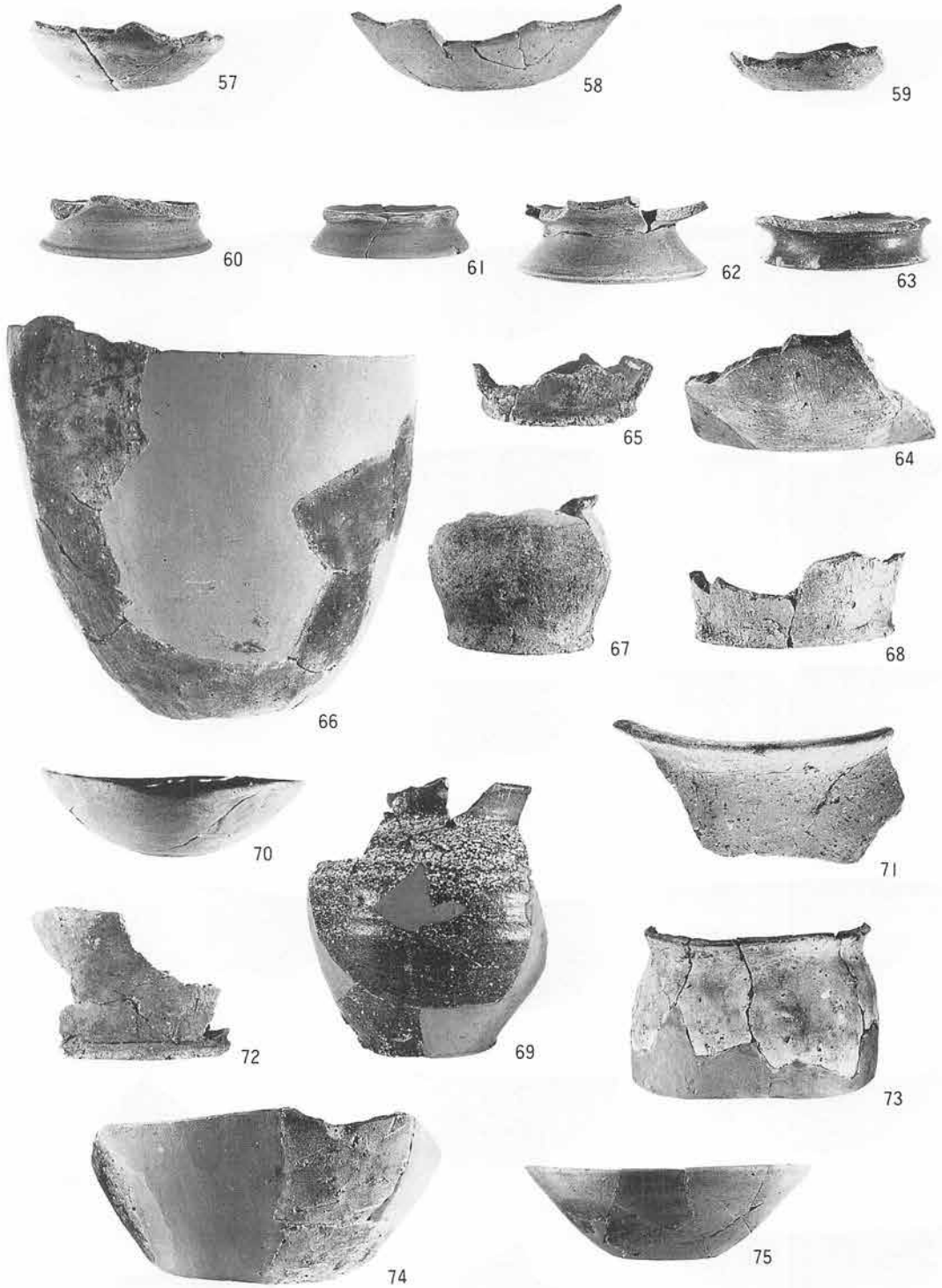


55

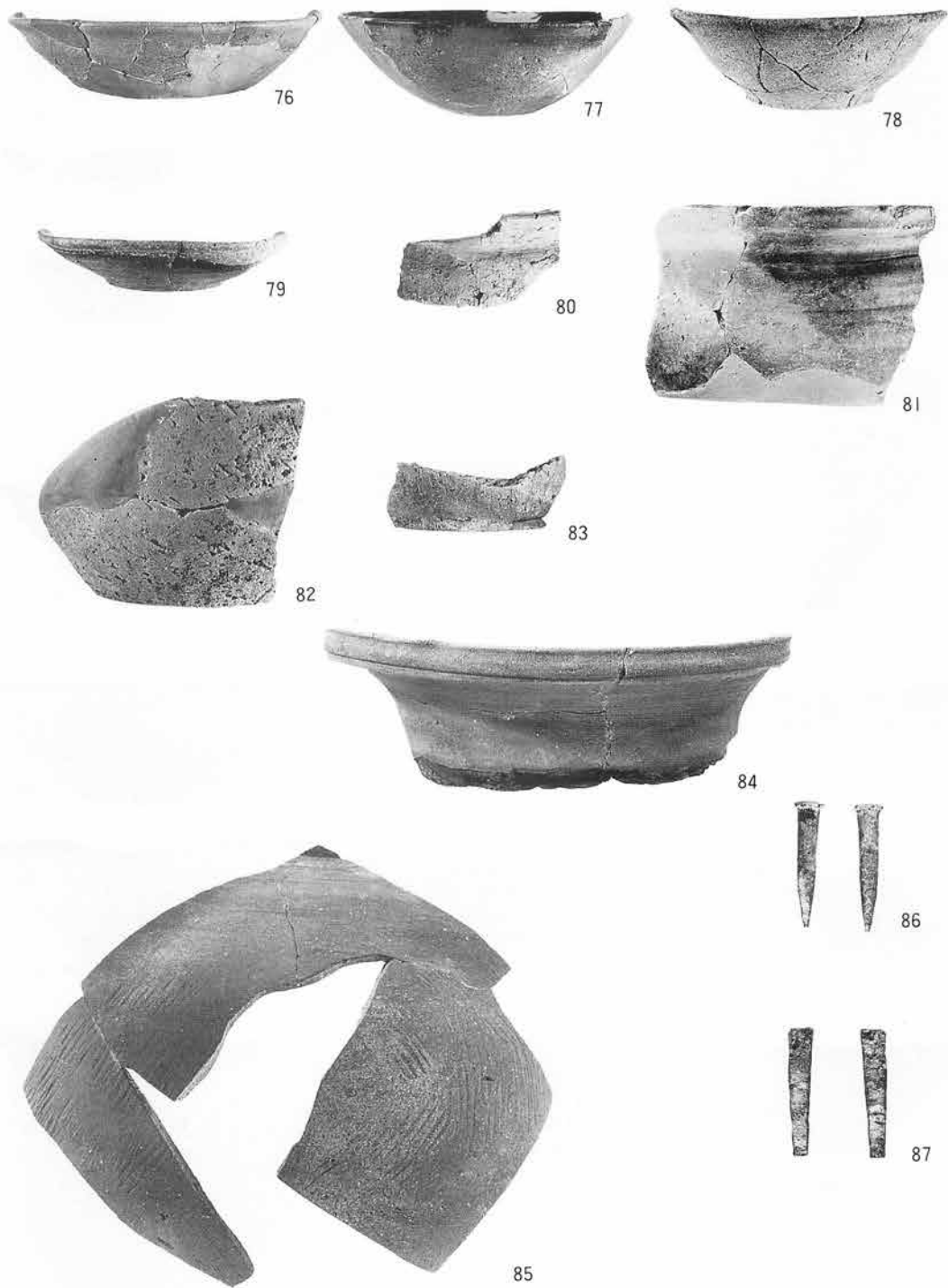


56

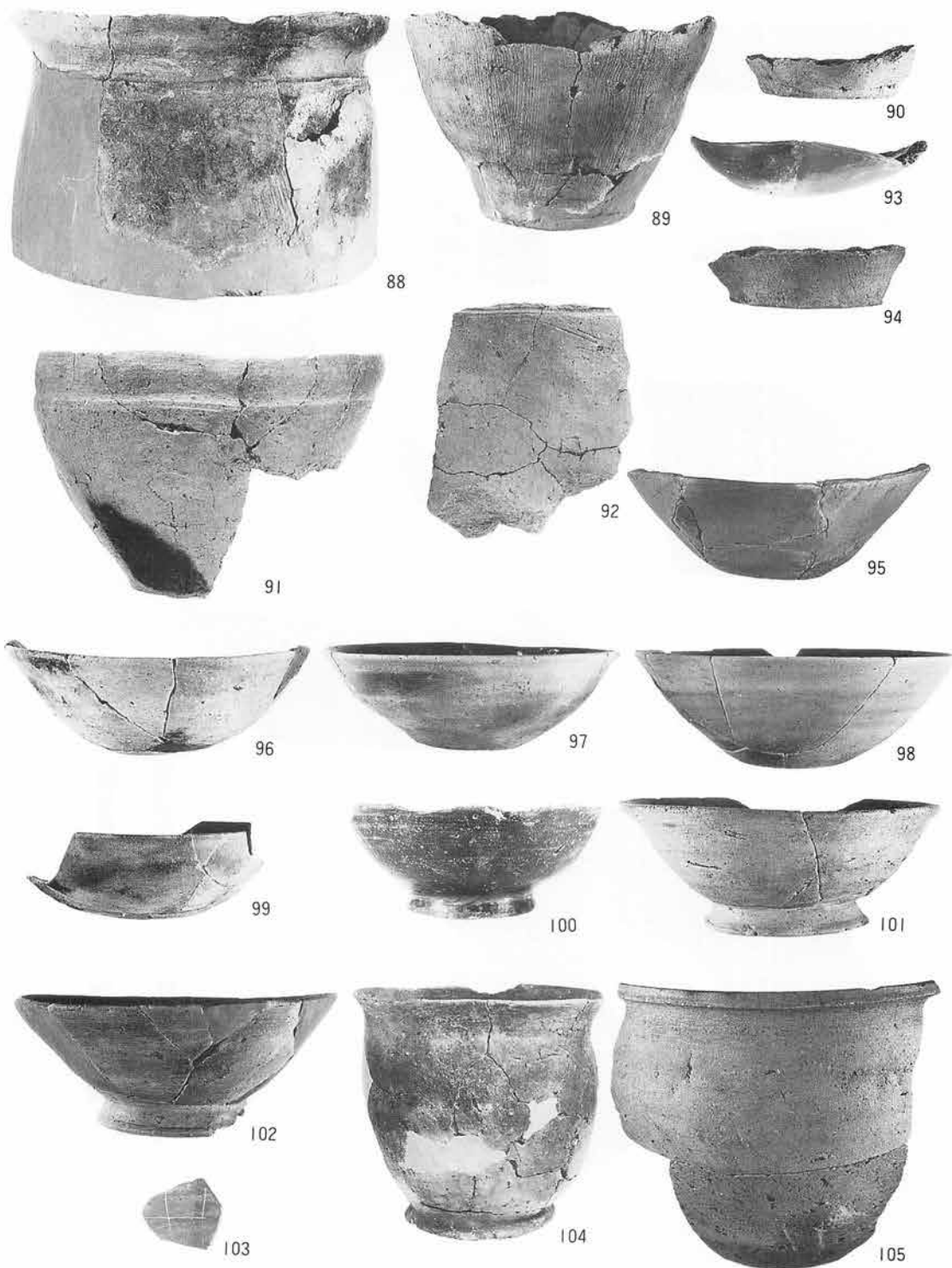
写真図版29 遺構内出土遺物一3



写真図版30 遺構内出土遺物 - 4



写真図版31 遺構内出土遺物—5



写真図版32 遺構内出土遺物－6



106



107



108



109



110

写真図版33 遺構内出土遺物一 7



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126

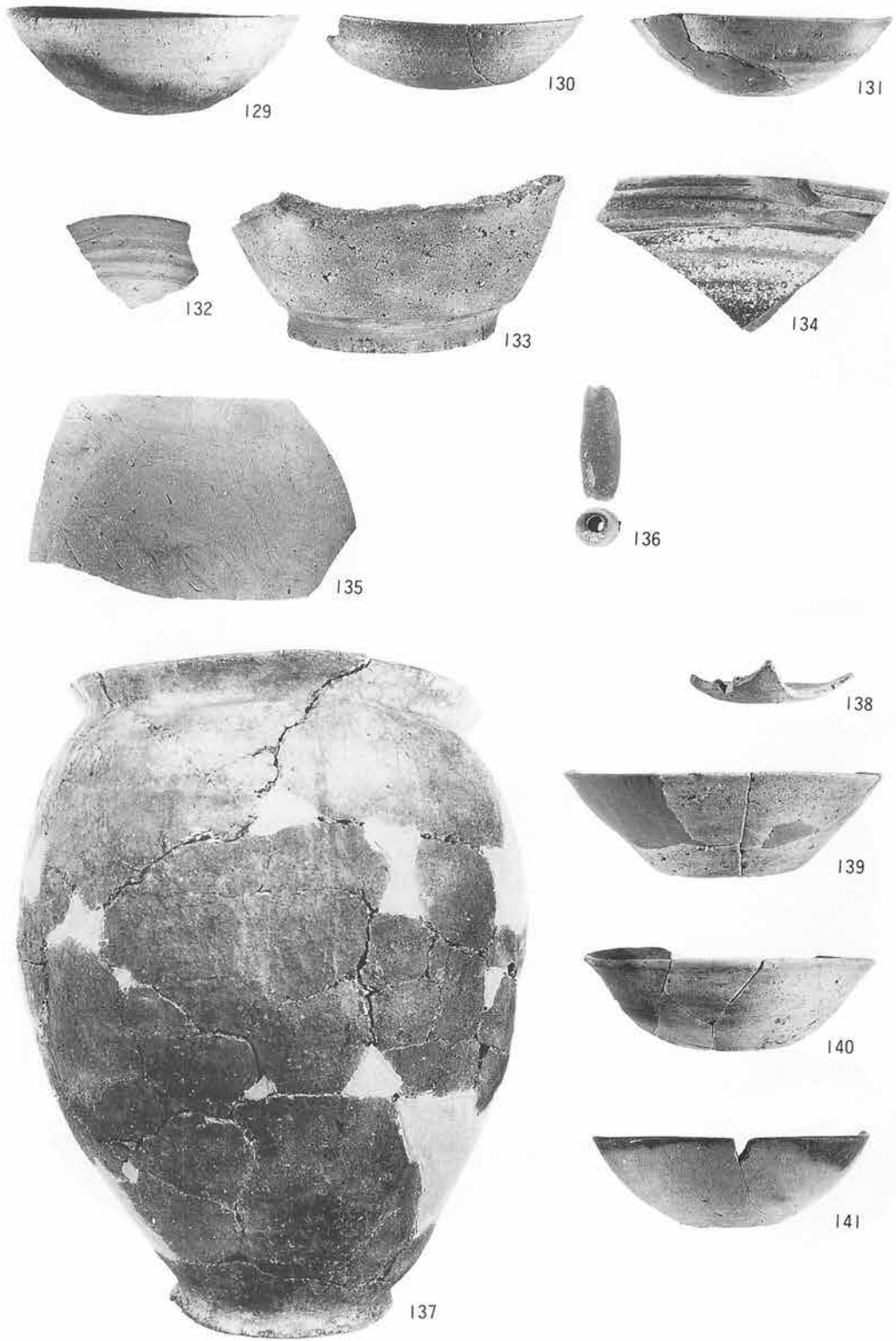


127



128

写真図版34 遺構内出土遺物－8



写真図版35 遺構内出土遺物—9



142



143



144



145



146



147



148



149



150



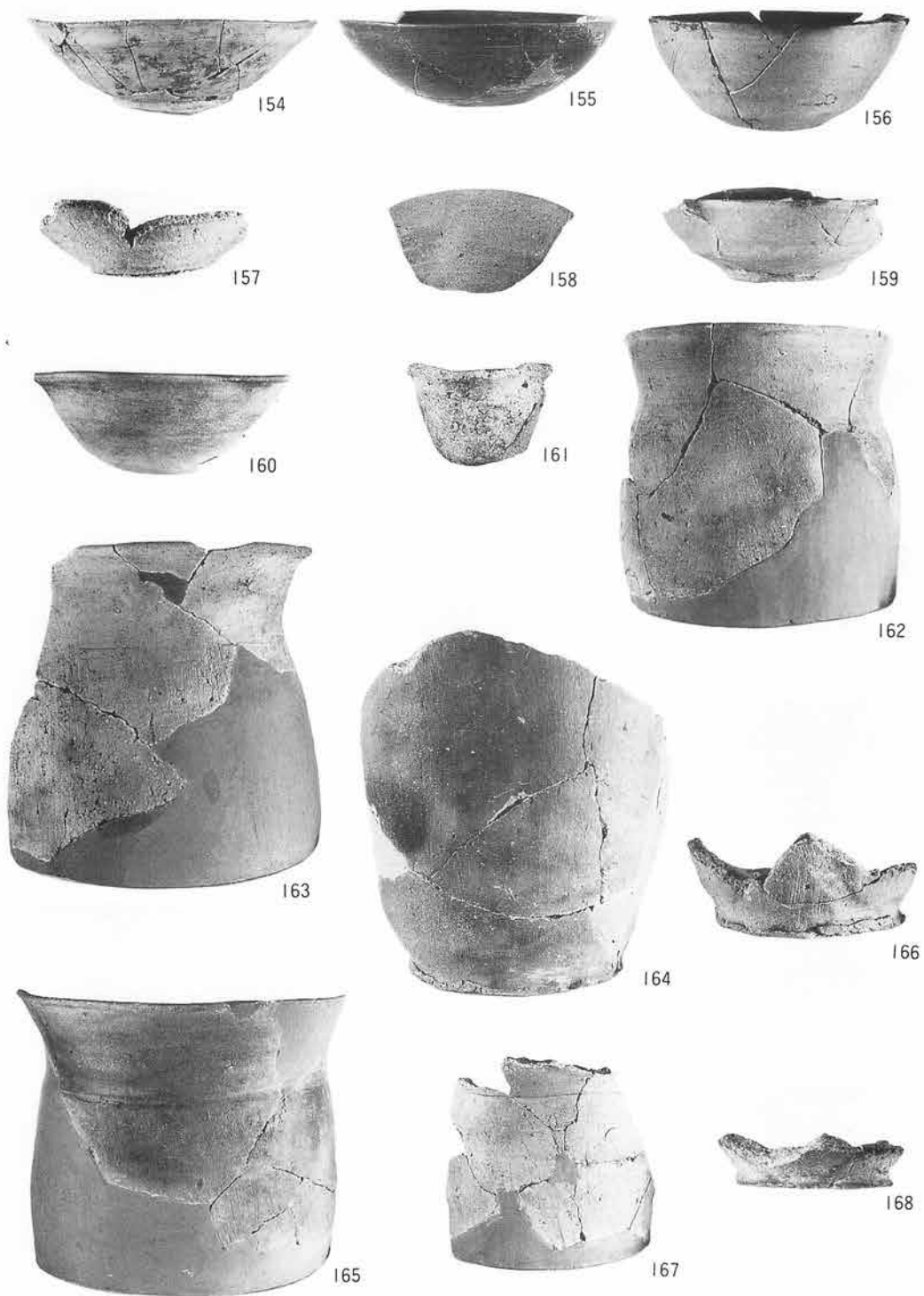
151



152



153



写真図版37 遺構内出土遺物—II—



169



170



171



172



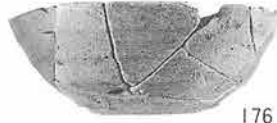
173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



186



187



188

写真図版38 遺構外出土遺物一 I



189



190



191



192



193



194



195



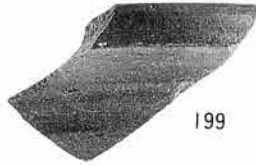
196



197



198



199



200



201



202



203

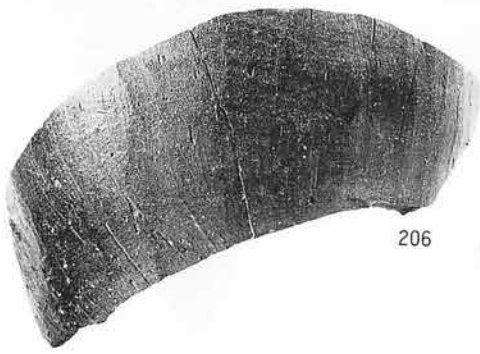


204



205

写真図版39 遺構外出土遺物-2



206



207



208



209



210



211



212



213

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實		
副 所 長	千 葉 政 男		
[管 理 課]			
管理課長	澤 田 寛	嘱 託	吉 田 十 次
主 事	佐 藤 理	〃	野 崎 他 夫
〃	久保田 幸 恵		
[調 査 課]			
調査課長	鈴 木 恵 治	文 化 財 専 門 調 査 員	金 子 昭 彦
課長補佐	三 浦 謙 一	〃	木 戸 口 俊 子
〃	高橋 與右衛門	〃	大 道 篤 史
主任文化財 専門調査員	菊 池 強 一	〃	阿 部 勝 則
〃	渡 辺 洋 一	〃	星 雅 之
〃	工 藤 利 幸	〃	羽 柴 直 人
〃	中 川 重 紀	〃	高 木 晃
〃	佐々木 清 文	〃	村 上 拓
〃	高 橋 義 俊	〃	高 橋 佐 知 子
〃	中 村 英 俊	〃	杉 沢 昭 太 郎
〃	酒 井 宗 孝	〃	溜 浩 二 郎
文 化 財 専門調査員	千 葉 孝 雄	期 限 付 専 門 職 員	鎌 田 精 造
〃	菊 池 人 見	〃	柳 田 磨
〃	伊 東 格	〃	高 橋 英 樹
〃	吉 田 充	〃	佐 藤 修 一
〃	斎 藤 邦 雄	〃	稲 垣 雅 宏
〃	高 橋 一 浩	〃	田 畑 博 之
〃	鎌 田 勉	〃	元 吉 弘 明
〃	小山内 透	〃	熊 谷 和 明
〃	松 本 建 速	〃	佐々木 裕 司
〃	笹 平 克 子	〃	千 葉 貴 子
〃	花 坂 政 博	〃	沼 田 和 宏
〃	佐々木 務	〃	後 藤 円
[資 料 課]			
資料課長	駒 嶺 高 幸		
主任文化財 専門調査員	高 橋 正 之		

報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうびい いせきだいいち じはつくつちようき ほうこくしよ							
書名	本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書							
副書名	盛岡開発事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第226集							
編著者名	伊東 格							
編集機関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	岩手県盛岡市下飯岡11-185							
発行年月日	平成7年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとみやくまどうびい 本宮熊堂B	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市	03201	LE16-211	33度	130度	19930407	14,400m ²	区画整理（盛 南開発事業） に伴う事前調 査
	もとみやあざいなり 本宮字稲荷			20分	21分	）		
	3-20、4-2			15秒	25秒	19930812		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本宮熊堂B	集落跡	奈良	竪穴住居跡	2棟	土師器坏・甕・瓶 土製勾玉、土玉			
	集落跡	平安	竪穴住居跡	7棟	土師器坏・甕・鉢・須恵器 鉄製（鋤先、紡錘車、釘、刀子）			
	散布地	近世	なし		寛永通寶、軒丸瓦破片			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第226集

本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書

盛南開発事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成7年3月10日

発行 平成7年3月20日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 ㈱杜陵印刷

〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL (0196) 41-8000